

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集

へ き ほん ごう びー
日置本郷B遺跡

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

日置本郷 B 遺跡の所在する愛知県愛西市は、平成 17 年 4 月 1 日に愛知県の西県境を流れる木曾川左岸に位置する旧海部郡佐織町・佐屋町・八開村・立田村の二町二村が合併してできた市であり、古くから木曾川下流の水郷地帯である風土を活かした文化が営まれてきた地域であります。

今回調査しました日置本郷 B 遺跡は中世から続く日置八幡宮に隣接する遺跡であり、日置八幡宮には鎌倉時代の木造獅子頭をはじめとする文化財が伝えられており、毎年二月に執り行われる管粥神事は市の民俗無形文化財として貴重なものであります。今回の調査により、奈良時代の集落と中世の日置荘に関連すると思われる遺構・遺物が確認できたことは、平安時代後期に成立したとされる尾張国日置荘の成り立ちを考えるのみではなく、愛知県の尾張地域南西部の歴史を考える上でも貴重な成果を得ることができたものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 24 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤 高明

例 言

1. 本書は愛知県愛西市日置町本郷に所在する日置本郷 B 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県道富島津島線自転車歩行者道設置工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成 21 年 12 月から平成 22 年 2 月までで、1,100m²の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、宮腰健司（本センター調査研究主任専門員）である。発掘調査は朝日航洋株式会社の支援を受けて実施した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所、愛西市教育委員会、愛西市日置町自治会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の編集は蔭山誠一が担当したが、執筆は愛知県埋蔵文化財センターの宮腰健司（第 2 章）・鬼頭剛（付論の 3・4-（1）・6-（1）・6-（3））・蔭山誠一（第 1 章・第 3 章・第 5 章・付論の 1・2・4-（2）・6-（2）・6-（3））と株式会社パレオ・ラボの中村健太郎（第 4 章 A）・黒沼保子（第 4 章 B）により分担した。また付論では愛西市教育委員会の石田泰弘氏に執筆の御協力を頂いた（付論の 5）。
7. 整理事業は蔭山誠一が担当した。整理事業は伊藤あけみ・木下由貴子・小島裕子・鈴木好美・滝 智美・時田典子・前田弘子・三浦里美・山田有美子（整理補助員）の協力を得て実施した。動物遺体の同定、木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレース作業は株式会社イビソクに委託して実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
石田泰弘・愛西市文化財審議議員（平成 21 年 12 月 24 日に視察）・北村和宏・福岡猛志

目次

第1章	調査の概要	
	1. 調査の経緯と方法	1
	2. 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章	遺構	
	1. 09A区	6
	2. 09B区	24
	3. 09C区	26
第3章	出土遺物	
	1. 土器・陶磁器	31
	2. 土製品	50
	3. 金属製品	52
	4. 石製品	54
	5. 木製品	54
第4章	自然科学分析	
	A. 日置本郷B遺跡の動物遺体同定	59
	B. 日置本郷B遺跡出土木製品の樹種同定	61
第5章	総括	
	1. 遺構の変遷	63
	2. 遺物の出土分布傾向	63
	3. 日置本郷B遺跡の特徴	66
付論		
	日置の古地理環境	67
写真図版	1～7 遺構、写真図版8～14 出土遺物	
抄録		

挿図・挿表目次

<p>図1 日置本郷 B 遺跡位置図 …………… 1</p> <p>図2 日置本郷 B 遺跡調査区位置図 ……… 2</p> <p>図3 日置本郷 B 遺跡周辺の遺跡…………… 4</p> <p>図4 09A 区遺構平面図 1 …………… 7</p> <p>図5 09A 区遺構平面図 2 …………… 8</p> <p>図6 09A 区遺構平面図 3 …………… 9</p> <p>図7 09A 区土層断面図 1 …………… 10</p> <p>図8 09A 区土層断面図 2 …………… 11</p> <p>図9 09A 区土層断面図 3 …………… 12</p> <p>図10 09A 区土層断面図 4 …………… 13</p> <p>図11 09A 区土層断面図 5 …………… 14</p> <p>図12 09Aa 区 001NR・002NR 遺構図 …… 15</p> <p>図13 09Aa 区 007SD・008SK 遺構図 …… 16</p> <p>図14 09Aa 区 014SK・015SK 遺構図 …… 17</p> <p>図15 09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 1 …… 18</p> <p>図16 09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 2 …… 19</p> <p>図17 09Ab 区 073SK・074SK・ 082SK・089SK 遺構図 …………… 19</p> <p>図18 09Ab 区 054SK 遺構図 …………… 20</p> <p>図19 09Ab 区 095SB 遺構図…………… 21</p> <p>図20 09Ac 区 041SD・043SK 遺構図 …… 22</p> <p>図21 09Ac 区 021SK・025SK・035SD・ 037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 1 …………… 23</p> <p>図22 09Ac 区 021SK・025SK・035SD・ 037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 2 …………… 24</p> <p>図23 09Ad 区 094SD・096NR 遺構図 …… 25</p> <p>図24 09B 区遺構図 …………… 27</p> <p>図25 09C 区遺構図 1 …………… 28</p> <p>図26 09C 区遺構図 2 …………… 29</p> <p>図27 09C 区遺構図 3 …………… 30</p> <p>図28 09A 区遺構出土土器・陶磁器 1 …… 32</p> <p>図29 09A 区遺構出土土器・陶磁器 2 …… 33</p> <p>図30 09A 区遺構出土土器・陶磁器 3 …… 34</p> <p>図31 09A 区遺構出土土器・陶磁器 4、 09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 36</p> <p>図32 09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 2、 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 38</p> <p>図33 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 2 …… 39</p> <p>図34 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 40</p>	<p>図35 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2 …… 42</p> <p>図36 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3 …… 44</p> <p>図37 09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 45</p> <p>図38 09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、 09A 区その他包含層・表土出土 土器・陶磁器 1 …………… 46</p> <p>図39 09A 区表土出土土器・陶磁器 2、 09Ba 区出土土器・陶磁器…………… 48</p> <p>図40 09Bb 区・09Bc 区・09Ca 区～ 09Ce 区包含層出土土器・陶磁器…………… 49</p> <p>図41 09Ce 区・09Cf 区出土土器・陶磁器… 50</p> <p>図42 土錘…………… 51</p> <p>図43 陶丸…………… 52</p> <p>図44 加工円盤…………… 53</p> <p>図45 銅銭…………… 54</p> <p>図46 鉄製品など…………… 55</p> <p>図47 鍛冶関連資料・銅滴…………… 56</p> <p>図48 石製品…………… 57</p> <p>図49 木製品…………… 58</p> <p>図50 日置本郷 B 遺跡出土木製品の 光学顕微鏡写真…………… 62</p> <p>図51 日置本郷 B 遺跡の遺構変遷…………… 64</p> <p>図52 日置本郷 B 遺跡の遺物出土分布…………… 65</p> <p>図53 愛西市日置町周辺の地籍図…………… 68</p> <p>図54 愛西市日置町周辺の等高線図…………… 71</p> <p>図55 地籍図と等高線図の対応関係…………… 74</p> <p>図56 天明五己年天王川御堀割御普請 已來之図…………… 77</p> <p>図57 日置の古地理環境想定図…………… 81</p> <p>表1 周辺の遺跡一覧…………… 5</p> <p>表2 貝類と甲殻類一覧…………… 59</p> <p>表3 爬虫類・両生類・魚類・哺乳類一覧… 60</p> <p>表4 樹種同定結果一覧…………… 61</p>
--	---

第1章 調査の概要

1. 調査の経緯と方法 (図1・図2)

日置本郷B遺跡は愛知県愛西市日置町本郷に所在する遺跡で、名古屋鉄道尾西線日比野駅より東300mの地点に位置する。本遺跡は旧佐屋町埋蔵文化財包蔵地一覧に日置本郷B遺跡(遺跡番号37005)として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所による県道富島津島線自転車歩行者道設置に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が平成20年9月に行われた結果、奈良時代から室町時代の遺構・遺物が全ての試掘調査地点において確認された。この為、県道富島津島線自転車歩行者道設置事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成21年12月から平成22年2月の期間で、発掘調査を実施した。

調査面積は1,100㎡で、調査地点は日置八幡宮の西側の地点をA区、日置八幡宮の南側をB区・C区の大きく3ヶ所に分け、また発掘調査に伴う排土置場等の設置の為、A区を北からAa区～Ad区の4ヶ所(調査期間は平成21年12月～平成22年2月上旬)に、B区を北からBa区～Bc

区の3ヶ所(調査期間は平成22年2月中旬)に、C区をCa区～Cc区の3ヶ所(調査期間は平成22年2月中旬～下旬)に細分して調査を行った。発掘調査の終了後、平成23年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる旧水田埋立て土と旧水田耕作土、近世以後の造成土と思われる堆積を除去した後、発掘調査作業(人力による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察・地元関係者への説明会など)を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

遺跡の地元説明会は平成22年1月30日(土)に行い、90名の参加者を得た。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

(図3・表1)

日置本郷B遺跡(5)の所在する愛知県愛西市は、濃尾平野を流れる木曾川の左岸にあり、木曾川により形成された沖積平野の三角州地帯にあり、日置本郷B遺跡のある海部郡南西部の愛西市南部(旧海部郡佐屋町から立田村)から弥富市にかけては三角州地帯の南縁部に位置する。さらに木曾川左岸になる尾張地域では、かつての木曾

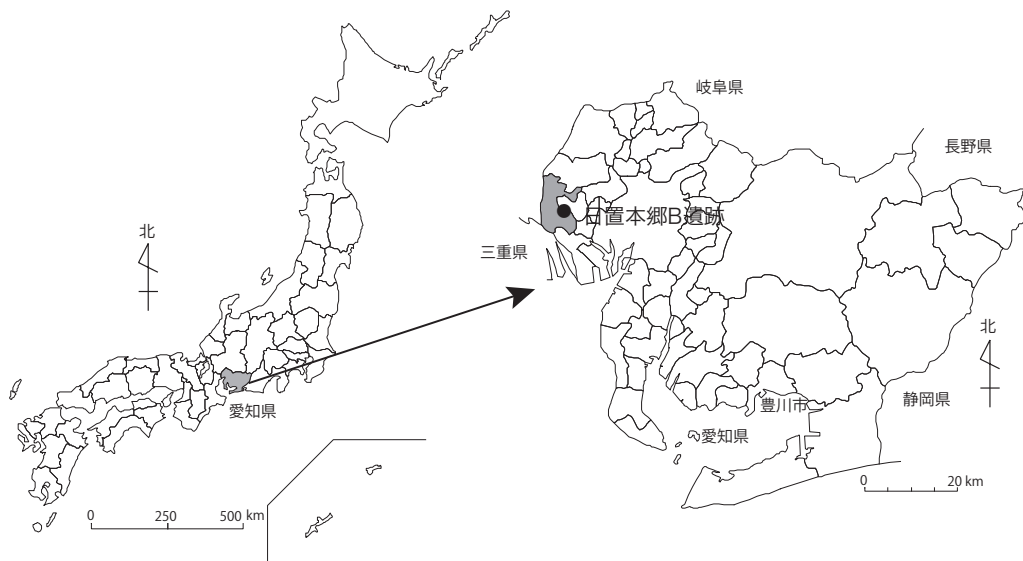


図1 日置本郷B遺跡位置図

日置本郷 B 遺跡

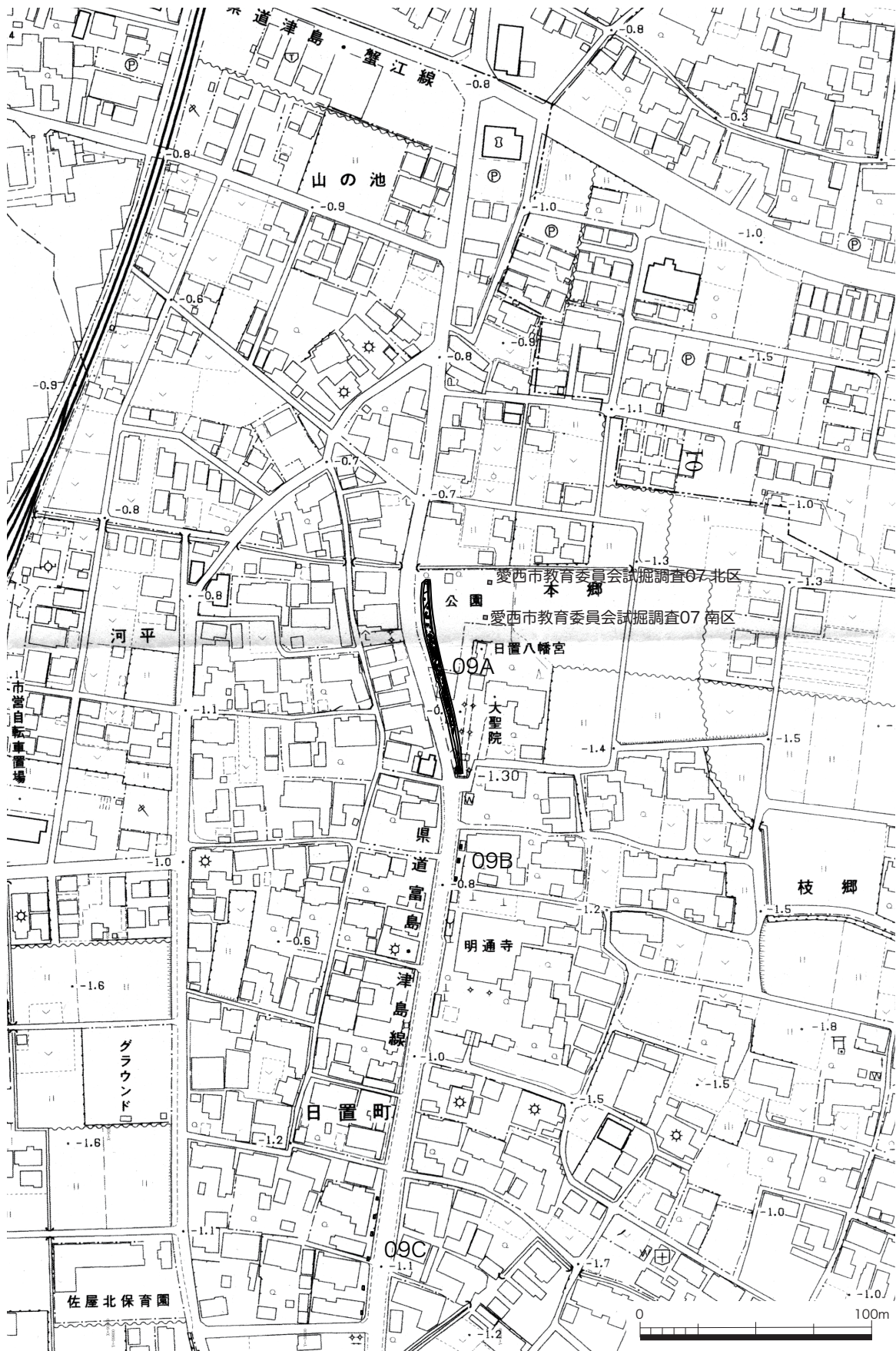


図2 日置本郷 B 遺跡調査区位置図 (1/2,500)

川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は愛西市南東部を津島市域から流れてくる善太川が北西から南東に流れて愛西市の南を画しており、海部郡蟹江町の南端にて日光川に合流して伊勢湾に注いでいる。また現在は廃川となっている佐屋川が愛西市北西部から日置本郷B遺跡の西1.75kmの地点を大正11年まで南に流れており、弥富市西部にて木曾川に合流していた。

次に、日置本郷B遺跡（第2図5、以下遺跡番号を付す）周辺の遺跡の形成時期を概観してみると、当遺跡周辺では縄文海進以後弥生時代に至るまでこの地域全体が海面下と考えられており、縄文時代以前の遺跡や遺物は確認されていない。

当遺跡周辺の地域において人間の活動が確認されるのは、愛西市南河田町にある弥生時代中期前葉の八竜遺跡（73）で、少数であるが貝殻施文の太頸壺形土器の口縁部が出土している。続く遺跡としては、津島市に所在する寺野遺跡（117）や宇治遺跡（119）が弥生時代中期中葉から中期後葉に営まれており、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての遺跡としてS字状口縁台付甕形土器やパレススタイル土器などが出土した愛西市東西野遺跡（92）や多孔銅鍬が確認されている津島市埋田遺跡（132）が著名である。

古墳時代の遺跡では、三角縁神獸鏡が伝えられている奥津社古墳（67）、櫛描き文様のある円筒埴輪が出土した諸桑遺跡（72）、二条の周溝に囲まれた円墳がみつかった川田遺跡（79）が存在する。特に川田遺跡では、発掘調査によって、5世紀の円筒形埴輪と形象埴輪、須恵器などが出土しており（愛知県埋蔵文化財センター2002）、形象埴輪には武人や巫女、馬など多様な形態のものがあり、古墳時代中期の文化がこの地域にも伝わり、乗馬等も営んだ首長が存在していたことがわかる。

つづく古代の遺跡は、日置本郷B遺跡周辺の愛西市日置町から柚木町や佐屋町にかけて濃密に分布しており、一つの遺跡群と捉えることが可能と思われる。同様な古代の遺跡群として稲沢市三宅廃寺（149）のある稲沢市南西部（旧中島郡平

和町南東部）からあま市美和町蜂須賀の一带、北浦遺跡（68）や古御堂遺跡（69）のある愛西市千引町から先に述べた諸桑遺跡（72）のある愛西市諸桑町を経て埋田遺跡（132）のある津島市埋田町にかけての一带、稲沢市尾張国分寺と同範の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦が指摘されている淵高廃寺（91）のある愛西市西川端町周辺の一帯、観音町A遺跡（129）のある津島市観音町から愛西市町方町の一帯なども、古代の遺跡が集中して分布しており、地域的まとまりが存在していた可能性が考えられる。また淵高廃寺と同じく尾張国分寺と同範関係を持つ軒瓦が出土している宗玄坊廃寺（62）が愛西市宮地町にて確認されており、遺跡の究明が待たれる。

中世では、古代の遺跡よりさらに遺跡が増加し、古代の遺跡とほぼ重なる地点とさらに津島市本町周辺の津島神社の門前町につながる遺跡群の存在や愛西市南部の西保町・東保町・西條町・東條町・大井町の東西約4kmにわたる遺跡群が認められるようになる。本格的な発掘調査が待たれるところであるが、中世の遺跡群は日置荘や櫛江荘をはじめとする荘園や地名に残る中世国衙領としての保などの存在を反映している可能性があるものである。また、現在は木曾川河床になっている地点において、高畑水没遺跡や日原水没遺跡などが存在する。

当遺跡周辺は、日置八幡宮所蔵の懸仏に残る紀年銘より尾張国日置荘との関係が深い遺跡と考えられ、また近世には佐屋街道が遺跡の西方を通っていた可能性が高い。なお、日置八幡宮には先に述べた中世の懸仏や木造獅子頭が所蔵されている。

日置本郷 B 遺跡



図3 日置本郷 B 遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	山の池遺跡		78	八町遺跡	古墳～鎌倉
2	日置八幡社遺跡	弥生・古代～近世	79	川田遺跡	平安～鎌倉
3	中前面遺跡	中世～近世	80	前田遺跡	平安～鎌倉
4	日置本郷A遺跡	古代・近世	81	所司原遺跡	古墳
5	日置本郷B遺跡	中世	82	水無野遺跡	古墳～室町
6	河平遺跡	中世～近世	83	輪廻遺跡	古墳
7	八百歩遺跡	古代～中世	84	高砂遺跡	古墳
8	上川田A遺跡	中世～近世	85	姥ヶ森古墳	古墳
9	上川田B遺跡	中世	86	久田遺跡	古墳～平安
10	二橋A遺跡	近世	87	坪堀遺跡	古墳～平安
11	二橋B遺跡	古代～中世	88	江東遺跡	古墳
12	米野A遺跡	古代～中世	89	山中遺跡	弥生～奈良
13	白山遺跡	中世	90	川原前遺跡	奈良
14	米野B遺跡	中世	91	淵高庵寺	奈良
15	稲葉本郷遺跡	中世～近世	92	東西野遺跡	弥生～奈良
16	西出割遺跡	近世	93	犬城遺跡	古代～中世
17	松原遺跡	古代～中世	94	井堀・野崎遺跡	古墳～中世
18	五反田遺跡	中世	95	野崎北出遺跡	古墳～中世
19	内佐屋郷遺跡	古代～中世	96	中町屋遺跡	古墳～中世
20	砂山A遺跡	弥生～中世	97	西溝口遺跡	古墳～中世
21	砂山B遺跡	古代～中世	98	畑西・池ノ頭遺跡	古墳～中世
22	庄屋敷遺跡	古代～中世	99	溝口城跡	安土桃山
23	元屋敷遺跡	古代～中世	100	今村・井波遺跡	弥生～中世
24	河原遺跡	中世	101	今村・西出遺跡	弥生～中世
25	道西遺跡	近世	102	五丁遺跡	古代～中世
26	道東A遺跡	中世～近世	103	坂田屋敷遺跡	古代～中世
27	道東B遺跡	中世～近世	104	宮郭遺跡	古代～中世
28	道東C遺跡	中世～近世	105	道外遺跡	古代～中世
29	宅地A遺跡	近世	106	大辻遺跡	古墳・中世
30	宅地B遺跡	古代	107	蓮原遺跡	古墳～中世
31	北河原A遺跡	中世～近世	108	古道遺跡	古代～中世
32	星の宮遺跡	中世～近世	109	瀬戸遺跡	中世
33	東河原遺跡	中世～近世	110	大寺遺跡	弥生～鎌倉
34	権右遺跡	中世	111	下郷合遺跡	弥生
35	四町遺跡	中世～近世	112	蜂須賀城館跡	室町～江戸
36	西善太遺跡	中世～近世	113	札掛遺跡	弥生～安土桃山
37	東善太遺跡	中世～近世	114	富士社古墳周辺遺跡	古墳～中世
38	西条八幡社遺跡	中世～近世	115	牧野遺跡	弥生～鎌倉
39	伊重A遺跡	中世～近世	116	寺野庵寺(新光寺跡)	白鳳
40	伊重B遺跡	中世～近世	117	寺野遺跡	弥生～江戸
41	井桁A遺跡	中世～近世	118	蛭間遺跡	弥生～室町
42	東条八幡社遺跡	中世	119	宇治遺跡	古墳～室町
43	井桁B遺跡	中世～近世	120	観音堂遺跡	古墳～江戸
44	北川原B遺跡	中世～近世	121	亀田遺跡	平安～室町
45	長楽寺遺跡	中世～近世	122	旭羊毛構内遺跡	平安～室町
46	城之内遺跡	中世～近世	123	大木遺跡	古墳～室町
47	西浦遺跡	中世	124	元屋敷遺跡	弥生～鎌倉
48	大之内遺跡	中世	125	光正寺遺跡	弥生～室町
49	観音堂遺跡	中世	126	越津古墳	古墳
50	屋敷割遺跡	中世～近世	127	中一色遺跡	鎌倉～江戸
51	堤外新田遺跡	近世	128	観音町B遺跡	古墳～江戸
52	森西遺跡	中世	129	観音町A遺跡	古墳
53	本西遺跡	近世	130	本町遺跡	平安～鎌倉
54	天王塚		131	今市場遺跡	鎌倉
55	浦田面A遺跡	中世～近世	132	埋田遺跡	弥生～鎌倉
56	浦田面B遺跡	中世～近世	133	深坪遺跡	鎌倉～室町
57	前田面遺跡	中世～近世	134	南本町遺跡	弥生～江戸
58	郷浦遺跡	中世	135	愛宕遺跡	鎌倉～室町
59	郷西遺跡	中世～近世	136	橋町遺跡	古墳中期
60	郷前遺跡	中世	137	本町遺跡	中世～近世
61	石田古墳	古墳	138	本町3丁目遺跡	中世～近世
62	宗玄坊庵寺	古代	139	秋前町2丁目遺跡	中世
63	大御堂遺跡	平安～鎌倉	140	秋前町3丁目遺跡	中世
64	上栄遺跡	平安	141	愛宕町4丁目遺跡	中世
65	東川遺跡	平安～鎌倉	142	丸瀬遺跡	古墳
66	屋敷遺跡	弥生～平安	143	西海塚遺跡	古墳・中世
67	奥津社古墳	古墳	144	山王遺跡	古代～中世
68	北浦遺跡	古墳～室町	145	上屋敷遺跡	中世
69	古御堂遺跡	平安	146	出口遺跡	古代～中世
70	堅切遺跡	古墳	147	折口遺跡	中世
71	諸桑庵寺	奈良～平安	148	郷内遺跡	古代～中世
72	諸桑遺跡	弥生～鎌倉	149	三宅庵寺	奈良
73	八竜遺跡	弥生～鎌倉	150	横枕遺跡	弥生～中世
74	諸桑古墳	古墳	151	粟屋敷遺跡	古代
75	高台遺跡	平安	152	細野古墳	古墳
76	西浦遺跡	平安	153	角野古墳	古墳
77	郷前遺跡	平安～鎌倉			

<参考文献>

吉田富夫 1968 『津島市埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会

伊藤晃雄 1970.3 「寺野遺跡」『津島市史資料編1』津島市教育委員会

岩野見司 1976.9 「愛知県海部郡佐織町奥津社の三角縁神獸鏡について」『考古学雑誌 62-2』

岩野見司・服部元之 1987 「第6編考古」『佐織町史』資料編2、佐織町役場

佐織町史編さん委員会 1987 『佐織町史』通史編、佐織町役場

赤塚次郎他 1991.6 「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム2』愛知考古学談話会

服部元之 1996 「第7編考古」『八開村史』資料編2、八開村役場

服部元之 1996 「第二章考古」『佐屋町史』通史編、佐屋町史編纂委員会

木川正夫・蔭山誠一他 2002 『川田遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

蔭山誠一 2008 「愛知県日置八幡宮所蔵木造獅子頭考」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号、愛知県埋蔵文化財センター

第2章 遺構

1. 09 A区

09 A区は日置八幡宮の西側に設けられた、東西幅約 6 m、南北長約 100m の細長い調査区である。調査は自動車等の進入路と廃土処理の関係から、Aa・Ab・Ac・Ad の4区に分けて行った。旧地形は、Ab区からAc区にかけては微高地部に、Aa区の北から西側と、Ac区南半からAd区は低地部となる。微高地部分の基本層序は、上位より表土—黒（暗）褐色砂質シルト—黄褐色シルト—黒褐色砂質シルト—暗灰色砂質シルト・黄褐色シルト質中粒砂（基盤）で、黒褐色砂質シルト層に古代から中世の遺物が包含される。この包含層である黒褐色砂質シルト層は概ね上下2層に区分されるが、明瞭な時期差は確認できなかった。遺構は標高-180～-200cmの黒褐色砂質シルト層下位及び基盤上面で検出している（図4～図11）。

(1) 09Aa区

001NR・002NR 001NRは灰オリーブ色中粒砂を、002NRは黒褐色砂質シルトを埋土とする落ち込み。両遺構とも低地部の肩に堆積した一連の埋土で、北側を流れる水路の旧流路に切られている。001NRが中世後半期から江戸時代、002NRが中世後半期になる（図12）。

003SK 黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形を呈する土坑で、長径100cm、短径81cm、深さ17cmを測る。山茶碗の碗・小皿片、灰釉陶器片が上位・下位の区別無く出土している（写真図版2）。時期は中世後半期と思われる。

005SK 003SKと同様に黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形の土坑で、長径102cm、短径85cm、深さ18cmを測る。極めて脆い骨小片が上位から中位にかけて出土している。平面形は基盤面において検出したが、骨片の出土高をみると、黒褐色砂質シルト層内に堀肩があると推定される（写真図版2）。時期は中世後半期と思われる。

006SK 暗オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする、長径26cm、短径25cm、深さ25cmの円形を呈する土坑で、上位で焼土塊が出土している。

007SDに切られる。

007SD 幅118cm、深さ12cmを測り、断面が逆台形を呈する。須恵器・土師器甕が出土する（図13）。

008SK 埋土を観察すると、オリーブ黒色砂質シルトを切るように黒褐色砂質シルトが堆積しており、2基の土坑が重なっている可能性がある。黒褐色砂質シルトの最上位で、14世紀中頃の完形に近い北部系陶器の小皿（図28-43）が出土している（図13）。

014SK・015SK 包含層である黒褐色砂質シルト層を掘削中に銅銭が出土したが、地点を確認することはできなかった。その後周囲を精査したところ、014SKの南東部1/2と、その下位で015SKを検出した。014SKは長径135cm、短径120cm、深さ15cmの円形または隅丸方形を呈する土坑、015SKは長径158cm、短径135cm、深さ37cmの隅丸方形を呈する土坑で、015SK上位よりひとかたまりの状態でも01～M10の10枚の銅銭が出土している。また黒褐色砂質シルト層を掘削中に出土した12枚の銅銭（図45-M11～M22については、上部の014SKに所属する可能性が高い（図14・写真図版2）。時期は中世前半期か。

(2) 09Ab区

054SK 長径384cmを測る大型の土坑。底面には激しい凹凸があり、掘り込み面からみると、近代以降の遺構と考えられる（図18）。

095SB 061SK・062SK・063SK・066SK・077SK・078SKで構成される南北2間×東西2間以上の掘立柱建物で、柱間は南北が約150cm、東西が約135cmとなる。柱穴は径23～44cm、深さ17～31cmを測り、061SK・063SK・066SKでは断面の観察で柱痕が確認されている。またやや位置がずれる055SKをこの建物の柱穴とすると、総柱の掘立柱建物になる可能性も考えられる（図19・写真図版3）。時期は063SK出土の北部系陶器の山茶碗を考えると、14世紀後

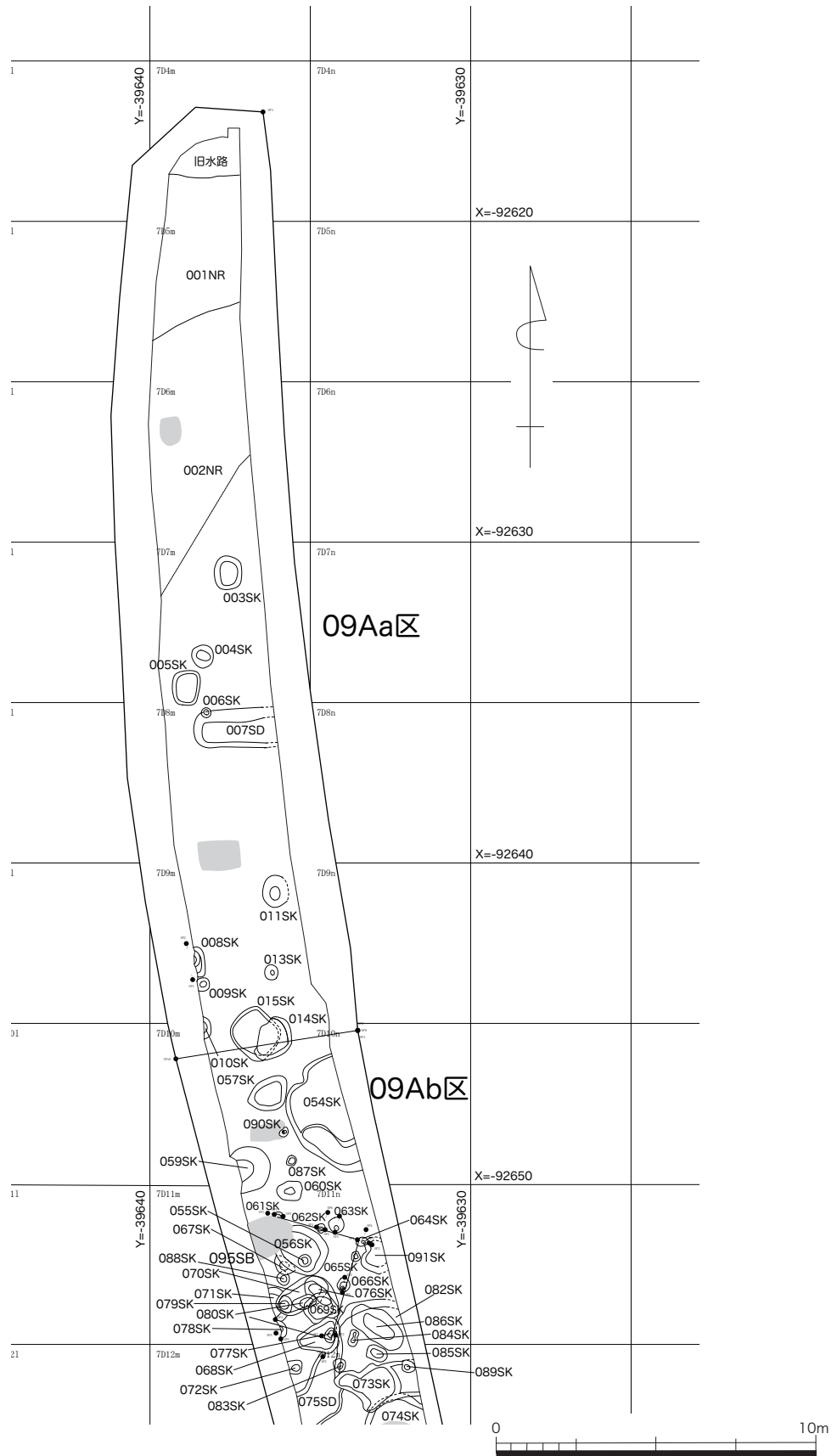


図4 09A区遺構平面図1 (1/200)

日置本郷 B 遺跡

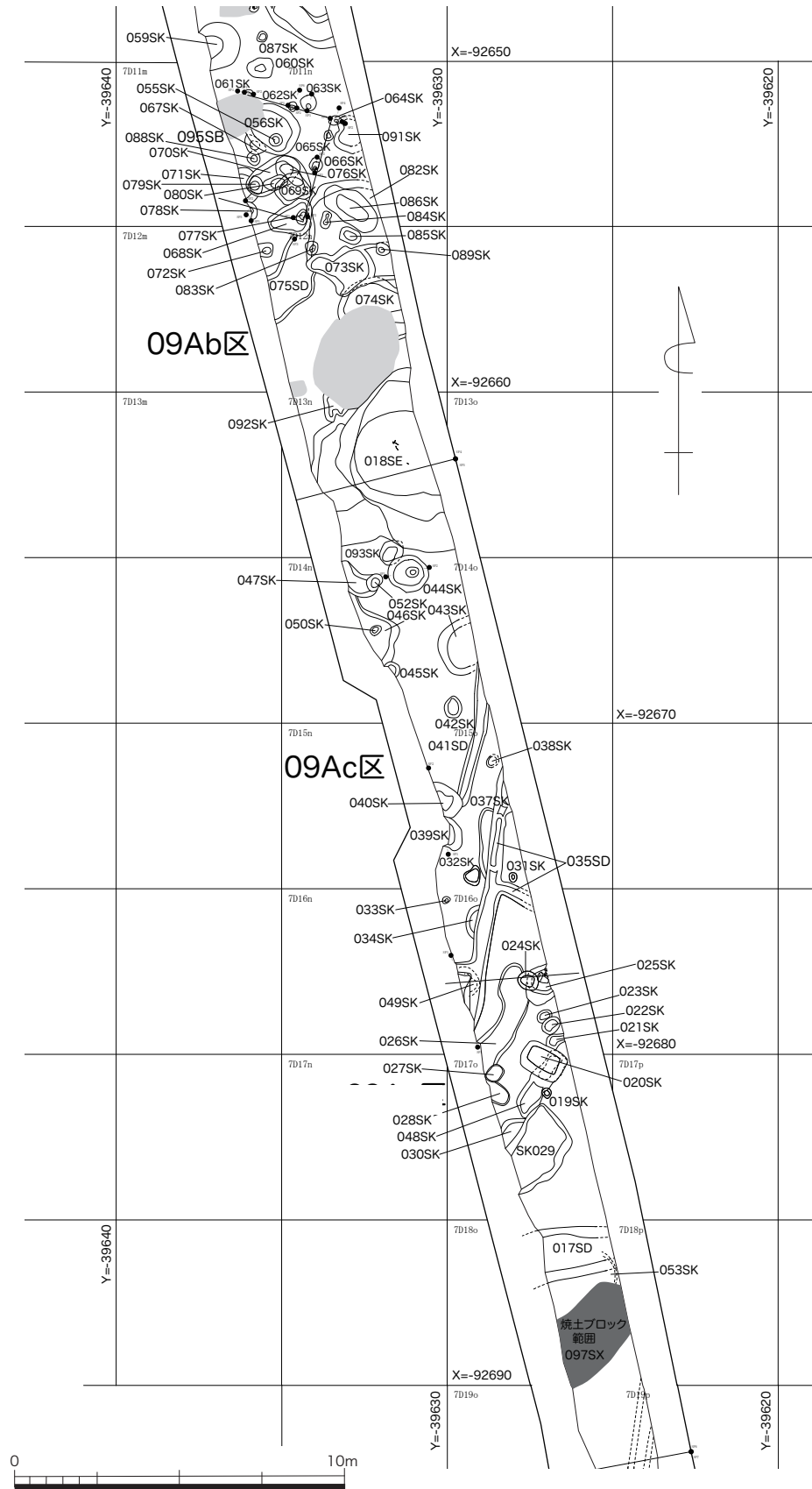


図5 09A 区遺構平面図2 (1/200)

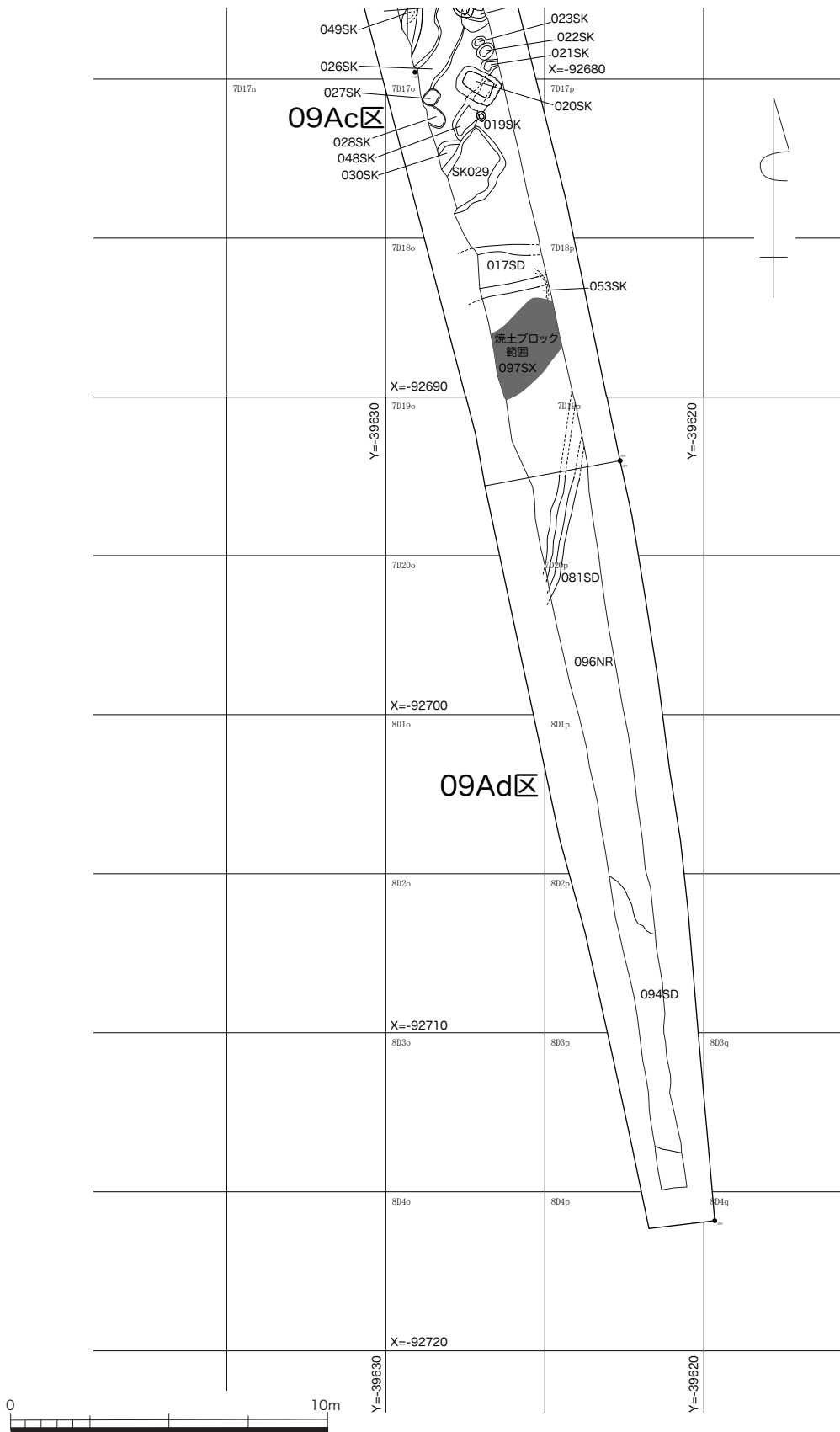


図6 09A区遺構平面図3 (1/200)

日置本郷 B 遺跡

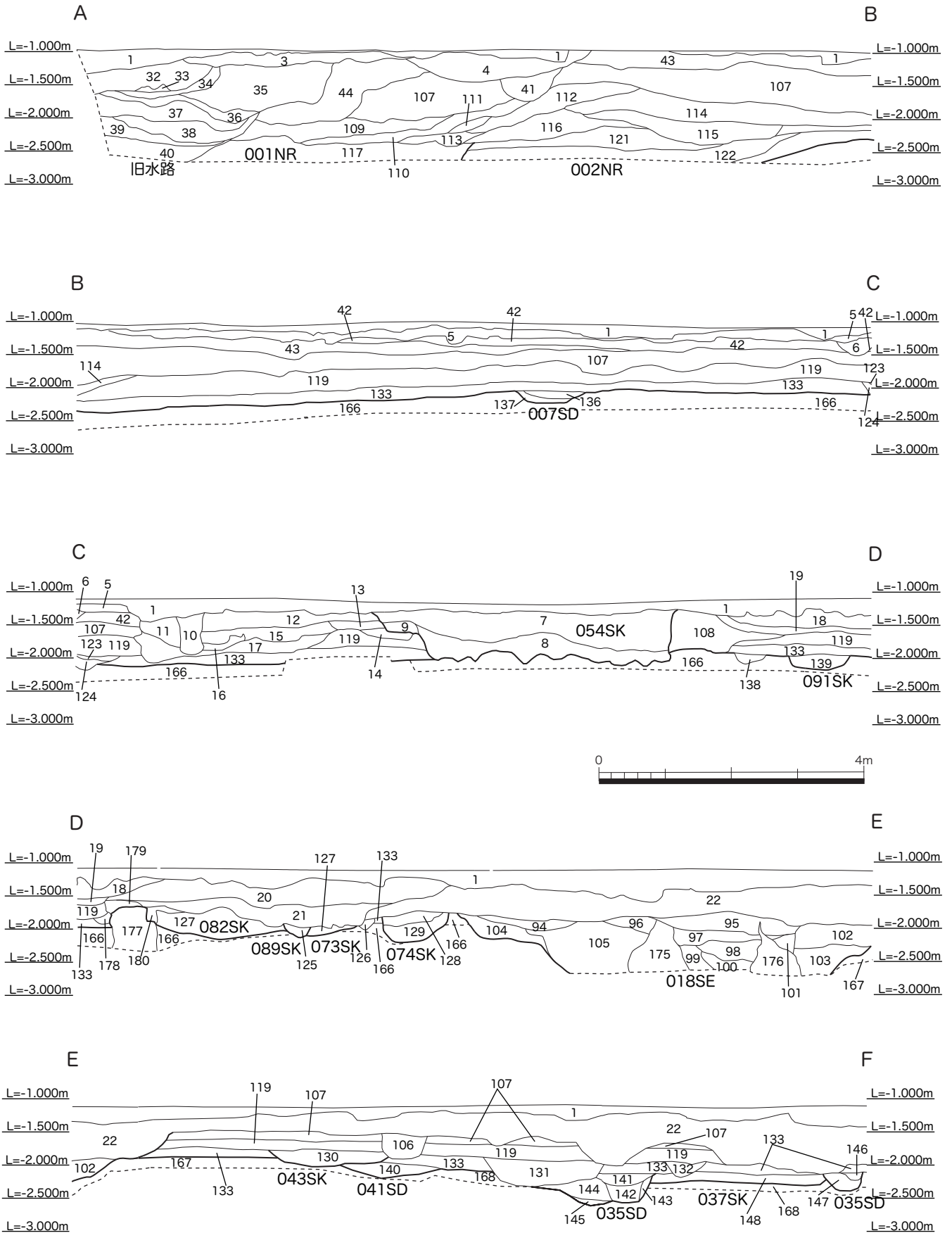


图7 09A 区土層断面图1 (1/80)

日置本郷 B 遺跡

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを多く含む。(前の神社の宅盤)レンガを含む。
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む。(神社の基礎)
5. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多く含む。
6. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト
7. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
8. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
9. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
11. 2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
12. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
13. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
14. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
15. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分のブロックを多く含む。
18. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(水道管の掘り方)
19. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(水道管の掘り方)
20. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む

21. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
22. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
23. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
24. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 5cm大の円礫を充填
25. 10YR3/4 暗褐色砂質(中粒)シルト 碎石を部分的に含む(整地土)
26. 10YR3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
27. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
29. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
30. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 5cm大の礫を多く含む
31. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
32. 10YR4/4褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む(神社の基礎)
33. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
34. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルト
35. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
36. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
37. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
38. 5Y4/1灰色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
39. 5Y5/1灰色シルト質(中粒)砂 酸化鉄分を多く含む。
40. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト

41. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
42. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
43. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
44. 2.5Y4/3オリーブ褐色(中粒)シルト
45. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 貝殻片を多く含む
46. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
47. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
48. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
49. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
50. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
51. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 2.5Y3/2黒褐色シルトブロックを少量含む
52. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む 貝を多く含む
53. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
54. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂ブロックを含む
55. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 幅3cm程の転圧されたシルト層が4層水平に堆積 道路あとか?
56. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
57. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
58. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト
59. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
60. 10YR4/3 灰黄褐色砂質(中粒)シルト

61. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
62. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトブロックを含む
63. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む
64. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
65. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
66. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
- 67.2.5Y5/4 黄褐色シルト
68. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
69. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
70. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト

図9 09A 区土層断面図3 (1/80)

第2章 遺構

71. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト
72. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
73. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分少量含む
74. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
75. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
76. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
77. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
78. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
79. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックをを多く含む
80. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 瓦片を含む
81. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに5Y3/1 オリーブ黒色シルトブロックを少量含む
82. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
83. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックをを含む
84. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
85. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
86. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 近世陶器を含む
87. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに炭化物を含む
88. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
89. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
90. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
91. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
92. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(鉄分硬化)
93. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 木質を多く含む
94. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
95. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
96. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
97. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
98. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
99. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
100. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
101. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
102. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
103. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む
104. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の斑土
105. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
106. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
107. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
108. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
109. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂 酸化鉄分を多く含む。
110. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト
111. 2.5Y4/1黄灰色砂質(中粒)シルト
112. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
113. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
114. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
115. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
116. 10YR3/4暗褐色砂質(中粒)シルト2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。
117. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂 酸化鉄分を含む。
118. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
119. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
120. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
121. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
122. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む 包含層上位で遺物を取り上げ
123. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを多く含む
124. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを含む
125. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
126. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
127. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
128. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
129. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
130. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
131. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
132. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄色褐色シルト質中粒砂の斑土
133. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
134. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げAa区から続く包含層と同一層であるかは不明
135. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げ
136. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む。
137. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
138. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
139. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
140. 2.5Y4/1 黄灰色砂質(中粒)シルト

図 10 09A 区土層断面図 4 (1/80)

日置本郷 B 遺跡

141. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
142. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトを含む
143. 5Y4/1 灰色シルト質中粒砂に5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
144. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
145. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
146. 2.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
147. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
148. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
149. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
150. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
151. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
152. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
153. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトと5Y4/3 暗オリーブ色シルトの斑土
154. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトシルト質多く硬くしまる 包含層2として遺物を取り上げ
155. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 焼土ブロック、炭化物を多く含む 包含層3で遺物を取り上げ 平面図に範囲あり、Dot.017、Dot.018出土
156. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂を含む 包含層3として取り上げ
157. 2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂の斑土
158. 7.5Y5/1 灰色シルト質中粒砂 包含層4として遺物を取り上げ
159. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
160. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 酸化鉄分を多く含む 包含層4として遺物を取り上げ
161. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
162. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
163. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
164. 7.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
165. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む 包含層2として遺物を取り上げ
166. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
167. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
168. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
169. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
170. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 硬くしまる(基盤層)
171. 5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
172. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
173. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
174. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(基盤層)
175. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(噴砂)
176. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む、5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を縞状に含む。(噴砂)
177. 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)
178. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
179. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトと2.5Y7/4浅黄褐色中粒砂の斑土
180. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
181. 2.5Y3/3 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)

図 11 09A 区土層断面図 5 (1/80)

半から 15 世紀と考えられる。

095SB 付近では、056SK・070SK・073SK・074SK・075SK・082SK・086SK・091SK など長径 100～200cm、深さ 20～30cm を測る楕円形または不定形な大型土坑連続して掘削されている。遺構の性格は不明であるが、時期は 096SB とほぼ同時期の遺構群とみることができ、074SK からは大塚期にかかる重圏皿(図 31-153)が出土している。068SK は近世か(図 17)。

(3) Ac 区

017SD 南側に落ち込む微高地の肩部分に東西に走る幅 165cm、深さ 70cm の溝。時期は 18 世紀後半。

018SE Ac 区調査段階で南半部が確認されていたが、上部のみ掘削するにとどめ Ab 区調査時に改めて全形を検出し掘削した。018SE は検出段

階で、南北 573cm、東西 363cm、深さ 80cm を測る大型の井戸で、断面観察では径約 180cm を測る井戸枠の掘り込みが確認されるが、噴砂痕のためか平面でははっきりしなかった。底面を -270cm まで掘削して写真撮影・測量を行った後、重機によってさらに下位まで掘り下げたところ、-303～-314cm の高さで木組みの井戸枠上端が確認された。その時点で湧水が激しくなったため、更なる掘削は断念し、木組みの一部(図 49-W01～W05)のみを取り上げた(図 15・写真図版 5)。時期は 14 世紀後半～15 世紀。

020SK 長径 130cm、短径 92cm、深さ 28cm を測る隅丸方形を呈する土坑。須恵器・灰釉陶器・清郷型鍋が出土する。

025SK・049SK 025SK は南北 104cm、深さ 55cm の土坑で、上位で長径 41cm、短径

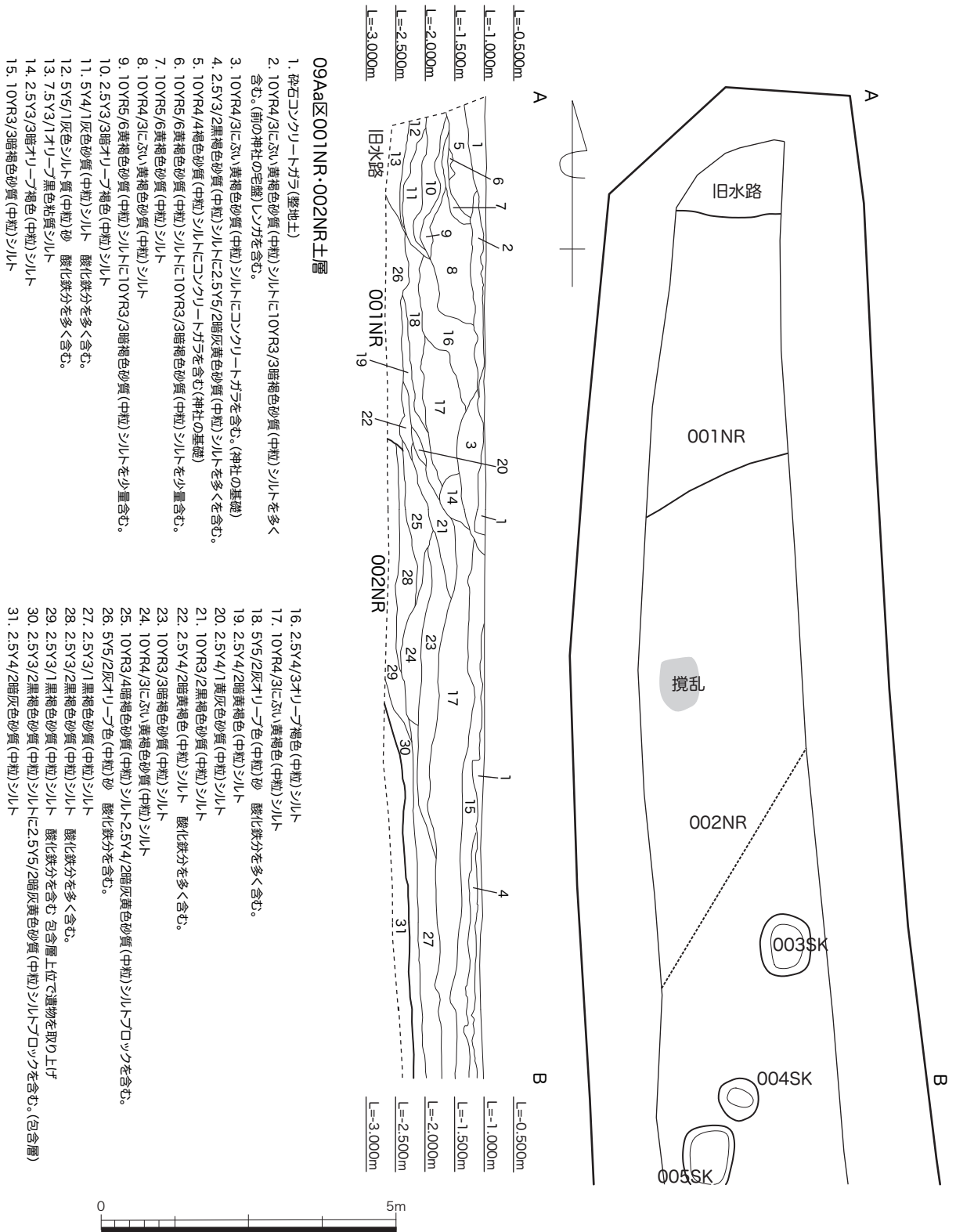
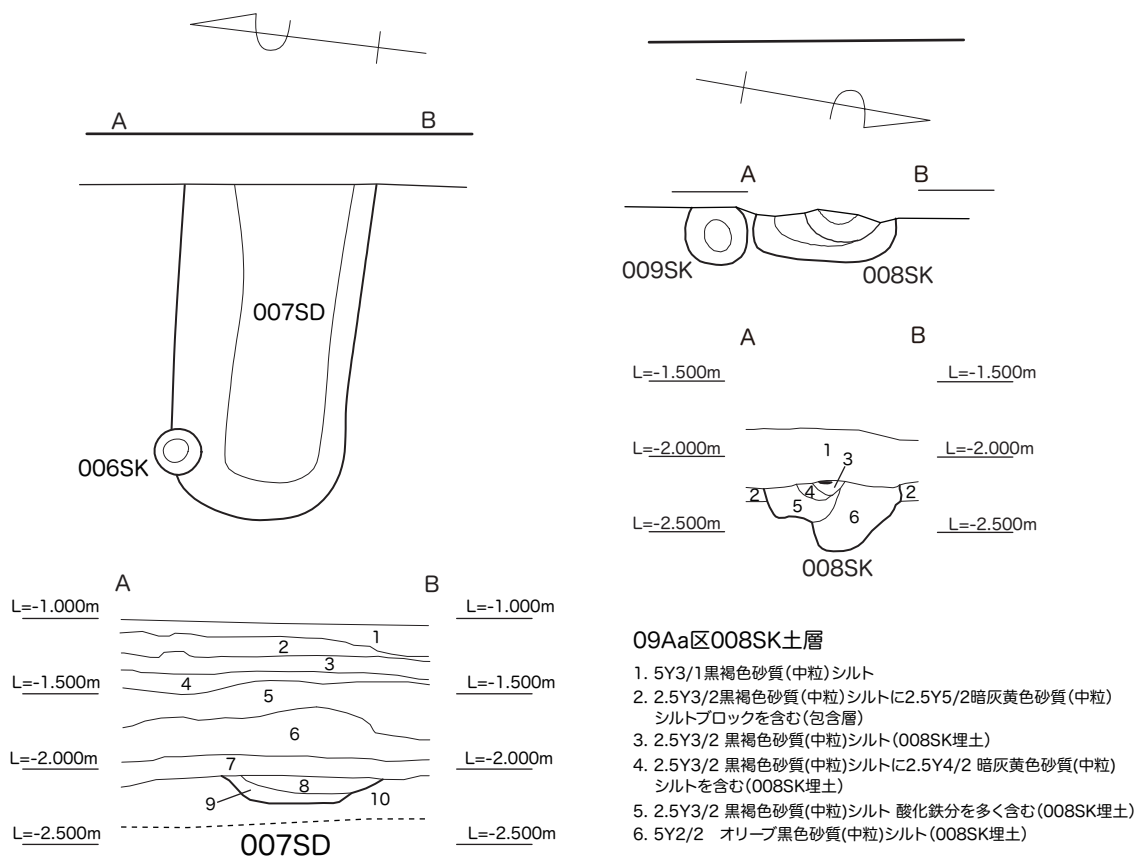


図12 09Aa区001NR・002NR遺構図(1/100)

日置本郷 B 遺跡



09Aa 区 007SD 土層

1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多く含む
3. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
4. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
6. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む(包含層)
8. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
9. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト

09Aa区008SK土層

1. 5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む(包含層)
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト(008SK埋土)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトを含む(008SK埋土)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(008SK埋土)
6. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(008SK埋土)



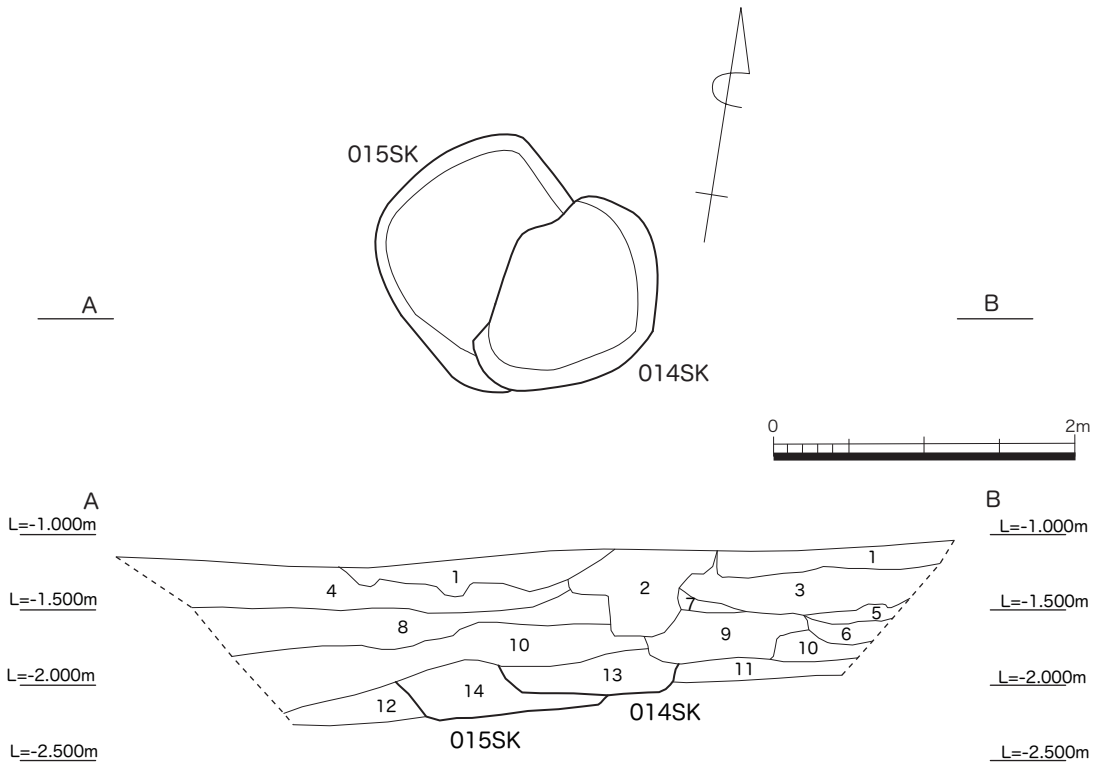
図 13 09Aa 区 007SD・008SK 遺構図 (1/50)

30.5cm、厚さ 19.5cm の砂岩礫を検出した。礫は部分的に割れた状態で、加工痕は確認できなかったが、被熱している。さらにその横や直下で、4 点の砂岩小礫も出土している(長径 12×短径 11.5×厚さ 6cm、長径 11×短径 8×厚さ 6.5 cm、長径 11×短径 7×厚さ 3.5 cm、長径 10×短径 7×厚さ 5 cm)。これらの礫も被熱しているので大型のものと同じと思われるが、確実な接合面は見つからなかった(写真図版 4)。被熱痕は石表面だけではなく破面にも認められる。時期は 9～10 世紀。049SK は 025SK から西へ 235cm のところにあり、035・036SD に切られる。大

きさは東西約 90cm、深さは断面観察で 73cm を測る。灰釉陶器と製塩土器脚部が出土する(図 21・図 22)。

039SK・040SK 両土坑とも径 100cm、深さ 50cm を越える大型土坑で、041SD—040SK—039SK の順に掘削されている。北部系陶器の山茶碗が出土することから、時期は 14 世紀後半と考えられる(図 21)。

035SD 検出時点では南部の 035SD と北部の 036SD に区分していたが、最終的には結合することが確認されたため名称を 035SD に統一した。幅約 50cm、深さ 20～30cm で、北にいくに従



09Aa区014SK・015SK土層

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
3. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
4. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多く含む。
5. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
6. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
7. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
8. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
9. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
10. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
11. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
12. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む 11層と同一の層であるかもしれない 包含層下位として遺物を取り上げ
13. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロック 酸化鉄分を多く含む
14. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む

図14 09Aa区014SK・015SK遺構図(1/50)

ゆるやかに深くなっている。溝は北北東—南南西方向に走り、中央部で東に、南部で西に分岐する(図21)。時期は中世後半期。

041SD 035SDと約75cmの間隔をあけて平行して走る、幅40cm、深さ10cmの溝。山茶碗片や軒平瓦が出土している(図20)。時期は中世後半期。

044SK 径約120cm、深さ10cmを測る円形の土坑で、中央やや東寄りの底面に径約35cm、深さ20cmの土坑がある。中央部分の土坑は、後から掘削されたか、柱の抜き痕の可能性がある(図15)。時期は14世紀。

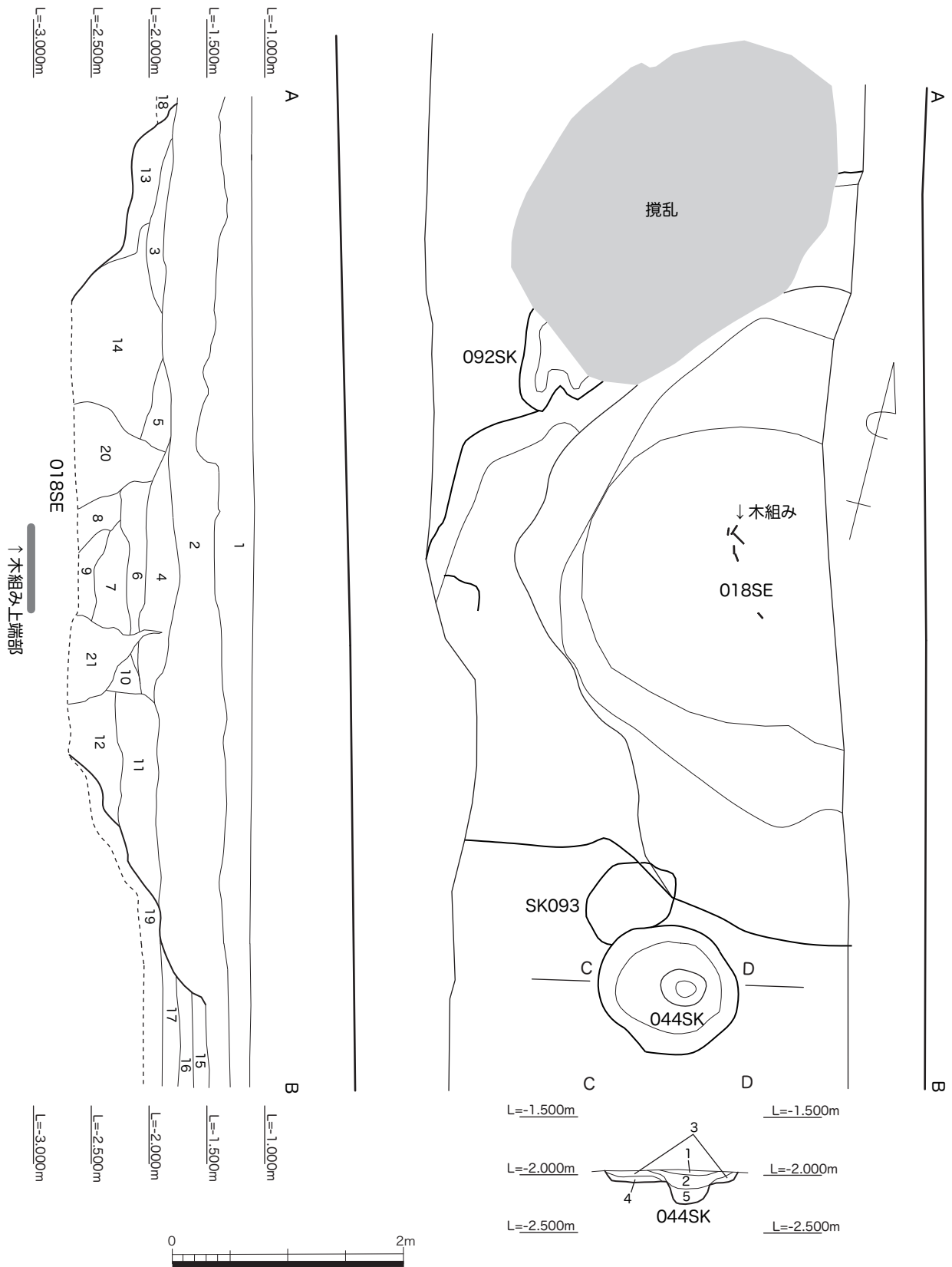
(4) 09Ad区(図6・図8・図23・写真図版5)

081SD 北北東—南南西方向に走る、幅63cm、深さ15cmの溝。Ac区調査時点では表土と誤認し掘削したが、Ad区調査で溝遺構と認識した。18世紀後半の陶磁器が出土する。

094SD 壁面の土層観察で確認された落ち込み。溝番号SDを付けたが、大型の土坑になる可能性もある。底面にはかなり大きな凹凸があり、灰色砂質シルト(包含層2)を切り込む。時期は近世後期。

096NR・097SX Ac区南部からAd区にかけて広がる落ち込み。北肩部は017SDでやや急に

日置本郷B遺跡



09Ab区044SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルトを含む
4. 2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルトを含む

図 15 09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 1 (1/50)

09Ab区018SE土層

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
7. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
8. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
9. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
10. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
12. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の斑土
14. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
15. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
16. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
18. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
20. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(噴砂)
21. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む、5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を縞状に含む。(噴砂)

図 16 09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 2 (1/50)



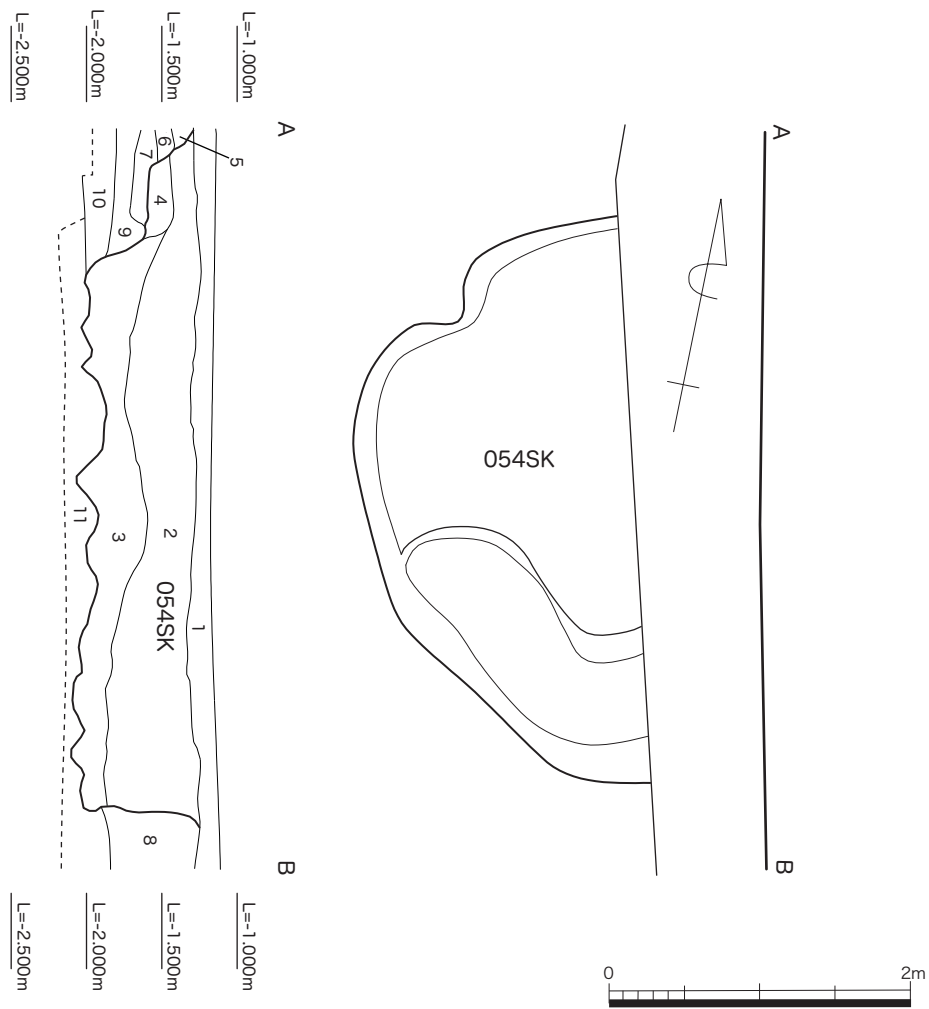
09Ab区073SK・074SK・082SK・089SK土層

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(水道管の掘り方)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む
4. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
9. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
12. 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)
13. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
14. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト



図 17 09Ab 区 073SK・074SK・082SK・089SK 遺構図 (1/50)

日置本郷 B 遺跡



09Ab区054SK土層

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
3. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
4. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
7. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
9. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト

図 18 09Ab 区 054SK 遺構図 (1/50)

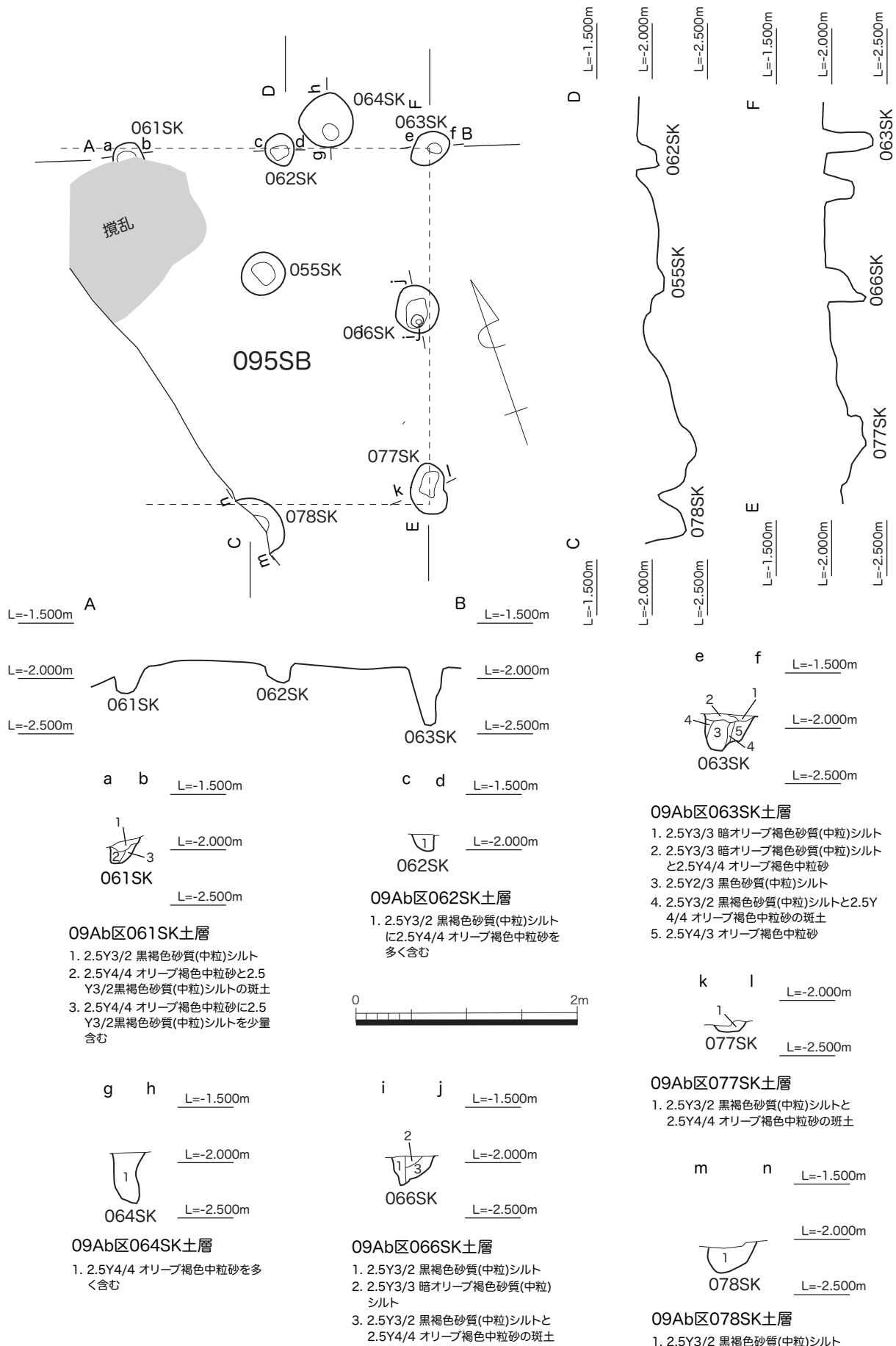
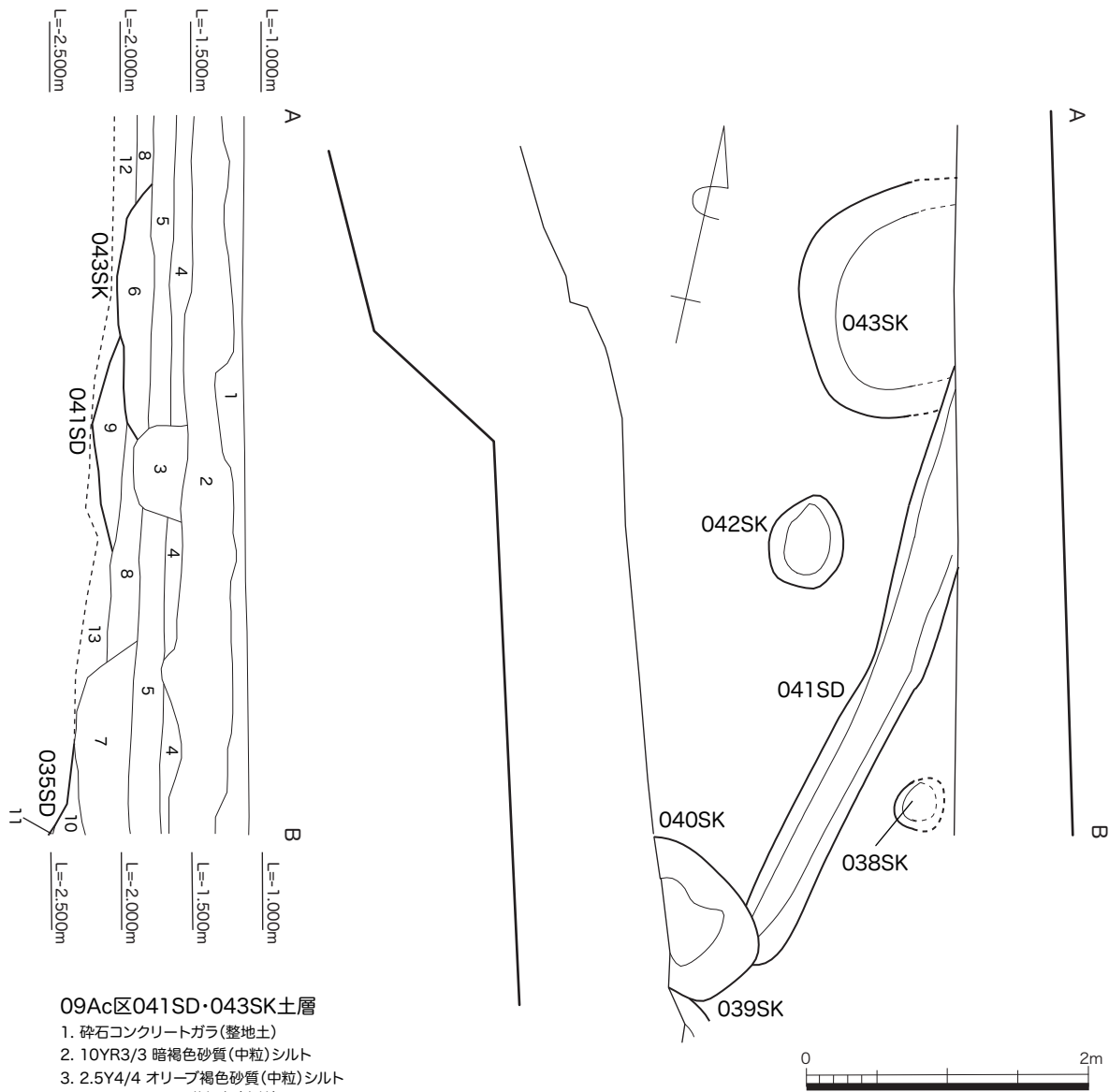


図 19 09Ab 区 095SB 遺構図 (1/50)

日置本郷B遺跡



09Ac区041SD・043SK土層

1. 碎石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
4. 10YR4/3にふい黄褐色(中粒)シルト
5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
7. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
9. 2.5Y4/1 黄灰色砂質(中粒)シルト
10. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
11. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
12. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)

図 20 09Ac 区 041SD・043SK 遺構図 (1/50)

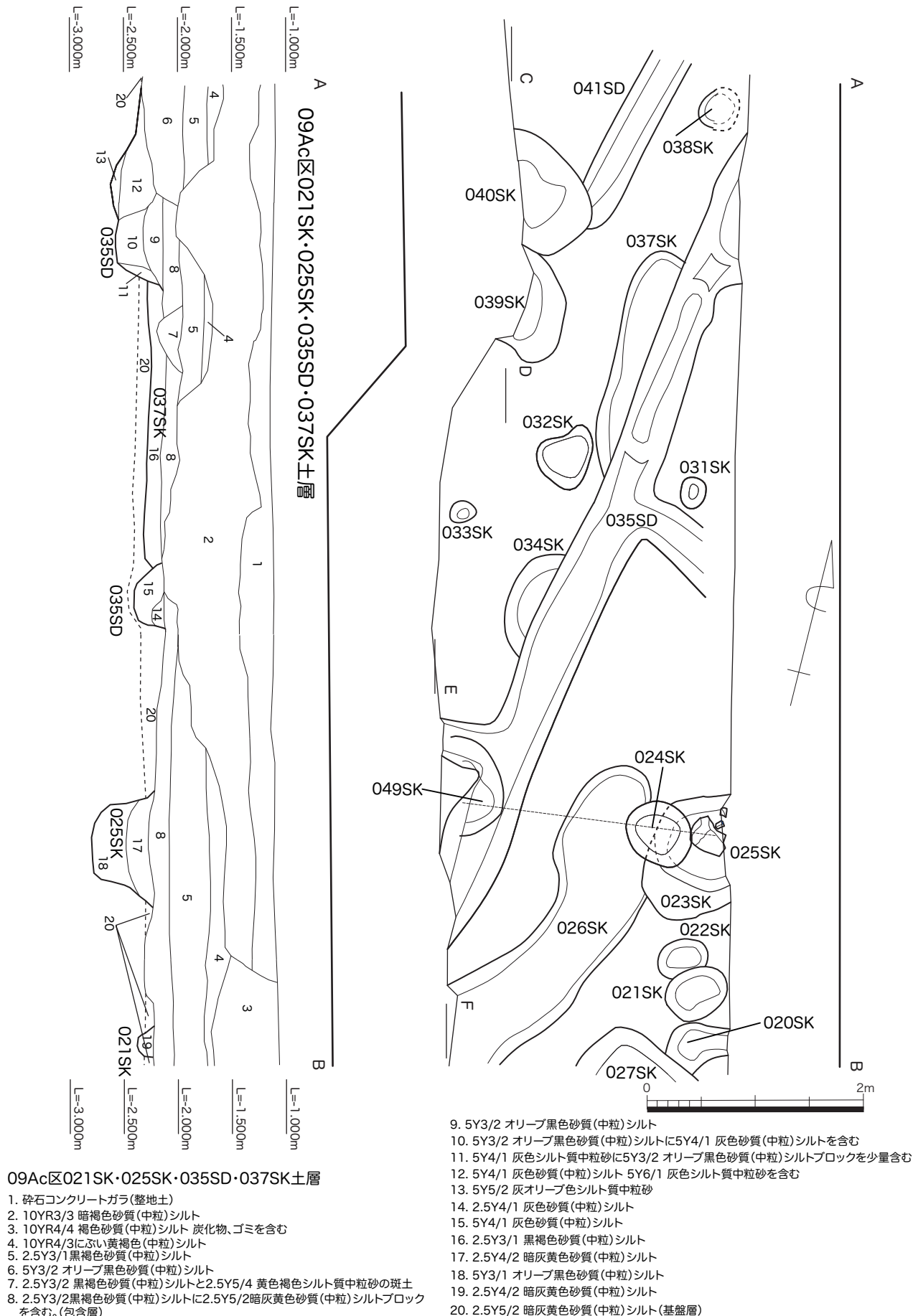


図 21 09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 1 (1/50)

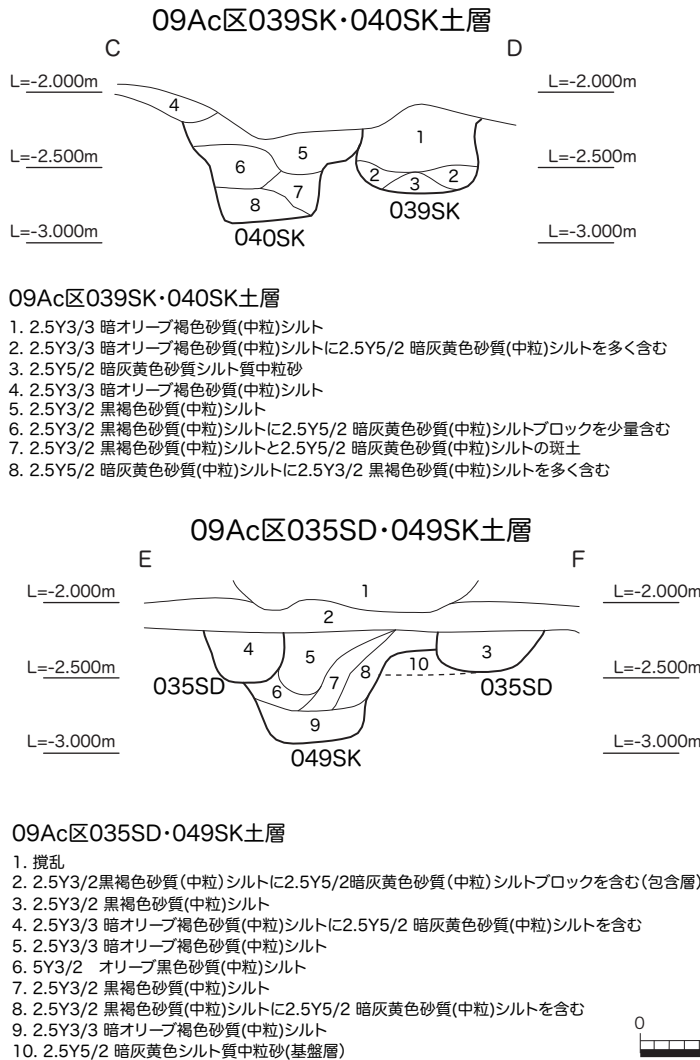


図 22 09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 2 (1/50)

落ち込み、南肩部はゆるやかな傾斜になっている。調査時には、上位層とは明瞭に区分された灰色砂質シルト層を包含層 2 とし、その上位の暗灰黄色シルト以上を包含層とし遺物を取り上げた。また 096NR の南肩に接して、焼土ブロック・炭化物を多く含む暗オリーブ褐色砂質シルト層の広がり 097SX を検出した。この 097SX は、幅 250cm にわたる不明瞭な落ち込みで、096NR の堆積の一部とも考えられる。この 097SX 部分については包含層 3 として遺物を取り上げている。さらに包含層 2 として灰色砂質シルト層の下位で、097SX 部分を除いた層を包含層 4 として掘り下げていったが、-300cm 程のところまで湧水が激しくなり、調査区の幅も狭いことから、更なる

掘削は断念した。時期は包含層とした上位層が中世～近世、包含層 2 が中世後半、包含層 3・4 が古墳時代～古代になる。

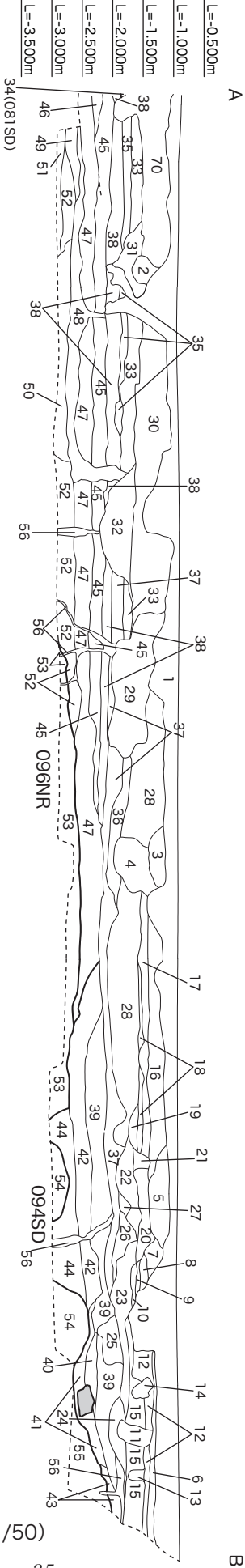
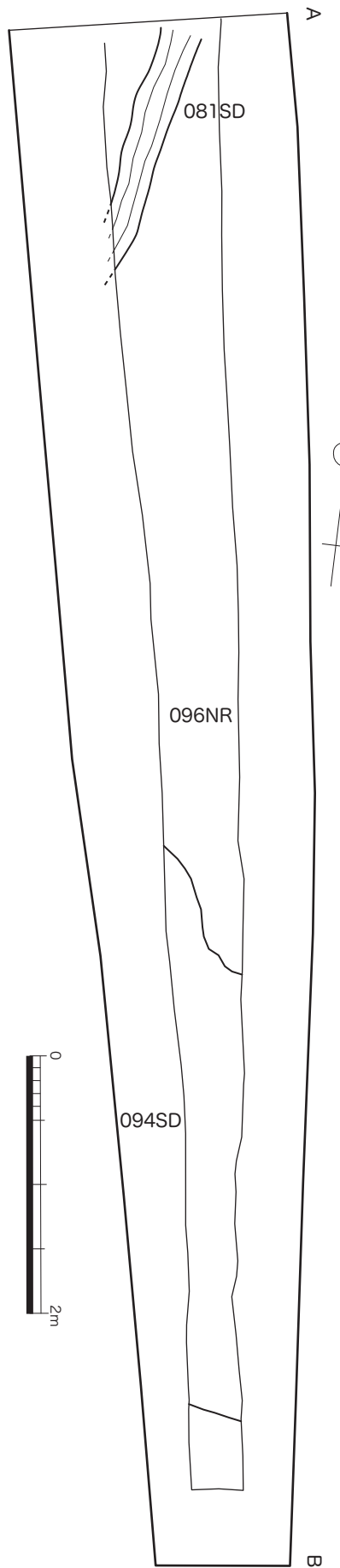
2. 09B 区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北から Ba・Bb・Bc 区の 3 区に分けて調査を行った。

(1) 09Ba 区 (図 24・写真図版 6)

最上位の整地層下の暗オリーブ褐色砂質シルト・暗灰黄色砂質シルトを除去した-180cm～-200cm のオリーブ褐色砂質シルト面で、黒褐色砂質シルトを埋土とする深さ約 20cm の落ち込み 003SK を確認した。出土遺物から 003SK の

第2章 遺構



09Ad区094SD・096NR土層

1. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質(中粒)シルト
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 5cm程度の礫を多く含む
6. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
7. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質(中粒)シルト
8. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3に近しい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
9. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
10. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 2.5Y3/2黒褐色シルトにロツクを少量含む
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのロツクを多く含む 貝を多く含む
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
14. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y6/4に近しい黄色中粒砂を少量含む
15. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 幅3cm程度の転圧されたシルト層が4層水平に堆積 道路脇とかが?
16. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
18. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを少量含む
20. 10YR4/3 灰黄褐色砂質(中粒)シルト
21. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトを少量含む
22. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/1黒褐色シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2暗褐色シルトのロツクを多く含む
23. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
24. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
25. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
26. 10YR5/4 に近い黄褐色砂質(中粒)シルト
27. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
28. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを少量含む
29. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
30. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
31. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト
32. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
33. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
34. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
35. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
36. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
37. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
38. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに炭化物を含む
39. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
40. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
41. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
42. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
43. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(硬化)
44. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 木質を多く含む
45. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
46. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げ して遺物を取り上げ
47. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 質多々硬くしめる 包含層として遺物を取り上げ
48. 7.5Y5/1 灰色シルト質中粒砂 包含層4として遺物を取り上げ
49. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
50. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
51. 7.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
52. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトを少量含む 包含層4として遺物を取り上げ
53. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
54. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
55. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(基盤層)
56. 2.5Y3/3 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(礫砂)

日置本郷 B 遺跡

時期は中世前半期と考えられる。

(2) 09Bb 区 (図 24・写真図版 6)

堅くしまった互層状堆積をなす黄褐色砂質シルトを除去した約-180cm 面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、上部を貝層 3 上位、下部を貝層 3 下位、さらにその下位を貝層 3 最下位としてサンプリングを行った。その後貝層を全て取り除いたところ、調査区ほぼ全てが溝及び土坑内の堆積と確認されたので、004SD と命名した。この 004SD の下端については確認できるが、上端は攪乱部に切られたり、調査区外で不明である。004SD の埋土である貝層 3 上位では 507・509 の南部系陶器山茶碗、下位では 508 の南部系陶器山茶碗が出土しており、時期は中世と考えられる。

(3) Bc 区 (図 24・写真図版 6)

やや互層状に堆積するオリーブ褐色砂質シルト層を除去した約-180cm 面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、貝層 1 としてサンプリングした。貝層の下面は黄褐色砂の基盤面となっており、001SK と 002SK の 2 つの土坑を検出した。上記の貝層 1 は、001SK の埋土である混貝土層の上に重なって堆積しており、連続する堆積の可能性もある。001SK の深さ 30cm を測る。また南側の深さ 30cm を測る 002SK の埋土にもハマグリ・マガキ・アサリ・シジミが含まれており、貝層 2 としてサンプリングした。002SK の貝層 2 からは灰釉陶器 (図 40-510) が出土していることから、時期は平安時代前期と考えておきたい。

3. 09C 区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北から Ca 区～Cf 区の 6 区に分けて調査を行った。

(1) Ca 区 (図 25・写真図版 6)

標高約-230cm の暗灰黄色砂質シルト層とその下位の黒褐色砂質シルト層の境あたりで、厚さ 8cm のハマグリ・アサリを含む混貝土層を検出

したが、明瞭な遺構は確認できなかった。また南東隅で、黒褐色砂質シルトと黄灰色砂質シルトの斑土を埋土とする土坑 005SK を検出している。

(2) Cb 区 (図 25・写真図版 6)

明瞭な遺構は確認されていないが、-210cm～-230cm の黄灰色砂質シルト層では近世陶磁器が、さらに下位の黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器が出土している。さらに-280cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(3) Cc 区 (図 26・写真図版 7)

明瞭な遺構は確認されていないが、-240cm で検出した黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器が出土している。黒褐色砂質シルト層上面には固い鉄分の沈着が見られる。さらに-270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(4) Cd 区 (図 26・写真図版 7)

-240cm で検出された黒褐色砂質シルト層も Cc 区と同様に、上面には固い鉄分の沈着が見られ、古代～中世の陶器・土師器を含んでいる。この黒褐色砂質シルト層を切り込んで、鉄分を多く含む土坑が確認された。さらに-270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(5) Ce 区 (図 27・写真図版 7)

明瞭な遺構は確認されていないが、-260cm で検出した黒褐色砂質シルト層では古代～中世の陶器・土師器、近世陶磁器が出土している。さらに-280cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

(6) Cf 区 (図 27・写真図版 7)

-260cm 付近まで溝または土坑と思われる近世の掘り込みがあり、それに切られるように-250cm から古代～中世の陶器・土師器の遺物を含む黒褐色砂質シルト層が検出された。さらに-270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

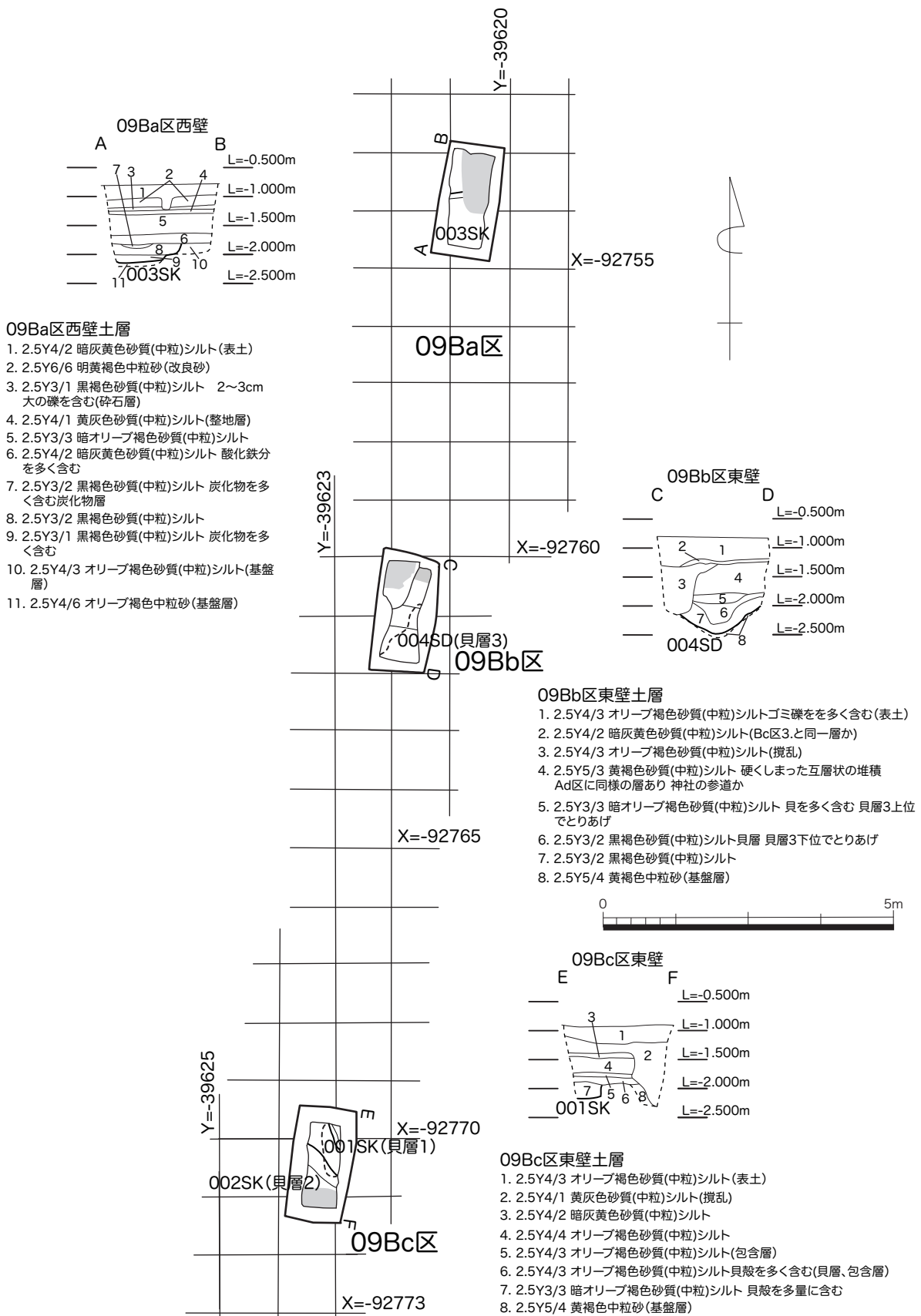


図 24 09B 区遺構図 (1/100)

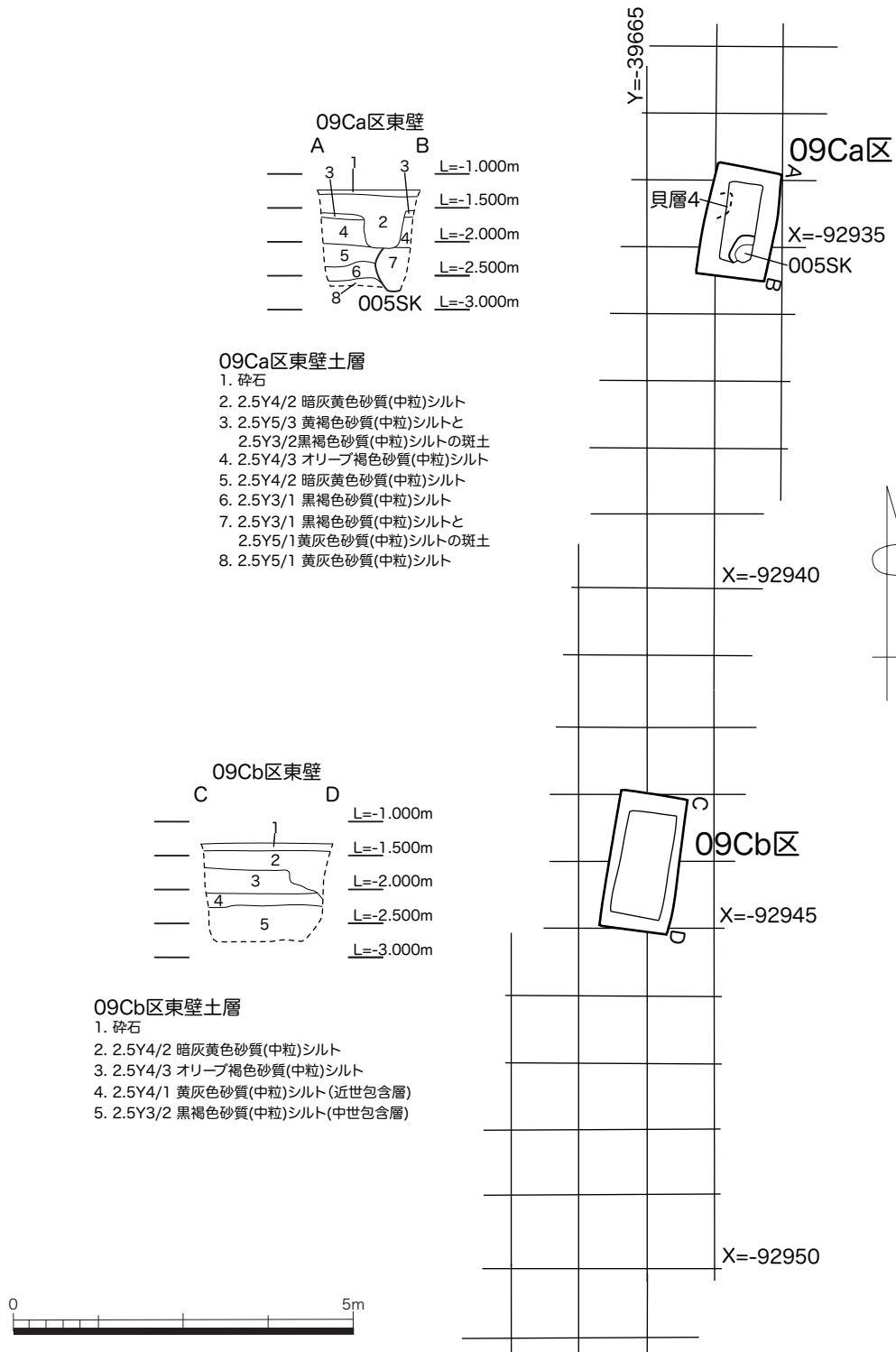


図 25 09C 区遺構図 1 (1/100)

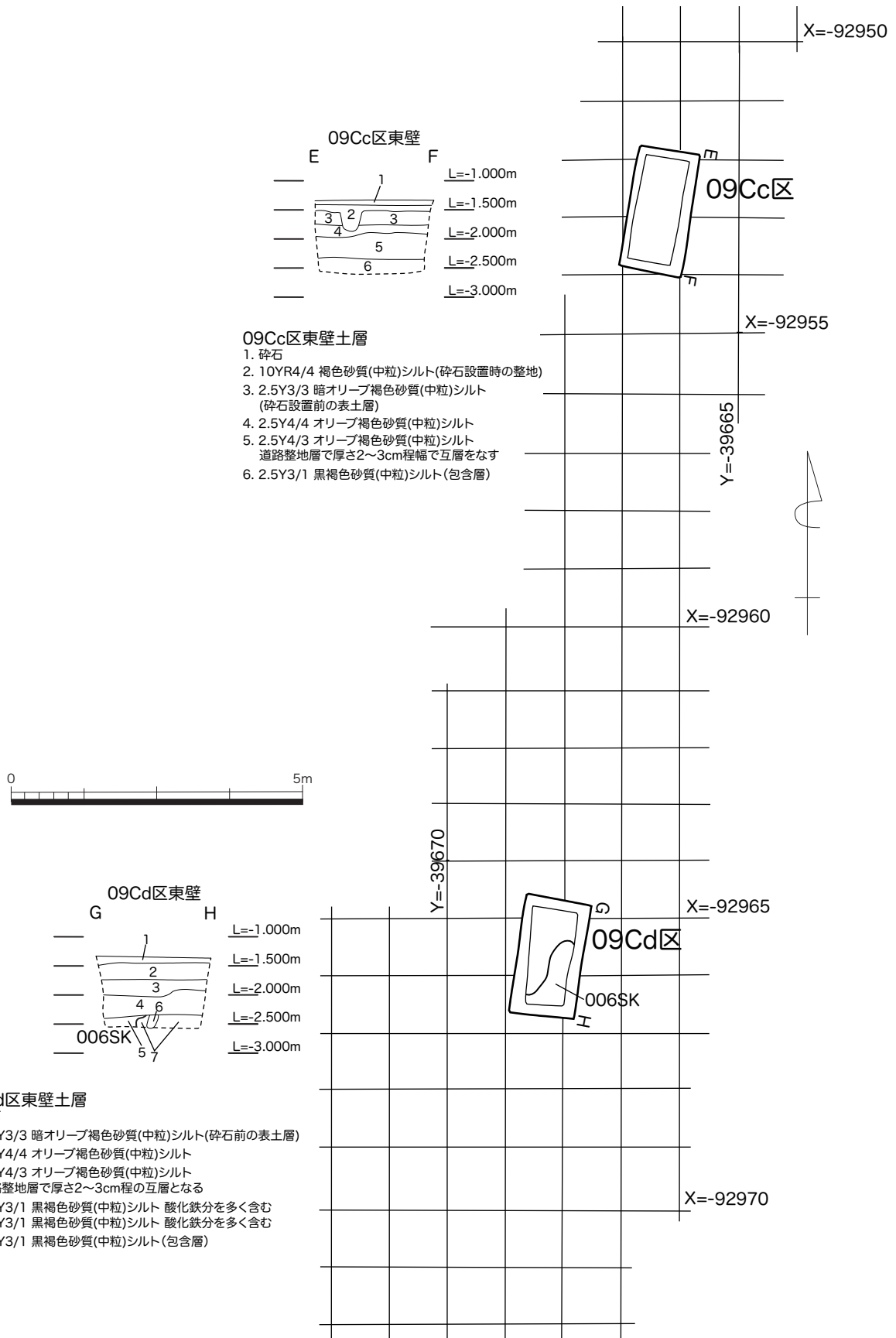


図 26 09C 区遺構図 2 (1/100)

日置本郷 B 遺跡

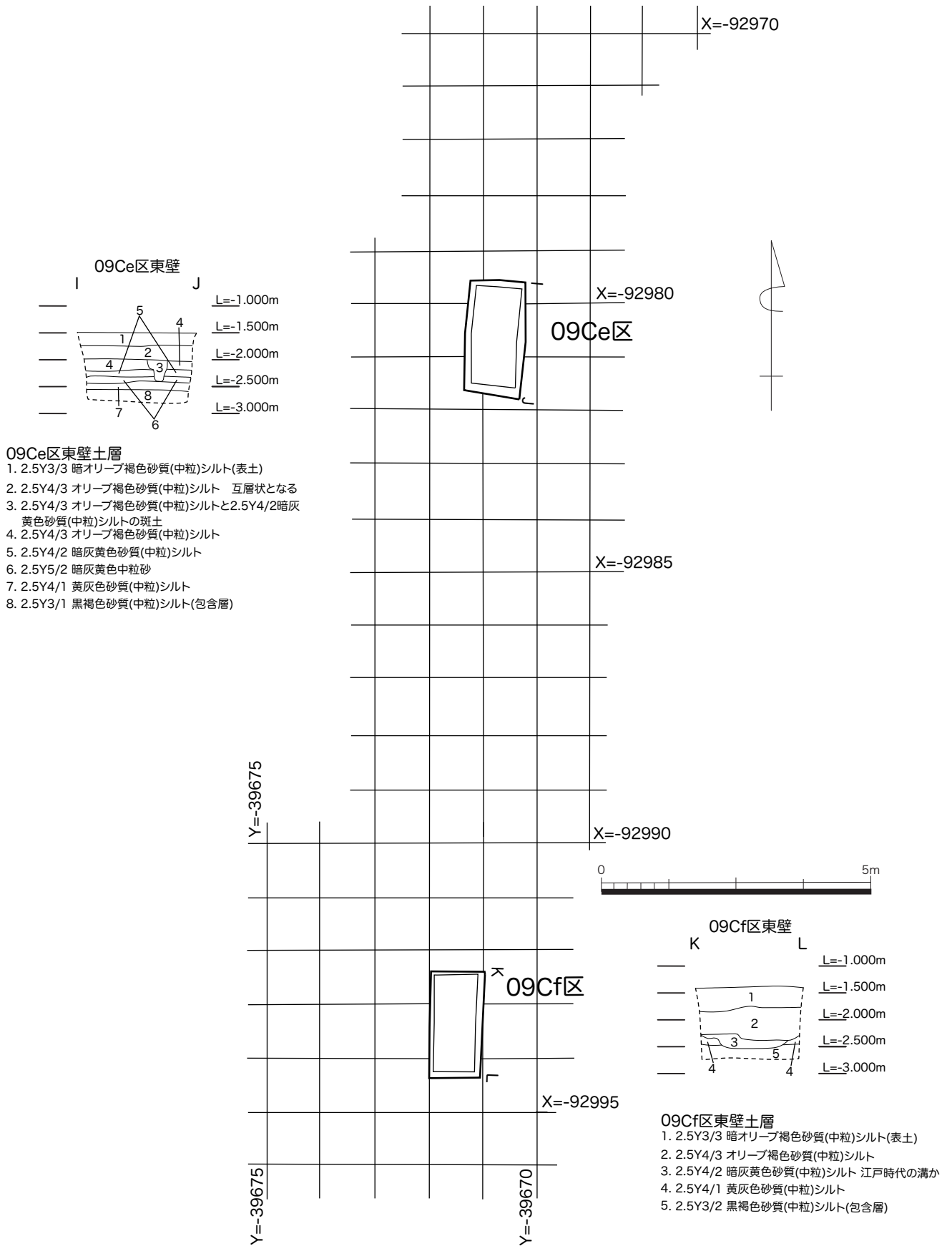


図 27 O9C 区遺構図 3 (1/100)

第3章 出土遺物

出土遺物は、09A区から出土したものがほとんどで、09B区・09C区のもものが少量ある。主に遺構の時期を考える上で、重要と思われる資料を優先して抽出し、その後包含層出土のものについて、グリッドを目安に、09Aa区から09Ad区を分けて、出土遺物の状況を反映するように遺物を選び出した。また、製塩土器や緑釉陶器、青磁、白磁、古瀬戸陶器、瓦と、土錘、陶丸、加工円盤などの土製品も優先的に図化を行った。

1. 土器・陶磁器

(1) 09A区遺構出土の土器・陶磁器 (図28-1～図31-165)

001NR (図28-1～4)：1は土師器の受口口縁甕で、口縁部径14.0cm。2は青磁の四耳壺の肩部、3は古瀬戸陶器の灰釉直縁大皿で、底部に三足が付く。4は常滑産の甕で外反する口縁部の端部が上下にのびて帯状になるもの。

002NR (図28-5～32)：5～9は須恵器で、5は受け部のある杯身に伴う杯蓋、6・7は受け部のある丸底の杯身、8は丸底の杯身、9は口縁部径12.0cmの杯身。10・11は灰釉陶器で、10は内湾する高台の付く碗、11は内・外面灰釉が残る皿。12～23は南部系陶器で、12～14・15は高台が付く山茶碗、15・16・18～21は高台がない山茶碗、20の外面底部に「○」に「大」を書いた墨書がある。14と17は内・外面に煤が付着し、18は内面に煤が付着する。22は小碗の底部、23は小皿。24～27は北部系陶器で、24～26が山茶碗、27が小皿、25の内面に煤が付着する。28は青磁の碗で外面に鎬蓮弁文がある。29は土師器の小皿、外面底部付近に斜め上がりのナデ痕がみられる。30は常滑産の甕で、口縁部が前後に拡張されて外側に面を作る。31は古瀬戸陶器の緑釉皿で、口縁部に灰釉がかけられている。32は常滑産の甕の底部。

003SK (図28-33～38)：33～35は灰釉陶器の碗で35は外面に煤が付着する。36～38は南

部系陶器で36・37が山茶碗で、比較的丁寧な作りのもの、38が小碗である。

005SK (図28-039・040)：39が内・外面に灰釉が付く灰釉陶器の碗、40は外面に横ハケをする土師器の羽釜形鍋。

007SD (図28-041・042)：41は高台が付く杯身、42がナデ調整の甕。

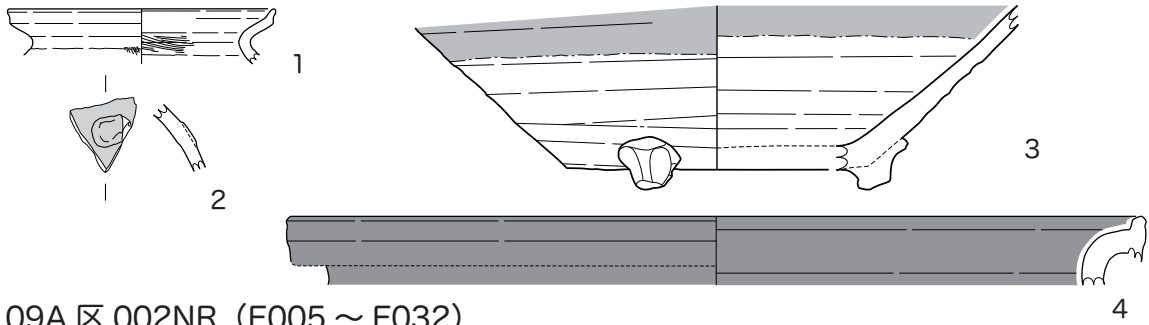
008SK (図28-043)：北部系陶器の小皿で、内面底部がやや盛り上がる形状である。口縁部径8.2cm。

017SD (図29-044～047)：江戸時代後期の遺物が主体で、44は灰釉方形箱型の水注、45が外面に呉須釉の絵がある磁器碗、46が内外面に灰釉のかかる小碗で、外面に珠文を円形にめぐらせた文様を描いている。47は筒形の磁器碗で外面に水草の絵があり、内面の上下端に直線文が1条ずつひかかれている。

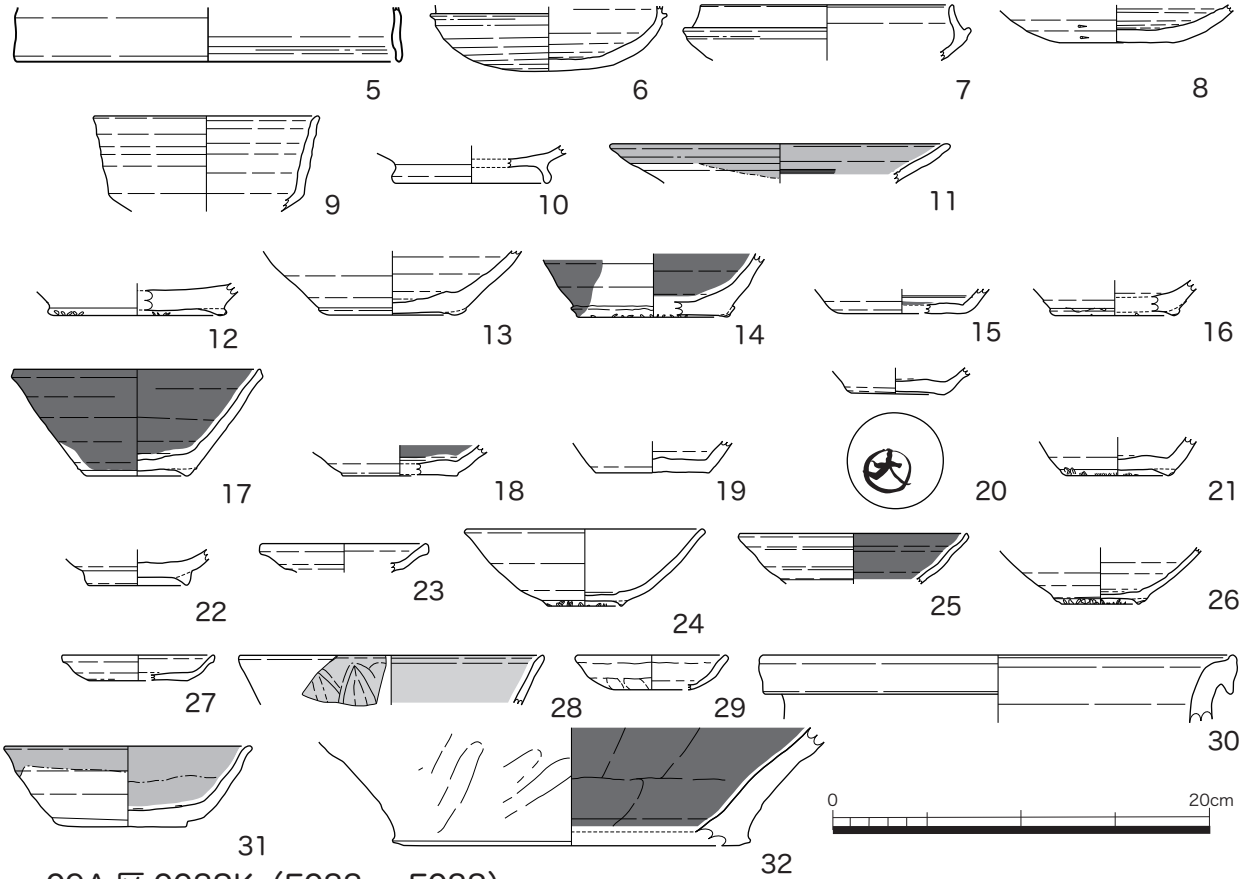
018SE (図29-048～101)：古代から室町時代の遺物が出土しており、48～54が須恵器で48～50が杯蓋、51が蓋受け部のある杯身、52が高台付きの杯身、53が体部が丸く立ち上がる鉢、54は高台のない杯身。55～58が灰釉陶器碗で、55・56・58の内面に灰釉が施されている。59～78が土師器で、59～61が古代のもの、62～78が中世のもの。59は高杯の脚部片、60が平底の甕の底部、61がハケ調整の甕。62～65が口縁部径10cm以下の小皿、64～74が径10cm以上の皿で、小皿は口縁部が丸く立ち上がるが、皿は全体的に口縁部が外反する形状で、69・72・74は口縁部の外反が強い。これらの皿は、内面と外面に斜めに上がる捻れ状のナデ調整がみられ、口縁部が強く横ナデされているもので、型作りの可能性がある。75・76は口縁端部を内側に折り曲げる伊勢型鍋、77・78は羽釜形鍋。79は南部系陶器の山茶碗で、口縁部径14.0cm。80～97は北部系陶器で80～82・97は小皿で、83～96は山茶碗である。82は外面底部に「十」の墨書がある。83～85は口縁

日置本郷 B 遺跡

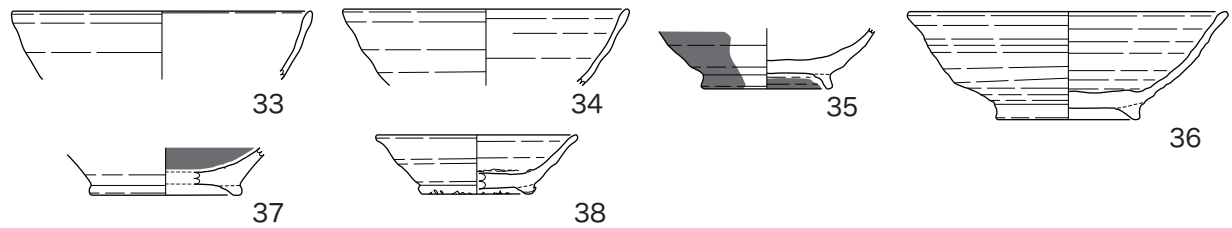
09A 区 001NR (E001 ~ E004)



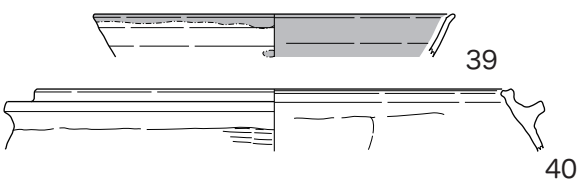
09A 区 002NR (E005 ~ E032)



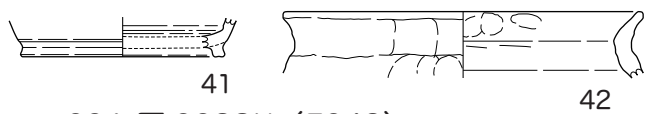
09A 区 003SK (E033 ~ E038)



09A 区 005SK (E039 ~ E040)



09A 区 007SD (E041 ~ E042)



09A 区 008SK (E043)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 28 09A 区遺構出土土器・陶磁器 1 (1/4)

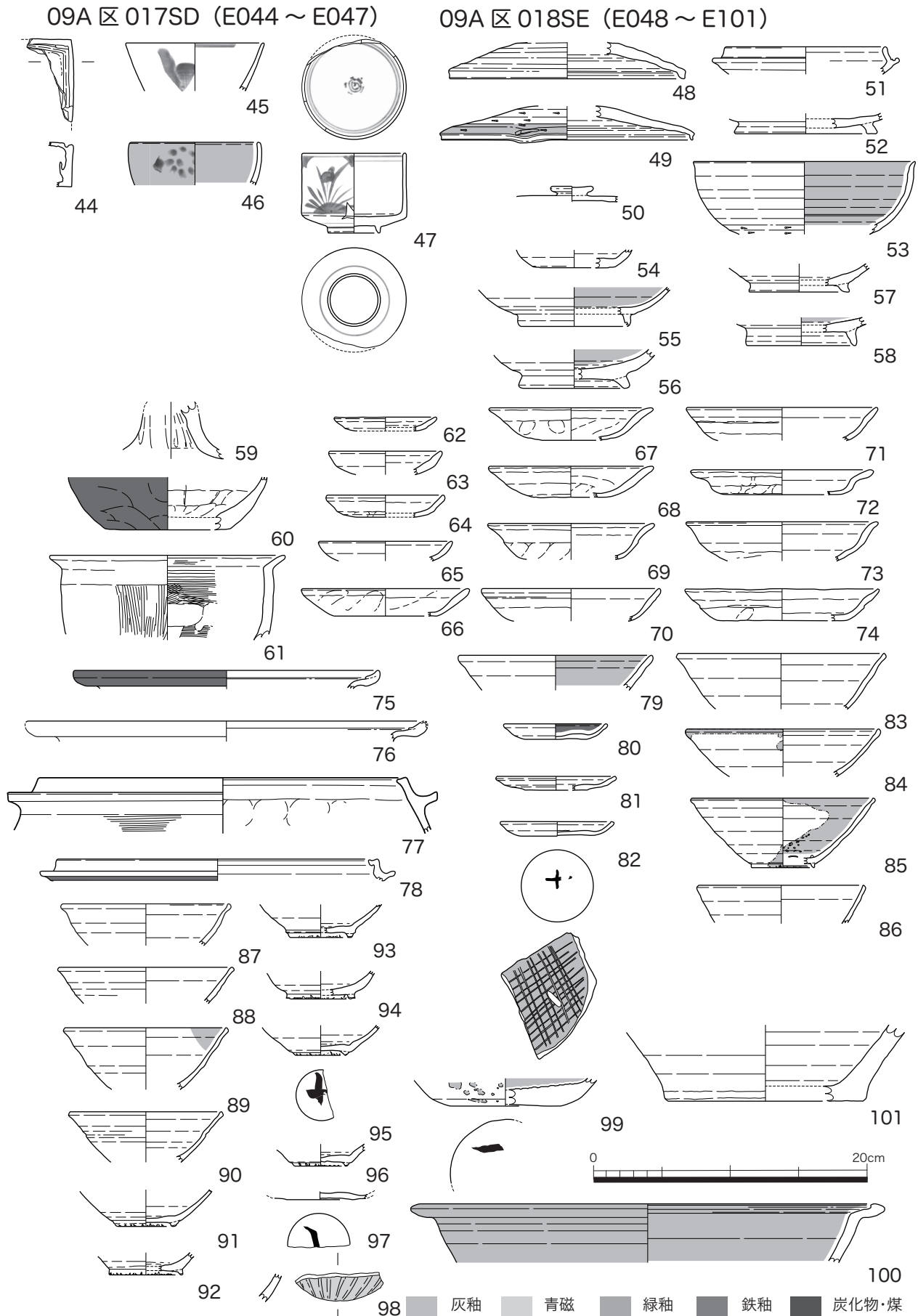
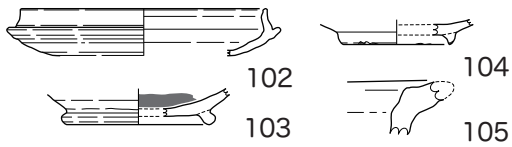


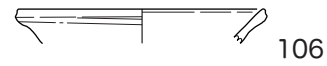
図29 09A区遺構出土土器・陶磁器2 (1/4)

日置本郷 B 遺跡

09A 区 020SK (E102 ~ E105)



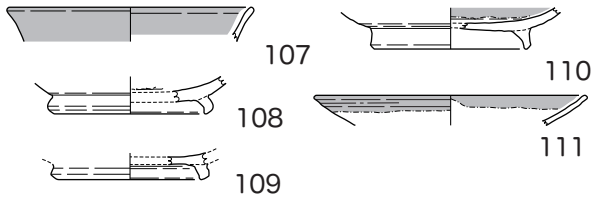
09A 区 023SK (E106)



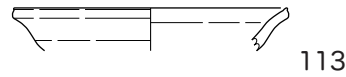
09A 区 029SK (E0112)



09A 区 025SK (E107 ~ E111)

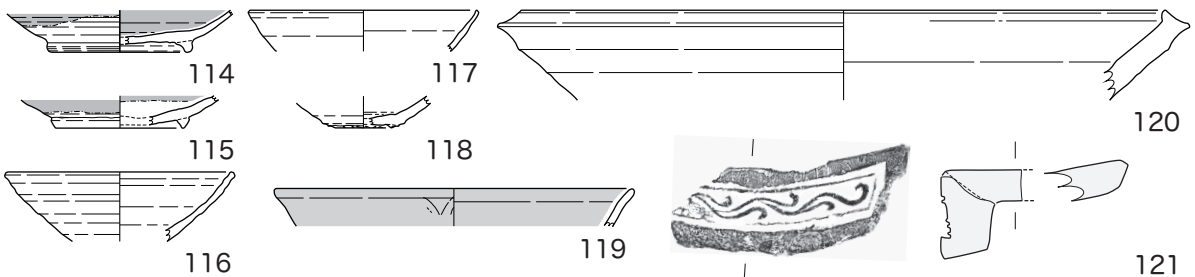


09A 区 034SK (E0113)



09A 区 035SD (E114 ~ E121)

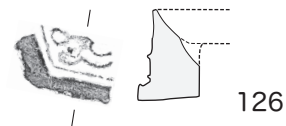
■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤



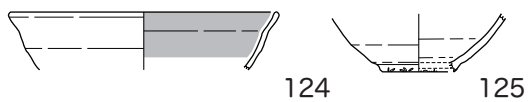
09A 区 039SK (E122 · E123)



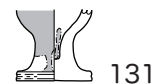
09A 区 041SD (E0126)



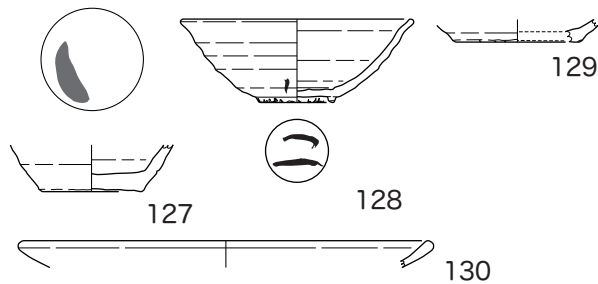
09A 区 040SK (E124 · E125)



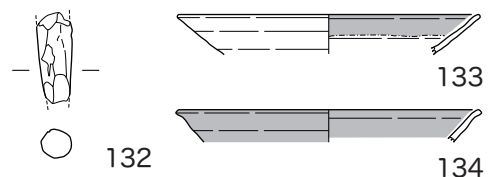
09A 区 046SK (E0131)



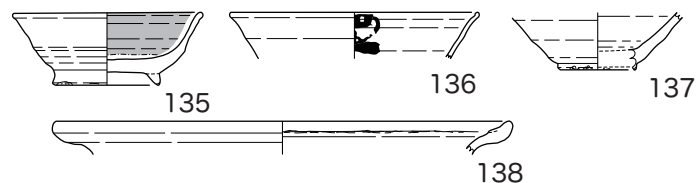
09A 区 044SK (E127 ~ E130)



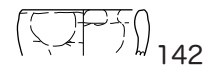
09A 区 049SK (E132 ~ E134)



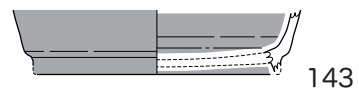
09A 区 054SK (E135 ~ E138)



09A 区 057SK (E142)



09A 区 059SK (E143)



09A 区 056SK (E139 ~ E141)



図 30 09A 区遺構出土土器・陶磁器 3 (1/4)

部径が13cm～15cm程あり、86～90が口縁部径12cm程で83～85より薄手である。90～96は山茶碗の底部で、95と97の外面底部に墨書が施されている。98は青磁の碗片、99は内面に卸目のある古瀬戸陶器の灰釉皿で、100は古瀬戸陶器の灰釉折縁鉢で内・外面に灰釉がかけられている。101は常滑産の甕の底部である。

020SK (図30-102～105) : 102は蓋受け部のある須恵器の杯身、104・105は灰釉陶器の碗で、断面内湾する高台である。105は清郷型鍋の口縁部で、灰釉陶器に伴う時期のものである。

023SK (図30-106) : 106は南部系陶器の山茶碗で、口縁部径13.0cmである。

025SK (図30-107～111) : 107～111は灰釉陶器で、107～110が碗、111が皿で、107と111は、内・外面に灰釉が施されている。

029SK (図30-112) : 112は古瀬戸陶器の灰釉小壺で、口縁部がすぼまる形である。

034SK (図30-113) : 南部系陶器の山茶碗で、口縁部径14.4cm。

035SD (図30-114～121) : 114・115は灰釉陶器で、114が碗、115が皿で、ともに断面やや内湾する高台が付く。116～118は北部系陶器の山茶碗で、薄手のものである。119は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文がみられる。120は常滑産の片口鉢で、口縁部径34.0cm程である。121は中世の軒平瓦で、瓦当の半分が残存している。均整唐草文様で、全体に緩やかな太い線で表出され先端に若干の巻きがある。中心飾りは不明。外縁の幅は約1.0cmで上端は幅数mmの斜め削りが施される。瓦当顎幅は2.5cmで全体にナデ。顎面に離れ砂が付着する。平瓦部は厚さ1.7cm。一枚作りで側縁は斜めに削られている。接合方法は端面を斜めに削った平瓦に瓦当部を接合する。色調は黒色系で、焼成は硬質で全体に軽く燻しがかかっている。瓦は北部系陶器の時期に対応するものか。

039SK (図30-122・123) : 122は灰釉陶器の皿で、内・外面に灰釉が施されている。123は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径13.0cmである。

040SK (図30-124・125) : 124・125は北部系

陶器の山茶碗で、124は内面に煤が付着している。

041SD (図30-126) : 126は中世の軒平瓦で、瓦当のごく一部が残る。瓦当文様は線の細い均整唐草文様と考えられるが全形は不明。121とは線の太さや巻きの形状が異なることから別範(文様)と判断される。外縁幅は0.8～1.0cm。瓦当顎幅は3.3cm。離れ砂の付着は認められない。平瓦部は不明であるが、接合方法は121と同じである。その接合面から平瓦の厚さは1.8cm前後と推測される。色調は黒～灰色系。焼成は硬質でムラのある燻しが軽やかかっている。

044SK (図30-127～130) : 127は南部系陶器の高台のない山茶碗で、内面底部に墨書がみられる。128と129は北部系陶器の山茶碗で、128は口縁部径12.0cmで外面底部に「二」の墨書がみられる。130は土師器の皿と思われるもので、口縁部径21.4cm。

046SK (図30-131) : 131は近世後期の灰釉仏燭台である。

049SK (図30-132～134) : 132は製塩土器の脚部、133・134は灰釉陶器の皿と碗で、134の内・外面には、灰釉がかかっている。

054SK (図30-135～138) : 135は南部系陶器の小碗で、内面に灰釉が認められる。136・137は北部系陶器の碗で、136の内面に墨書がみられる。138は口縁端部を内側に折り曲げる伊勢型鍋である。

056SK (図30-139～141) : 139は南部系陶器の山茶碗の底部で、断面三角形の高台が付く。140は北部系陶器の小皿、141は土師器の小皿である。

057SK (図30-142) : 142は製塩土器で、内・外面ナデ調整で、口縁部径6.5cm。

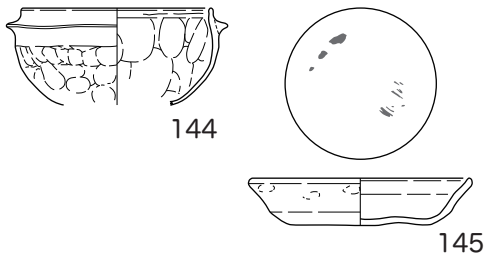
059SK (図30-143) : 143は緑釉陶器の高台付き杯身で、内・外面に緑釉が施されている。

060SK (図31-144・145) : 144は小型の羽釜形鍋で、口縁部径が10.0cm、体部はナデ調整される。145は土師器の皿で、口縁部径11.5cm、内面に墨痕がみられる。

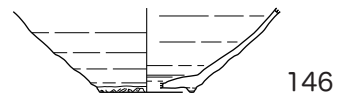
063SK (図31-146) : 146は北部系陶器の山茶碗で、高台部径5.0cm。

日置本郷 B 遺跡

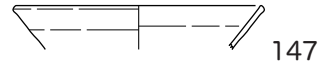
09A 区 060SK (E144・E145)



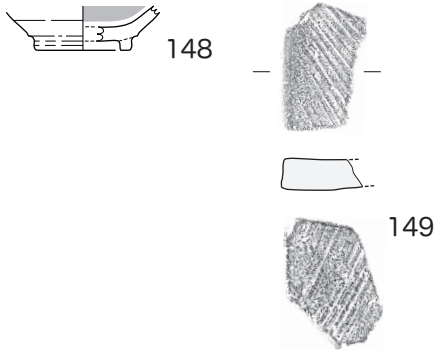
09A 区 063SK (E146)



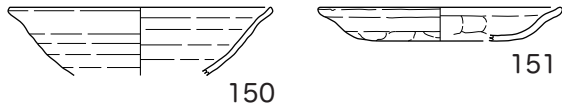
09A 区 067SK (E147)



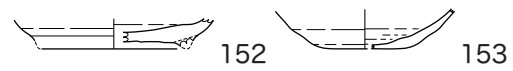
09A 区 068SK (E148・E149)



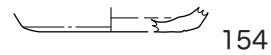
09A 区 070SK (E150・E151)



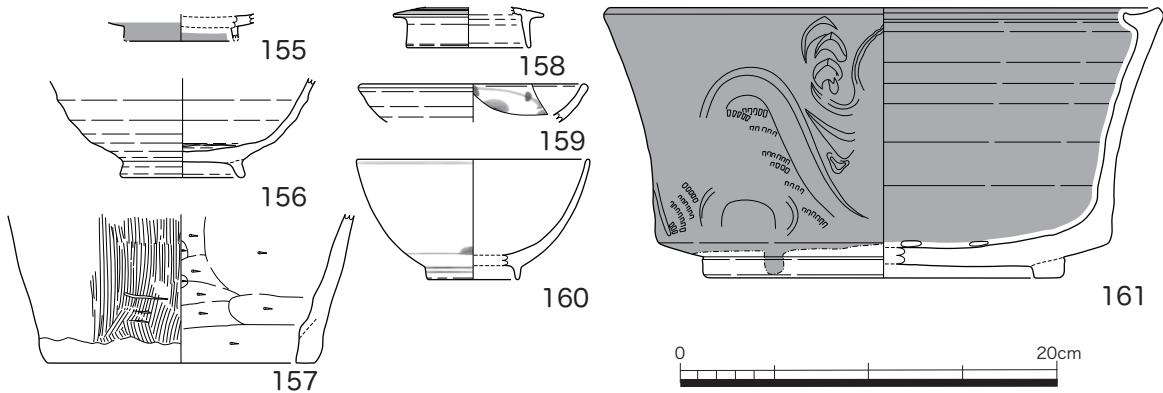
09A 区 074SK (E152・E153)



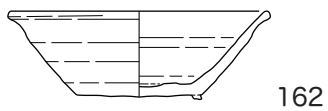
09A 区 079SK (E154)



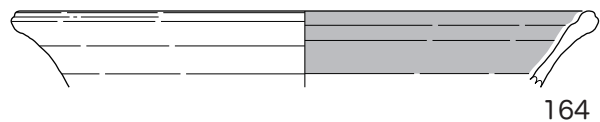
09A 区 081SD (E155 ~ E161)



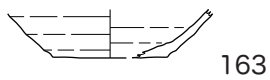
09A 区 083SK (E162)



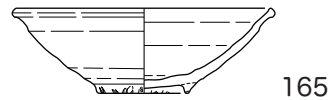
09A 区 087SK (E164)



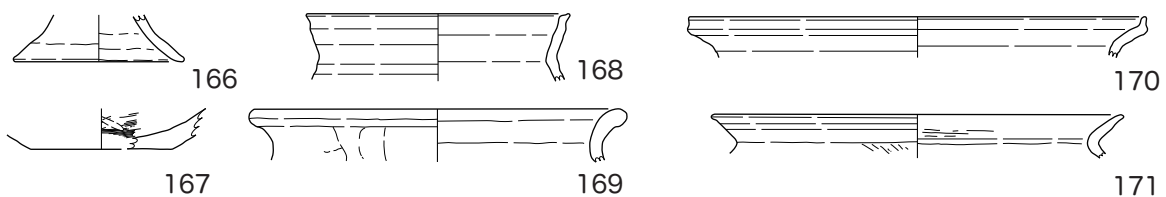
09A 区 086SK (E163)



09A 区 092SK (E165)



09Aa 区包含層 (E166 ~ E206)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 31 09A 区遺構出土土器・陶磁器 4、09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 1 (1/4)

067SK (図 31-147) : 147 は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.0cm。

068SK (図 31-148・149) : 148 は近世後期の灰釉碗、149 は中世の平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは 1.7cm。凹面は糸切痕、凸面はそれに加えて離れ砂の付着。色調は黄褐色系。焼成はやや軟質で燻しはかかっている。

070SK (図 31-150・151) : 150 は北部系陶器の山茶碗、151 はナデ調整の土師器の皿で、口縁部が強く外反している。

074SK (図 31-152・153) : 152 は南部系陶器の山茶碗で、高台が欠損している。153 は大宰期の重圈皿である。

079SK (図 31-154) : 154 は須恵器の杯身の底部、底部径 7.6cm。

081SD (図 31-155～161) : 155 は緑釉陶器の碗と思われるもの、156 は灰釉陶器の深碗で、高台が比較的高いもの。157 は土師器の甗の下半部で、外面縦ハケ調整、内面横方向のケズリ調整。158 は古瀬戸陶器の灰釉蓋で、身受け部がある。159・160 は近世後期の外面に染付けの文様がある磁器で、159 が皿、160 が碗である。161 も近世後期の灰釉鉢で、外面に大柄の波状文とその間を埋める刺突文で文様が刻まれている。

083SK (図 31-162) : 南部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.4cm をはかる。底部に不整形な高台が付く。

086SK (図 31-163) : 須恵器の杯身で、高台の付かないもの。

087SK (図 31-164) : 南部系陶器の片口鉢で、口縁部径 30.0cm 程のものである。

092SK (図 31-165) : 165 は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.5cm。

(2) 09Aa 区包含層出土の土器・陶磁器 (図 31・図 32-166～206)

古代から近世後期のものまであり、古代から中世のものが多い。166～175 は土師器で、166 が高杯の脚部、167 が杯身か皿、168 は短頸壺で口縁部径 13.8cm、頸部径 12.7cm。169 は口縁部が外反して丸くおわる端部の甗、170 が口縁端部を上方につまみ上げる形態の甗、171 は口

縁部が断面「く」の字状に外反しておわる甗である。172 は甗の把手部、173～175 は製塩土器で、ナデ調整されており、174 の口縁部はやや肥厚している、175 は脚部である。176・177 は緑釉陶器の碗で、内・外面に緑釉が施されている。178～182 は灰釉陶器で、178～180 が碗、181 が皿、182 が壺の体部片か。181 の口縁部付近の内・外面に灰釉がみられる。183～192 は南部系陶器で、183～191 は山茶碗、185 の内面に有機物が付着し、187 の内面に葉脈の圧痕がみられる。192 は片口鉢で、高台径は 15.4cm である。193 は北部系陶器の山茶碗の底部で、外面底部に墨書がみられる。194・195 は古瀬戸陶器で、194 は口縁部の内・外面に鉄釉がかかる鉄釉小皿、195 が灰釉壺か。196・197 は外面に鎬蓮弁文のある青磁碗、198 は土師器の小皿で、内面と破面に朱らしきものが付着している。199・200 が丸みのある土師器の皿でナデ調整のもの、201・202 が羽釜形鍋で外面が煤けている。203～206 は近世後期のもので、203・204 が磁器で、203 は内・外面に染付けのある筒形碗、204 は白磁碗、205 は内・外面に灰釉がかかる碗で、削り出し高台。206 は灰釉により内面に菊花文を摺り付けた皿で、断面形状の高台を削り出す。

(3) 09Ab 区包含層出土の土器・陶磁器 (図 32～図 34-207～283)

古代から近世のものまであり、古代のものも一定量あるが、中世のものが主体を占める。207～218 が須恵器で、207～211 が高台付きの杯身である。212・213 は高台のない杯身、214 は高杯の脚部、215・216 は瓶(壺)の口縁部と底部、217 はタタキ調整のある甗の体部片で、内面に墨痕がみられる。218 は口縁部径 33.6cm をはかる甗。219・220 は緑釉陶器で 220 は外にややひらく高台が付く杯身。221～224 は灰釉陶器の碗で、221 は断面内湾状の高台、223 は断面三角形の高台、224 は断面丸く低い内湾状高台が付く、222 は内・外面に灰釉が施されている。225～227 は古代の土師器で、225 が製塩土器の口縁部、226 が高杯の脚部、227 が甗の口縁部と思われる。228～233 は中世の土師器で、228～231 がナ

日置本郷 B 遺跡

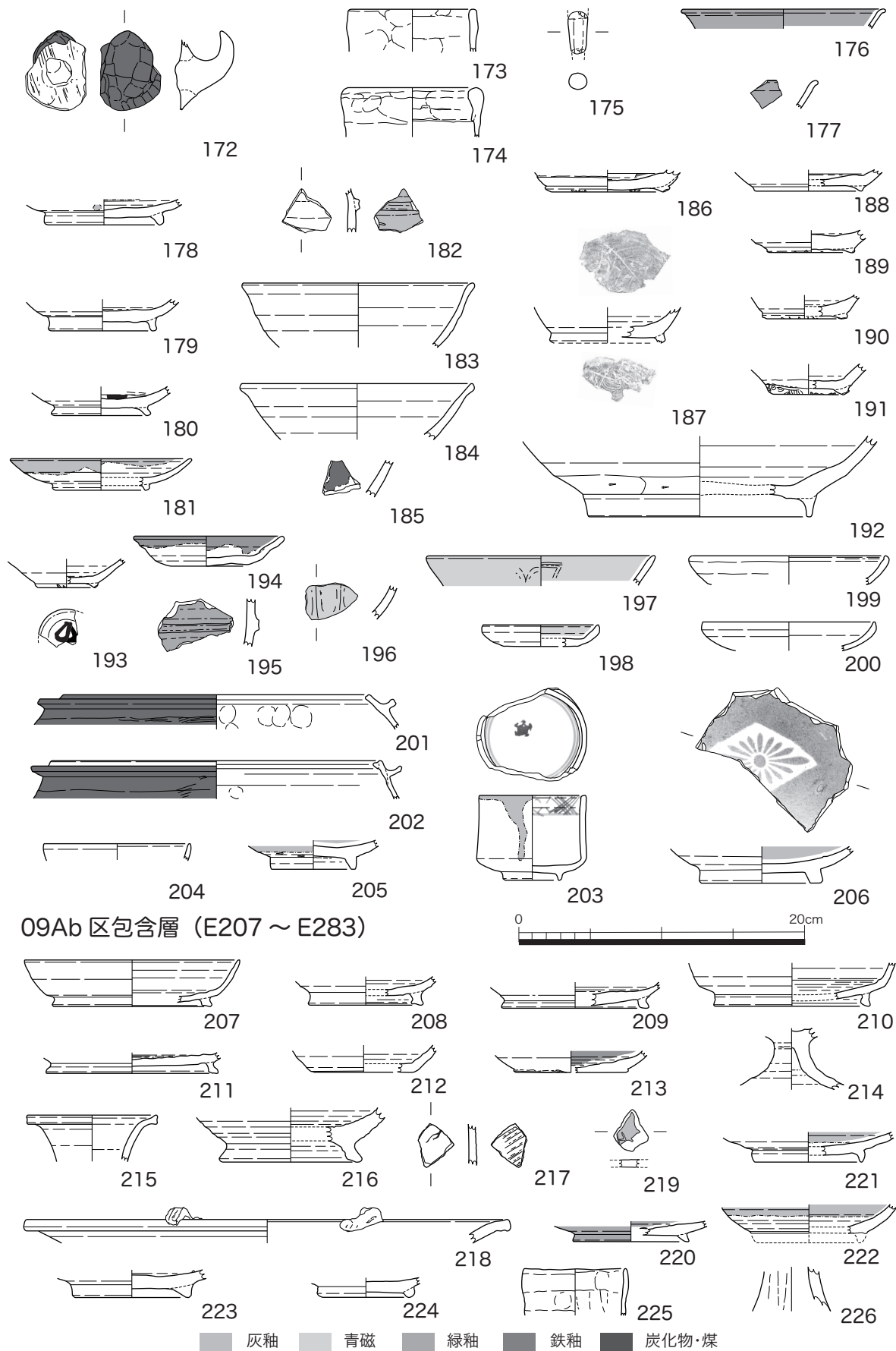


图 32 09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 2、09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 1 (1/4)

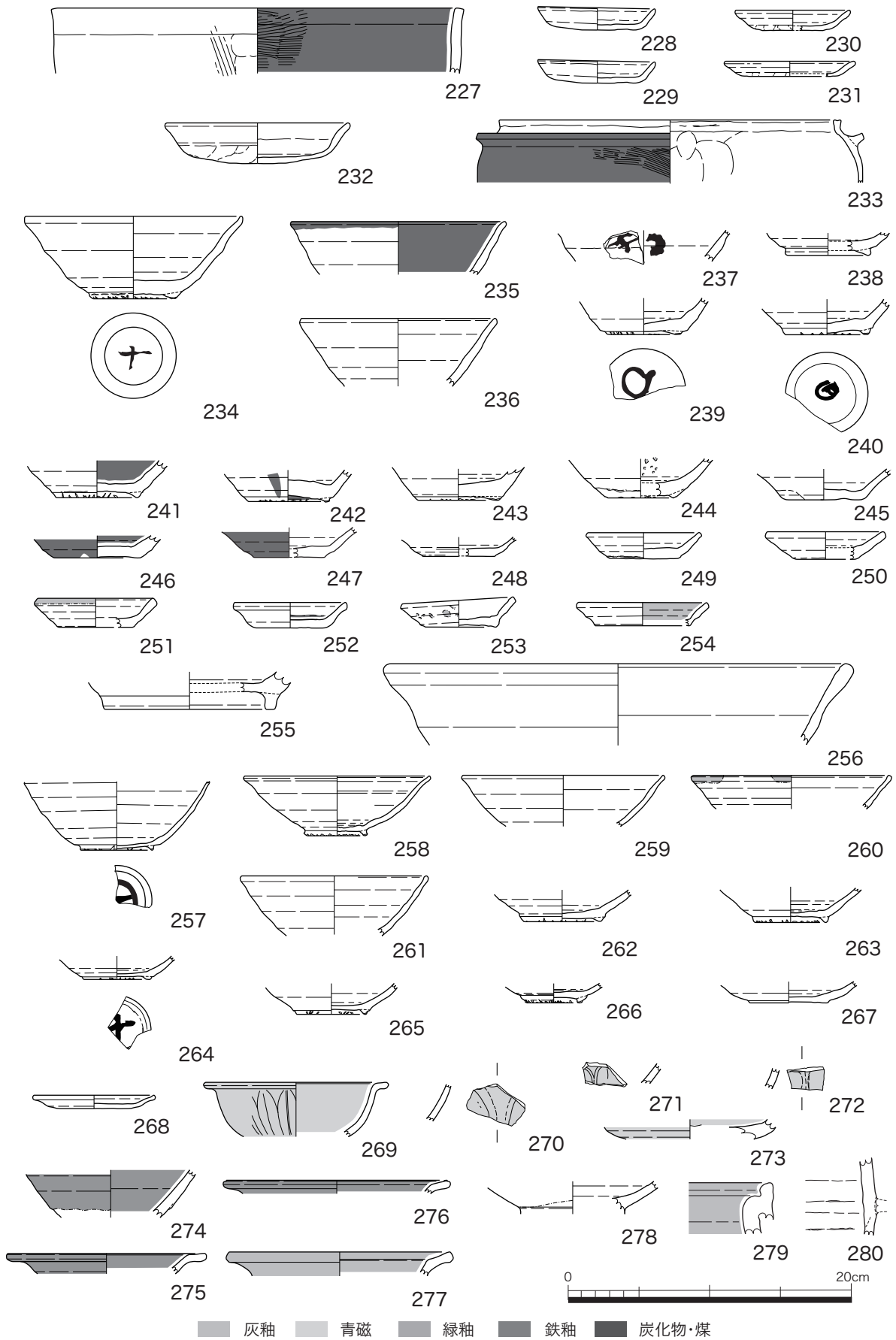


図33 09Ab区包含層出土土器・陶磁器2 (1/4)

日置本郷 B 遺跡

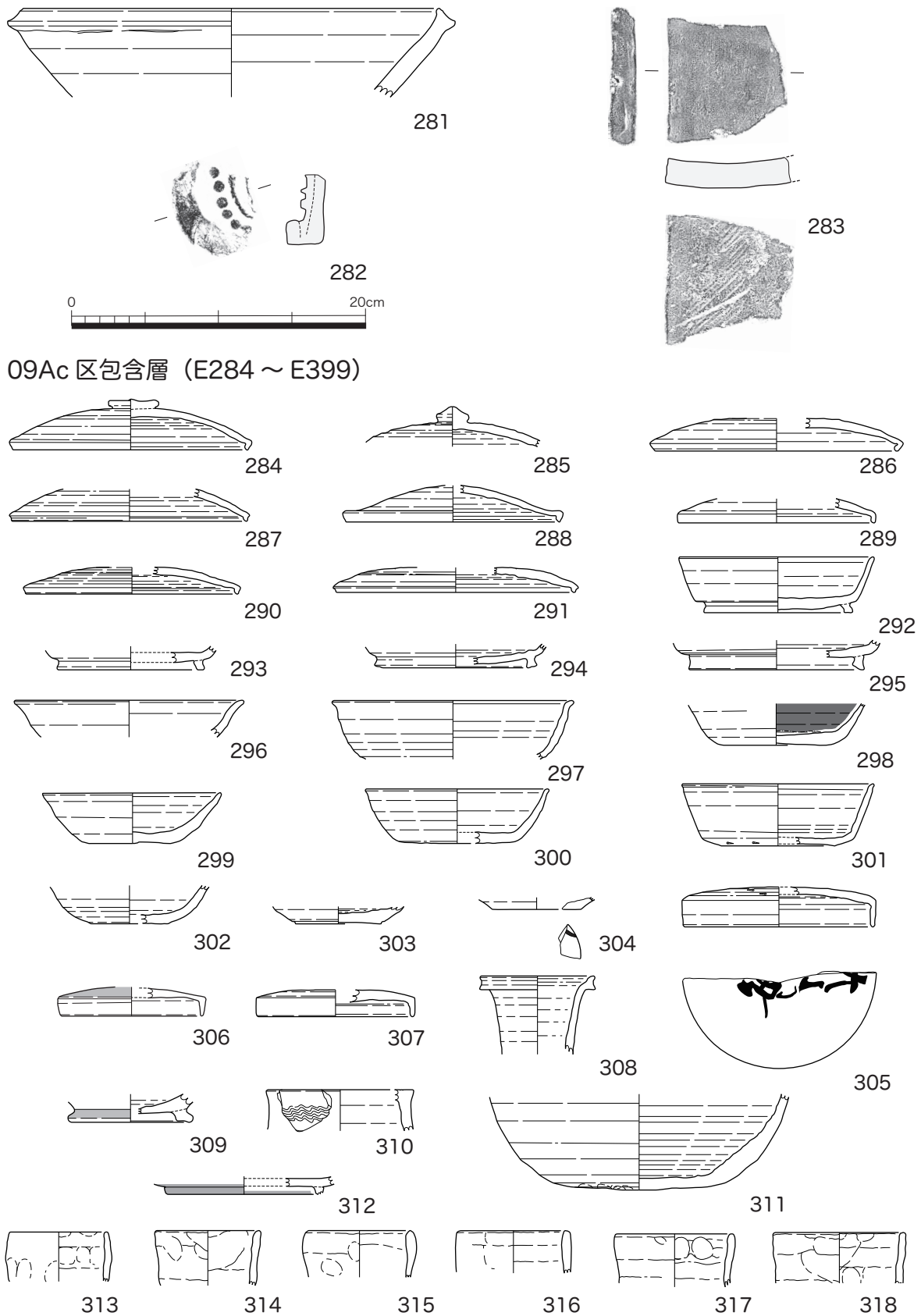


図 34 09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 (1/4)

デ調整で、口縁部がやや外反する小皿、232 は口縁部径 13.4cm をはかる口縁部がやや外反する皿で、底部付近に斜め上がりの捻り状のナデ痕がみられ、口縁部をヨコナデする。233 は羽釜形鍋で、丸みをもつ体部の外面に煤が付着している。234～256 は南部系陶器で、234～247 は山茶碗で、234・238～244 は高台が付くもの、244～247 は高台が付かないものである。234 には外面底部に「十」の墨書がみられ、237 の体部の内・外面、239・240 の外面底部に「○」状の墨書がみられる。また 235 の内面と外面口縁部、241 の内面、242 の外面の一部、246 の内・外面、247 の外面に煤が付着している。248～254 は小皿で 251・254 に自然釉の付着がみられる。255 が片口鉢の底部、256 が片口鉢の口縁部である。257～268 は北部系陶器で、257～267 は山茶碗で、257・258・262～266 は高台があるもの、267 は高台がないものである。257・264 の外面底部には墨書があり、264 の墨書は「十」か。268 は器高が低い扁平な小皿である。269～273 は青磁の碗で、269 は口縁部がほぼ水平に外反して折れるもので、269～272 は外面に鎬蓮弁文をもつ。274～277 は古瀬戸陶器で、274 は天目茶碗の体部片、275・276 は口縁部が折れて水平に外反する鉄釉折縁皿、277 は口縁部が外反して折れる灰釉折縁深皿となる。278 は白磁の碗、279 は常滑産の甕の口縁部で、口縁端部を上下に拡張するもの、280 は土師器の羽釜形鍋か。281 は常滑産の鉢、282・283 は中世の瓦。282 は軒丸瓦で外縁周の約 4 分の 1 が残存する。瓦当文様は、巴文の周囲に連珠文が廻る。連珠は 6 個分を認め、珠文どうしは範傷が発生しており繋がったようになっている。巴文の形状はよくわからない。外縁幅は 1.6cm あってやや重厚な印象がある。側縁や裏面はナデ。なお瓦当面全面に離れ砂が付着しており、範詰め時に用いたと考えられる。範詰め方法は、外縁を先行し、その後 2 回に分けて全体を詰める。丸瓦部は不明でありそれとの接合方法も不明である。色調は黒褐色系。焼成は硬質で軽く燻しがかかっている。283 は平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは 1.7cm で凹面は全体にナ

デ消しであるが、粘土板切り出し時の糸切痕と細かい布目痕が若干みえる。凸面は側縁付近が縦方向ナデ、全体に離れ砂が付着する。平行タタキのような痕もあるが糸切痕の可能性もある。側縁はヘラ切り後ナデ。色調は黄褐色系。焼成は硬質で、燻しはかかっている。

(4) 09Ac 区包含層出土の土器・陶磁器 (図 34～図 36-284～399)

古代から近世までのものがあり、古代のものが主体を占める。284～311 は須恵器で、284～291 は杯蓋で、284 には扁平なつまみ、285 には径の比較的小さい厚みのあるつまみが付く。292～295 は高台付杯身で、296 は碗の口縁部に類似するが、高杯の可能性のあるもの、298～304 は高台のない杯身で、297 のように碗に近いものもある。305～307 は壺蓋で、305 の外面天井部に墨書がみられる。308・309 は瓶で、308 は頸が長い形態のものである。310 は円形の碗の可能性のあるもので、側面と思われる面に波状文があり、天井部は平滑である。311 は体部が丸みを帯びる鉢。312 は緑釉陶器の高台付杯身。313～343 は古代の土師器である。313～327 は製塩土器で、口縁部径が 6.5cm～9.6cm をはかるものがある、調整はナデ調整や指押さえなどである。328 は土師器の杯身で、当遺跡では出土数が少ない。329～337・341 は口縁部が外反しておわる甕で、329 が口縁端部をややつまみ上げるもので、330～334 は端部を丸くするものである。335～337 は甕の体部から底部のもので、外面の調整は、ハケ調整を主体とする。338 は体部から口縁部が大きく広がっておわるもので、甕か甔の可能性のあるもの、339 は甔の把手部分、340 は口縁部から体部にあまりすぼまらずにうつる形態で、甔の可能性のある、口縁端部をややつまみ上げる特徴がある。342・343 は清郷型鍋で、口縁部が水平に外反して肥厚する。344～363 は灰釉陶器で、344 が瓶、345～360 が碗、361～363 が皿である。344 は瓶の口縁部で、口縁端部を上下にひろげており、内・外面に灰釉がみられる。345～346 は碗で、345・346・360 は灰釉が内面と外面口縁部付近にみられる。360 は

日置本郷 B 遺跡

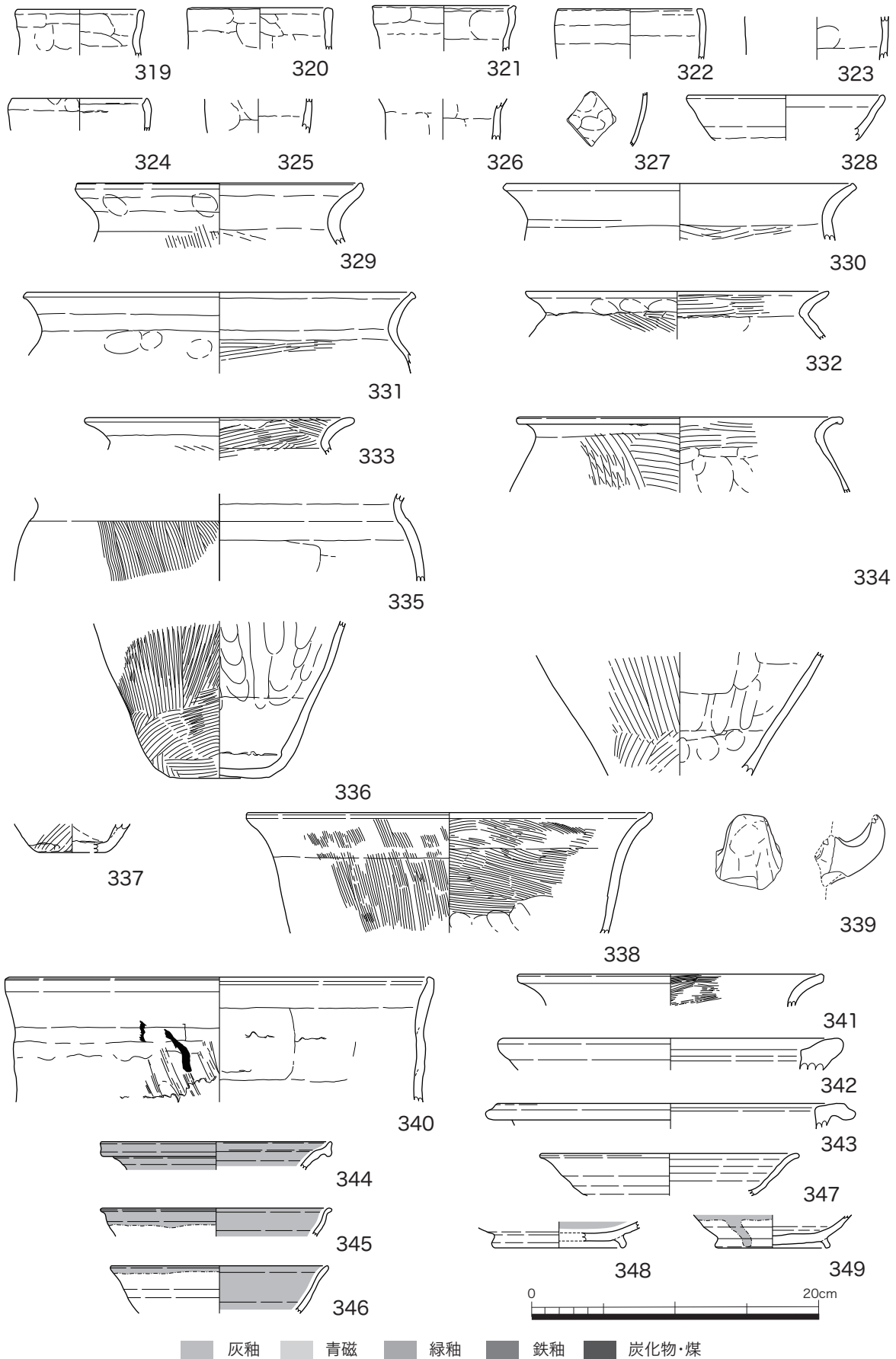


図 35 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2 (1/4)

小碗に近いもので、断面内湾状高台が付く。碗に付く高台では、355・356に断面方形状高台が付く、352は外側にひらく高台が付く、その他は断面内湾状の高台である。353の内面底部に墨書がみられる。361・362は内・外面に灰釉が施される皿で、362は断面内湾状の低い高台が付く。364～376は南部系陶器で、364～373が山茶碗、374～376が小皿である。364と375には内・外面に灰釉がみられ、364は大振りな碗の形態で、高さ1.0cmの高い高台が付くことから、古い形態の山茶碗と思われる。364～372は高台が付くが、373は高台がないものである。377～381は北部系陶器の山茶碗で、377～380には高台が付くが、381は高台のないもの。378の外表面底部に「十」の墨書がみられ、380の外表面底部にも墨書がみられる。382～386は中世の土師器で、382～384が小皿、385・386が伊勢型鍋である。小皿では382は比較的丸い立ち上がりをもつ形態で、383の底部は3.0cmと小さく、底部から大きく外反して口縁部にいたるもの、384は器高が1.1cmと扁平な形態のものである。387～389は青磁の碗で、388の底部は比較的厚みがある。390は口縁端部が肥厚する玉縁口縁の白磁の碗で、口縁部径16.6cmである。391は古瀬戸陶器の灰釉碗で、内・外面に灰釉がみられる。392～399は近世後期以後のものである。392は近世～近代の軒棧瓦で、瓦当のみの破片である。文様は左巴文で連珠が推定で12個廻り、全体に明瞭かつ繊細な文様表出である。焼成は硬質で全体に燻しがかかっている。393・394は近世後期にかかる天目茶碗、395は白色釉の磁器碗、396・397は白色釉の磁器の皿か碗、398・399は内・外面に染付けがある磁器の碗で、内面底部の印は同図のものである。

(5) 09Ad区包含層出土の土器・陶磁器(図37・図38-400～454)

古代から近世後期以後のものまでであるが、古代のものが多い。400～414は須恵器で、400が杯蓋、401～404が高台付杯身、405～411が高台のない杯身である。409の杯身の外面に光沢がみられ、411の杯身外面底部に線刻がみられ

る。412・413は壺で、412は口縁部が斜めにやや外反してのびる形である。414は甕の底部で、底部径20.0cmである。415～434は土師器で、415は内・外面に放射状の暗文のみられる杯蓋、416は内面に放射状暗文、外面にヨコミガキ調整がみられる皿である。417～427は製塩土器で、口縁部径6.0cm～9.0cmをはかるもので、420の外表面に墨痕がみられる。428～431は外面にハケ調整を伴う甕で、口縁部が「く」の字状に外反するものである。432・433は清郷型鍋で、433は口縁部の肥厚が大きい。434は体部から内傾する口縁部をもつもので、内面に煤が付着する、中世の風炉の可能性もある。435～439は灰釉陶器で、435～438は碗で、439が皿である。435・436・438は断面が三角形状高台や外側にひらく高台が付く碗で、437・439は内湾する低い三角高台が付く。440～450は南部系陶器で、440～446が高台の付く碗、447・449が高台のない碗、450は底部がやや突出する小皿である。444・447は口縁部径がともに13.4cmで、高台の有無を除けば、同形同大である。452は中世の丸瓦で、厚さは1.6cm。凸面はナデ消しを行い、凹面は布目痕を残す。色調は黒褐色系で、焼成はやや軟質で凹面のみ燻しがかかったのかやや黒っぽい。451・453・454は近世後期のものと思われるもので、451は外面に灰釉が施される磁器の壺、453は産地不明の甕、454は焙烙鍋と思われるものである。

(6) 09A区その他包含層出土の土器・陶磁器(図38-455～465)

09A区の調査中で、グリッドが判明しない資料から図化したものである。455は須恵器の甕の底部で、底部径10.8cm。456は灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉を施すもので、高台は断面内湾状のものが付く。457・458は土師器の製塩土器で、457は外面の一部にハケ調整らしき痕跡がみられる。459は土師器の清郷型鍋で、口縁部が外側に折れ、肥厚するもの。460は南部系陶器の高台のない碗で、外面底部に墨書がみられる。461は南部系陶器の小皿で、口縁部径7.8cmである。462～465は北部系陶器の碗で、462・463が

日置本郷 B 遺跡

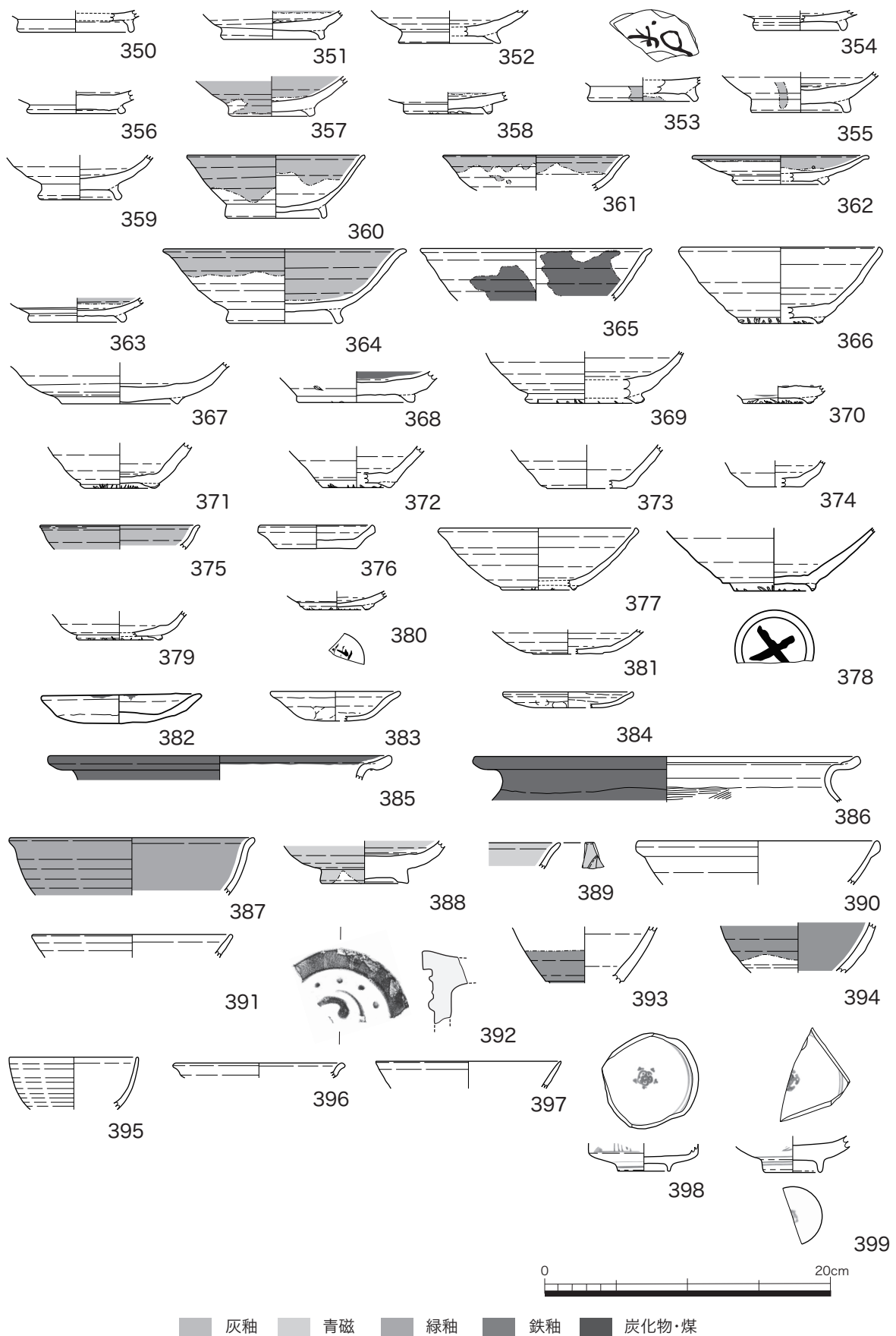


图 36 09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3 (1/4)

09Ad 区包含層 (E400 ~ E454)

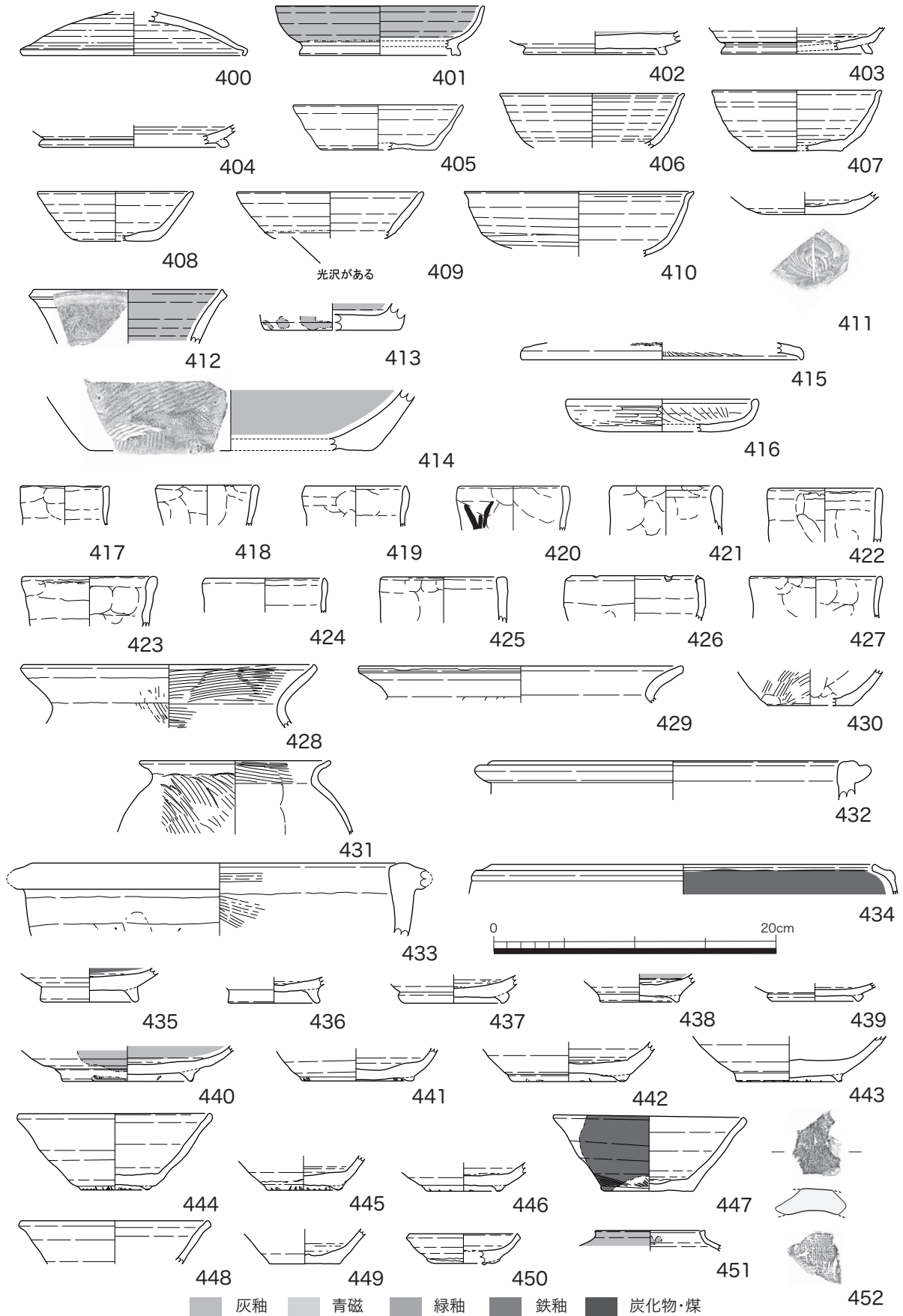


図 37 09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 1 (1/4)

日置本郷 B 遺跡

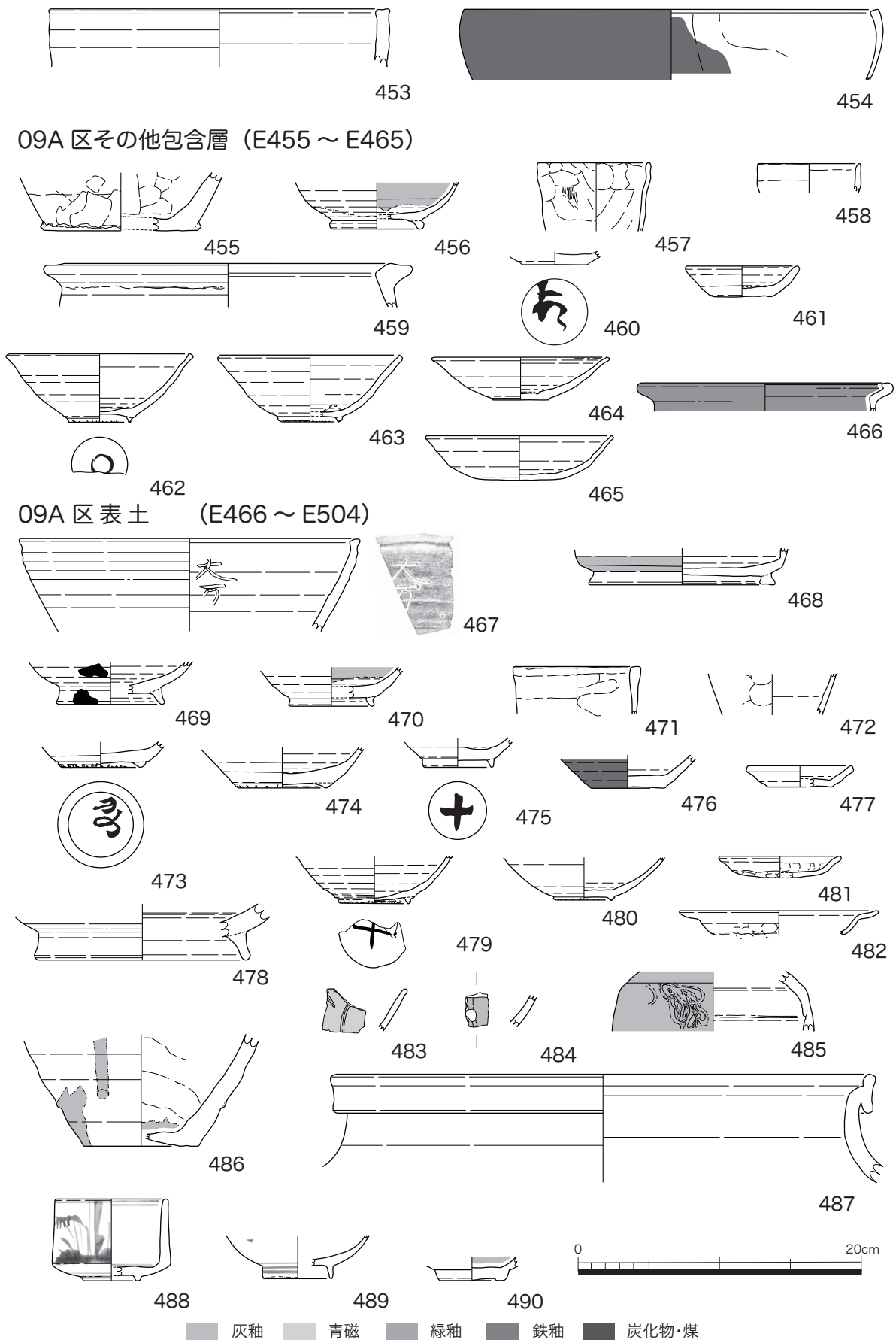


図 38 09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、09A 区其他包含層・表土出土土器・陶磁器 1 (1/4)

高台の付くもの、464・465が高台の付かない器高の低いものである。462は外面底部に墨書「〇」がある。466は近世後期の受口口縁をもつ甕で、内・外面に鉄釉を施す。

(7) 09A区表土出土の土器・陶磁器(図38-466～490・図39-491～504)

09A区の表土はぎの段階でみつかったものから図化したものである。467・468は須恵器で、467は鉢で、内面に「大万」の刻書がみられ、468は高台付杯身である。469・470は灰釉陶器の碗で、断面外側にひらく高台が付く、469の外面に墨痕がみられる。471・472は土師器の製塩土器で、471は口縁部径が8.8cmである。473～478は南部系陶器で、473～475が高台のある碗、476が高台のない碗、477が小皿、478が片口鉢である。墨書が473の外面底部と475の外面底部に「十」の墨書がある。479・480は北部系陶器の高台の付く碗で、479の外面底部に「十」の墨書がある。481・482は中世の土師器で、481は口縁部が比較的強く外反する小皿で、482が丸みのある体部から口縁部が外側に屈曲してのびる皿で、2点ともナデ調整のものである。484・484は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文がある。485・486は古瀬戸陶器の灰釉が施される瓶子で、485には外面肩部に貼付けの文様がみられる。487は常滑産の甕で、口縁部径37.4cmをはかる大型のものである。488～504は近世後期以後のもので、488～494が磁器、495～499が施釉陶器、500が土師器、501～504が瓦である。磁器は内・外面に染付けの絵が描かれているもので、488が筒型に口縁部が立ち上がる碗、489・490が丸みを帯びた体部をもつ碗、491が小さい断面三角形の高台を削り出す皿、492～494が幅広の高台を削り出すもので、492・494が皿、493は口縁部が屈曲して外側にひらく鉢である。施釉陶器では495が内・外面に鉄釉を施し、外面に白色釉の文様を描く、灰落としに転用したと思われる口縁端部の欠損がみられる。496は灰釉を内・外面に施す鉢で、497・498が鉄釉を施す播鉢、499が色調がうぐいす色の施釉を施した筒型の火入れである。497は口縁部径30.7cm、

498の体部には播り目が放射状に施されている。500は土師器の焙烙鍋で、口縁部径24.4cmである。501～504は軒棧瓦の瓦当部分で、焼成は硬質で全体に燻しがかかっている。501が巴文、502～504が菊花文のものである。

(8) 09Ba区出土の陶器(図39-505・506)

505・506は近世後期以後の陶器で、505は内・外面に鉄釉を施し、口縁部付近を灰釉の重ね掛けがされている筒型の碗、506は天目茶碗の形態のもので、内・外面に鉄釉を施し、口縁部付近に灰釉を重ね掛けするものである。

(9) 09Bb区004SD貝層3出土の陶器(図40-507～509)

507～509は南部系陶器の山茶碗で、507が口縁部径14.0cm、508の高台部径が6.8cm、509の高台部径が8.4cmである。12世紀後半頃のものと思われる。

(10) 09Bc区002SK貝層2出土の陶器(図40-510)

510は内・外面に灰釉が施された灰釉陶器の段皿で、断面比較的高い内湾状高台が付くものである。

(11) 09Ca区出土の陶器(図40-511・512)

511は灰釉陶器の瓶(壺)で、外面に灰釉が垂れてみられる、512は常滑産甕で、底部径19.0cmをはかる。

(12) 09Cb区包含層出土の陶器(図40-513～515)

513は須恵器の高台付杯身、514は緑釉陶器の碗、515は近世後期の下半部の丸い陶器碗で、内・外面に鉄釉と灰釉の重ね掛けがみられる。

(13) 09Cc区包含層など出土の陶器(図40-516・517)

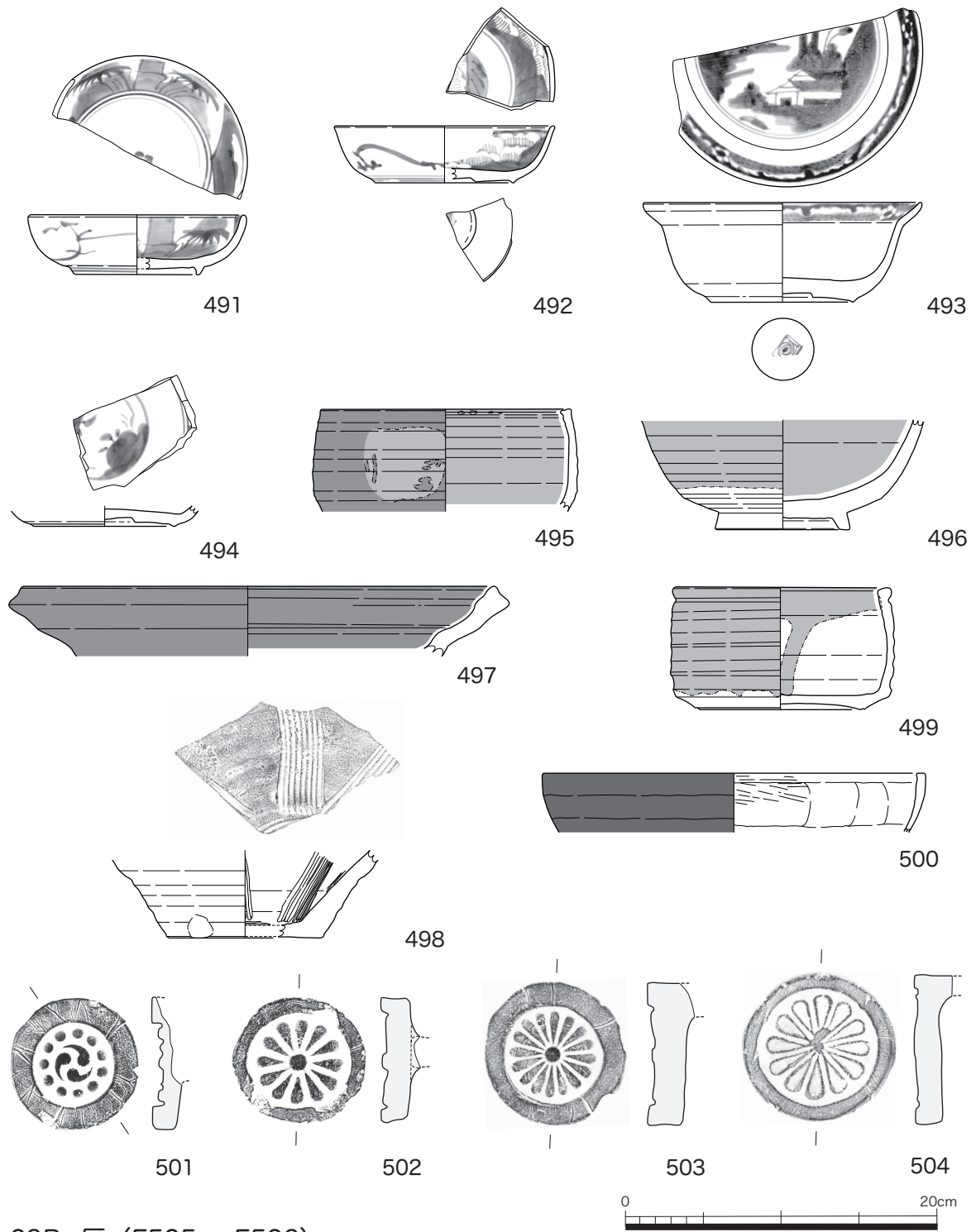
516は南部系陶器の小碗で、断面三角形状の高台が付く、517は南部系陶器の山茶碗で口縁部径12.4cmである。

(14) 09Cd区出土の陶器(図40-518・519)

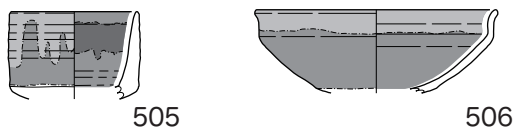
518は須恵器の高台のない杯身で、519は南部系陶器の山茶碗で、内面に煤の付着がみられる。

(15) 09Ce区包含層など出土の陶磁器(図40-520～528・図41-531～533)

日置本郷 B 遺跡



09Ba 区 (E505 ~ E506)



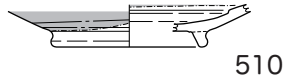
■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 39 09A 区表土出土土器・陶磁器 2、09Ba 区出土土器・陶磁器 (1/4)

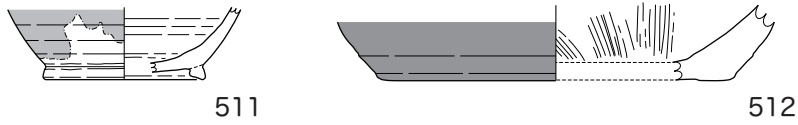
09Bb 区 004SD 貝層 3 (E507 ~ E509)



09Bc 区 002SK 貝層 2 (E510)



09Ca 区 (E511・E512)



09Cb 区 包含層 (E513 ~ E515)



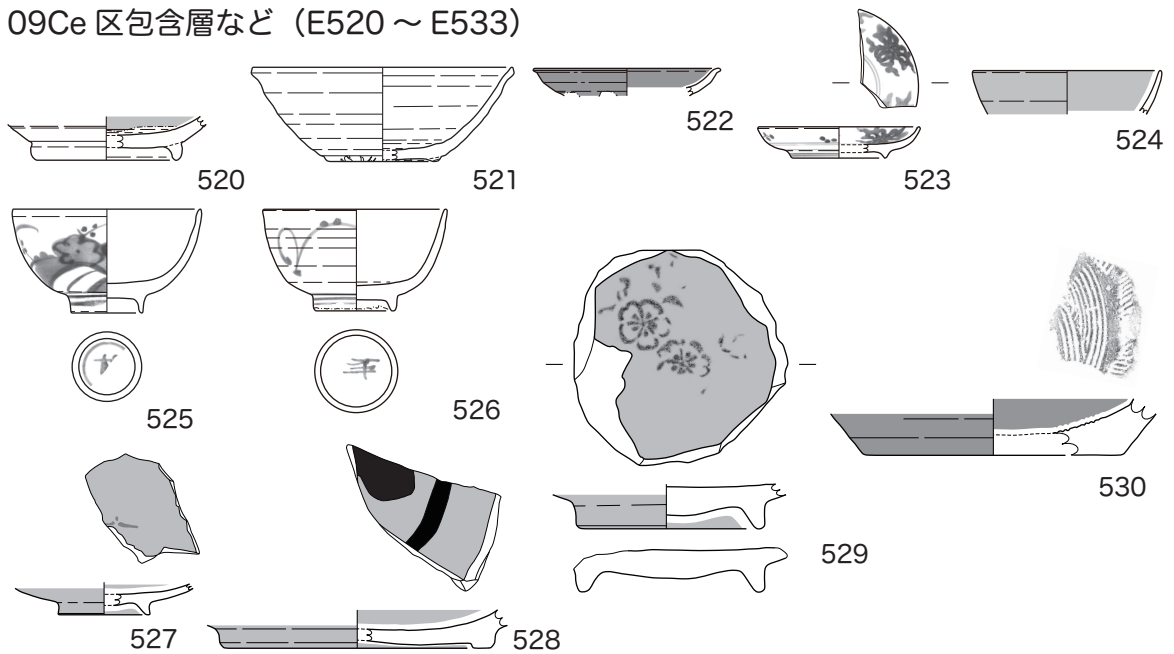
09Cc 区 包含層など (E516・E517)



09Cd 区 (E518・E519)



09Ce 区 包含層など (E520 ~ E533)



■ 灰釉 ■ 青磁 ■ 緑釉 ■ 鉄釉 ■ 炭化物・煤

図 40 09Bb 区・09Bc 区・09Ca 区 ~ 09Ce 区出土土器・陶磁器 (1/4)

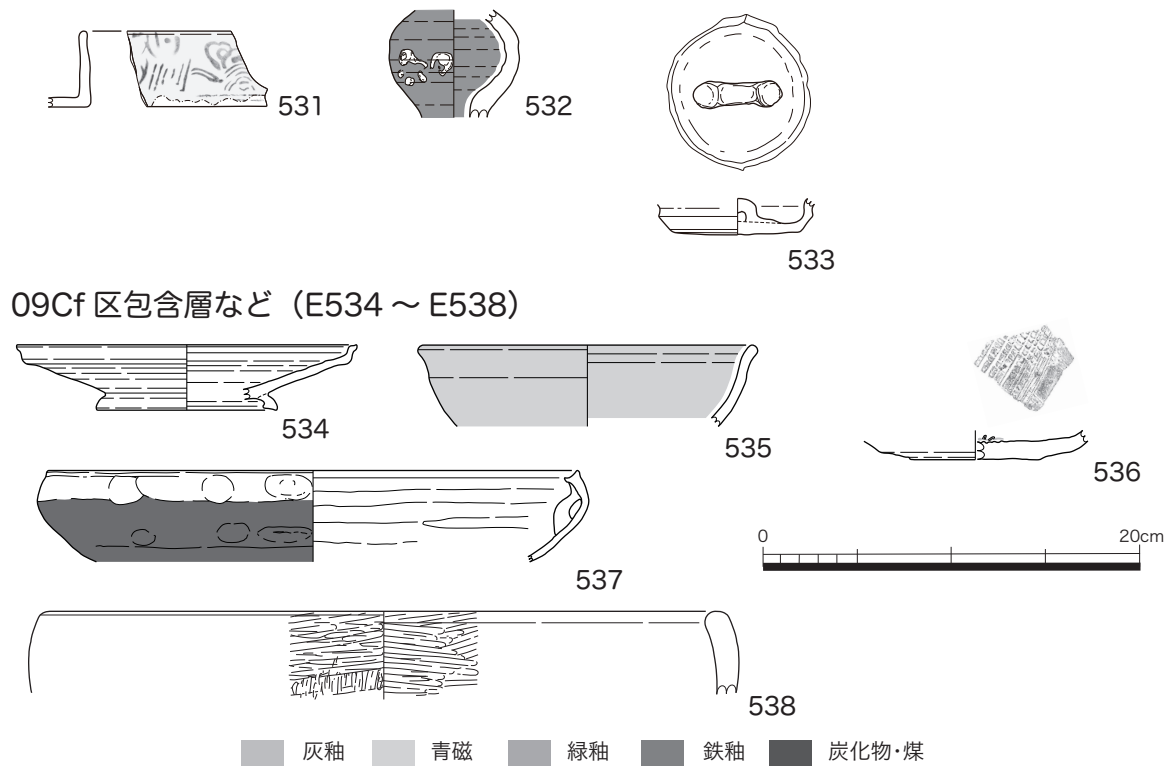


図 41 09Ce 区・09Cf 区出土土器・陶磁器 (1/4)

平安時代から近世までのものがある。520 は灰釉陶器の碗で、断面比較的高い内湾状高台が付く。521 は南部系陶器の山茶碗で口縁部径 14.0cm のもの。522～533 は近世後期のもので、522 は内・外面に鉄釉を施す小皿、523 は内・外面に染付けのある磁器の小皿、524 は内・外面に灰釉に近い施釉がみられる陶器の碗、525・526 は外面に染付けの樹木などの絵のある磁器碗、527 は内面底部に染付けのある陶器の灰釉皿、528 は陶器の灰釉大皿で、内面底部に黒色釉による絵か文字が描かれている。529 は陶器の灰釉碗で、内面底部にコバルト色釉の花文がみられる。530 は内・外面に鉄釉の施された陶器の鉢、532 は陶器の瓶盥で、志野釉に近い施釉に褐色釉の施文がみられる。532 は陶器の茶瓶で、外面鉄釉に白色の浮き彫り文様がみられる。533 は陶器の蓋で、外面天井部に把手が付けられている。

(16) 09Cf 区包含層など出土の土器・陶磁器 (図 41-534～538)

古代から近世のものまでである。534 は須恵器の盤で、比較的しっかりした高台が付く。535 は青磁の碗で、口縁部が横ナデにより、やや稜をもつ

て外反する。536 は古瀬戸陶器の灰釉卸皿で、内面に線刻の卸目がみられる。537 は近世後期の焙烙鍋で、内耳がある。538 は瓦質土器の火舎と思われるもので、内外面に横ミガキ調整がみられる。

2. 土製品

(1) 土錘 (図 42-539～562)

ナデ調整のみで成形され、中程がややふくらむ筒状形態の土製品で、中世後半期の 09A 区 005SK や 056SK、018SE、020SK の遺構から出土するものがあり、他の資料もこれらの遺構周辺の包含層から出土している。孔径から径 0.4cm～0.6cm の 539～546、径 0.7cm～0.8cm の 547～551、径が 1.0cm 以上の 552～562 に分けられる。興味深いことに、540 が出土した 09A 区 005SK とその周辺から出土した 540・543・548 などは孔径が細いタイプのもが多く、09A 区 018SE から出土した 553～556 とその周辺から出土したものは孔径が太いものが多い傾向がある。

(2) 陶丸 (図 43-563～568)

土錘 (E539 ~ E562)

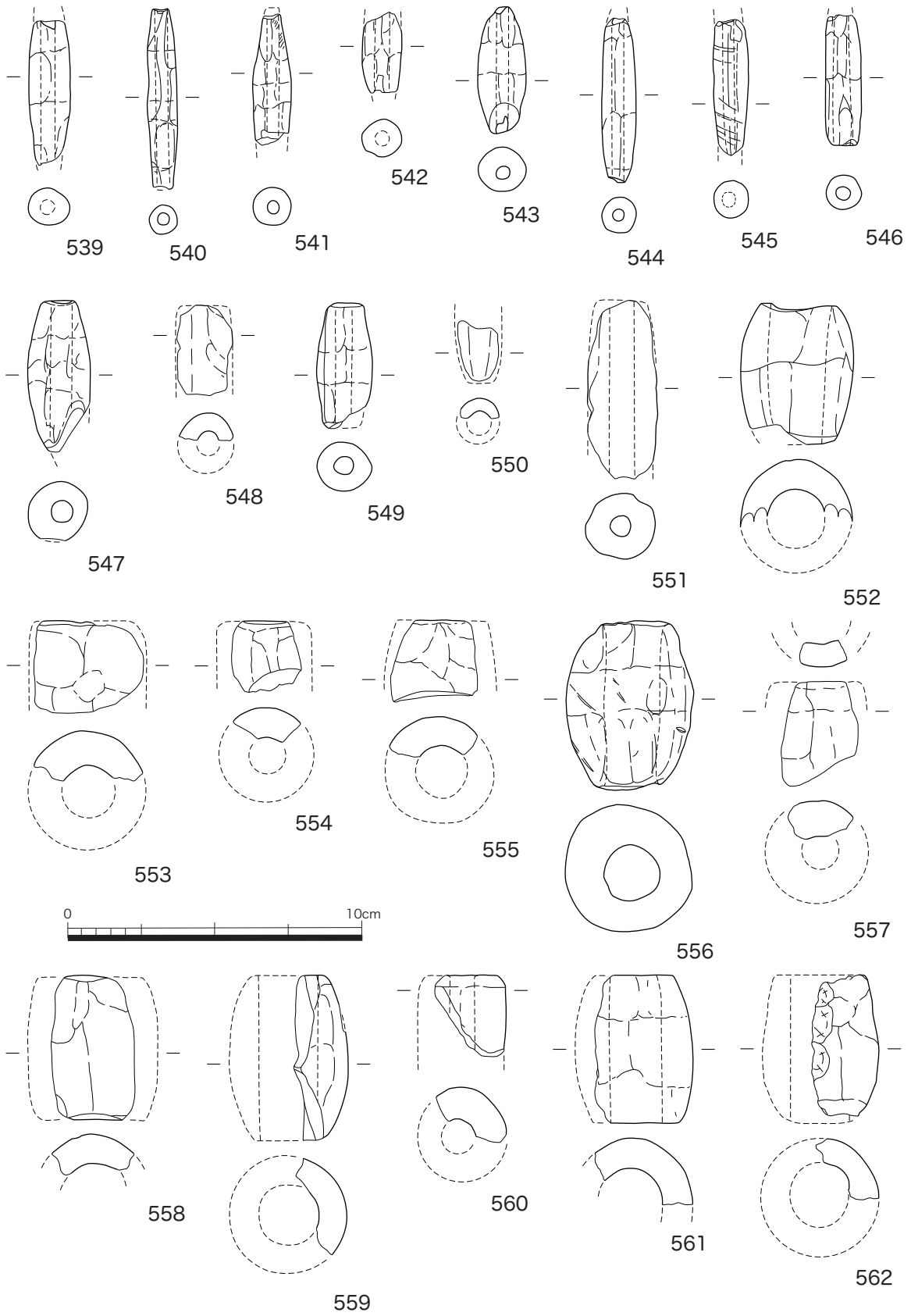


図42 土錘 (1/2)

日置本郷 B 遺跡

陶丸 (E563 ~ E568)

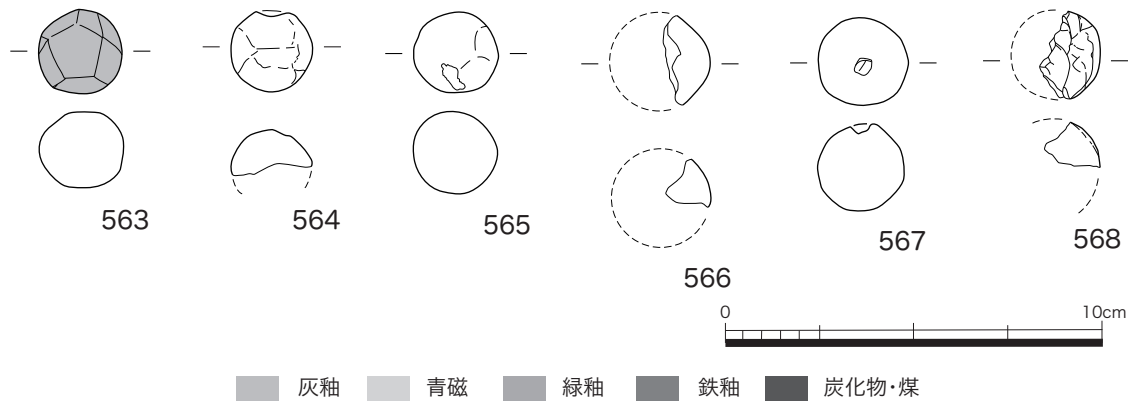


図 43 陶丸 (1/2)

ナデ調整のみで作られた南部系陶器と思われる球形の土製品で、径 2.2cm ~ 2.7cm 程のものである。563 は自然釉がかかっている。

(3) 加工円盤 (図 44-569 ~ 590)

土師器、陶器と磁器を円形に加工したもので、主に中世から近代にかけてのものがある。円形に打撃して加工した破面を残すものが多いが、575・587 破面が少しあるいは部分的に研磨されているものと、579・589 のように破面が全体的に研磨されているものがある。586 が須恵器の甕の底部と思われるもの、576・590 が土師器の破片、575 が灰釉陶器の碗片と思われるもの、569 ~ 573・581 が南部系陶器の破片で、569 ~ 572 は山茶碗の底部付近の破片、585 が近代の磁器の碗片を利用したものである。その他は常滑産の甕片を利用したものが多いようである。大きさから径 1.7cm ~ 2.7cm の小型のもの 569 ~ 580、径 3.0cm ~ 4.3cm の中型のもの 581 ~ 588、径 6.0cm 前後の大型のもの 589・590 に分けられ、小型のものに中世前半期のものが多く、中型 ~ 大型のものは近世後期以後のものが多い傾向がある。

3. 金属製品

(1) 銅銭 (図 45-M01 ~ M22)

銅銭は、09A 区 015SK と 015SK に隣接する地点において、22 点がまとまって出土しており、中世の墓への埋納に関連するものと考えられる。銅銭は径 2.4cm ~ 2.5cm 程で、文字が判読できるものは、嘉泰通寶が M1、元豊通寶

が M04・M12・M13・M22、大観通寶が M07 ~ M09、開元通寶が M15・M18、熙寧元寶が M16・M17、乾元重寶が M21 である。

(2) 鉄製品など (図 46-M23 ~ M46)

鉄製品で残存状態の良いものを 24 点図化した。M23・M24・M28 は断面の形状などから刀子と思われるもので、M23 は刃先が欠損している。M25 は板状の不明品、M26 扁平含鉄遺物、M27 は断面扁平な棒状含鉄遺物。M29 ~ M43 は釘と思われるもので、M43 には木材の痕跡が付着している。M40 と M41 はほぼ直角に曲がっている。M44 は断面台形状の扁平含鉄遺物、M45 も断面方形の棒状含鉄遺物、M46 は断面円形に近い棒状含鉄遺物である。

(3) 鍛冶関連資料・銅滴 (図 47-M47 ~ M53)

M47 ~ M53 は鍛冶関連資料で、鍛冶工程が付近で行われたことを示すものである。M47 は鞆の羽口で、孔径 1.5cm である。M48 ~ M53 は鉄滓で、M48・M49 が 4 分の 1 分割碗型滓、M50・M52 はガラス質が軽い流動滓 B で、M50 が重さ 0.6g、M52 には石材が付着しており、羽口に近い位置で形成されたものと思われる。M51・M53 は碗型滓で、M51 は幅 2.5cm、厚み 2.0cm の細長い形状のもの、M53 は常滑産の体部片に付着しているもので、長径 14.8cm、短径 10.4cm、厚み 4.4cm をはかる大型のものである。M54 は銅滴で、長径 2.8cm、厚み 2.9cm のもの、鑄銅・銅細工の加工が付近で行われた可能性がある。

加工円盤 (E569 ~ E590)

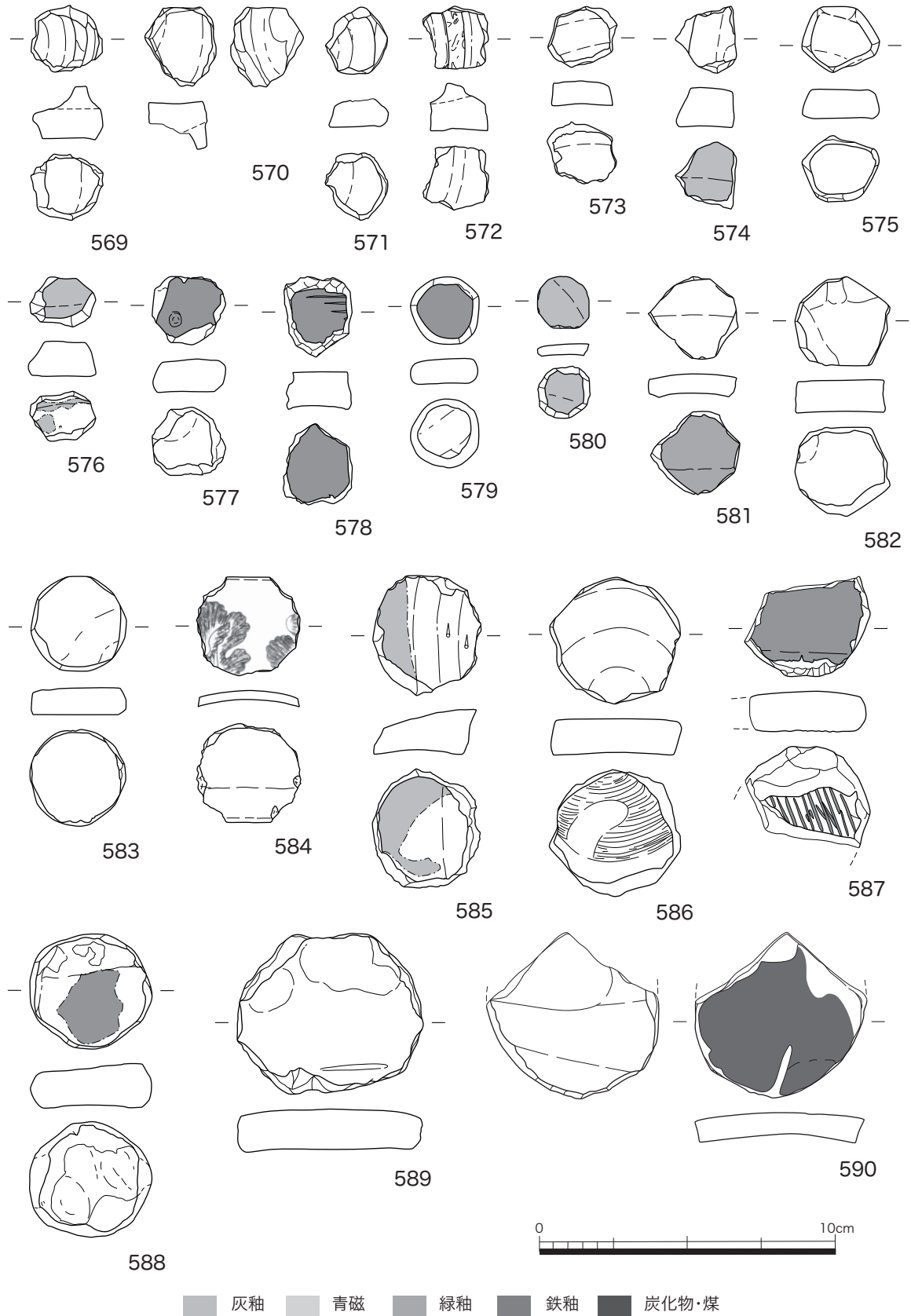


図44 加工円盤 (1/2)

日置本郷 B 遺跡

銅銭 (M01 ~ M22)

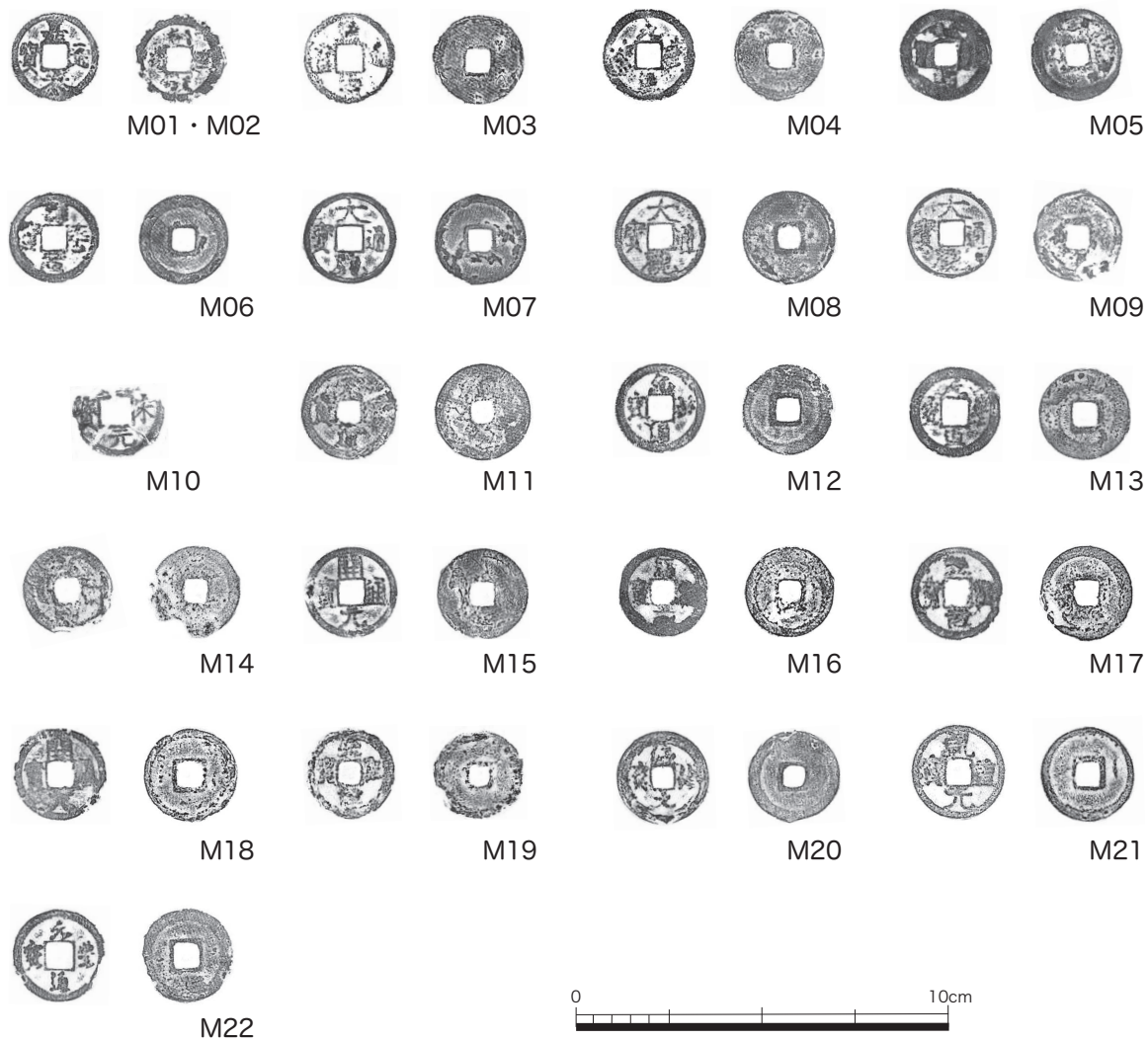


図 45 銅銭 (1/2)

4. 石製品 (図 48-S01 ~ S15)

石製品には砥石 11 点、火打石 3 点、洗濯石 1 点がある。S01 ~ S11 は砥石で、S01 が泥岩の他は砂岩～凝灰岩を利用したもので、S08・S10 が典型的な撥形をしており、その他も破片になるまで使用されて研ぎ痕が残されている。S07・S10・S11 に煤の付着や被熱痕がみられる。S03 には研ぎ面に、機能は不明であるが、5 個の小穴がある。S12 ~ S14 は火打石と思われるチャート製の剥片で、S12 には使用痕らしき潰れがみられるが、S13・S14 は使用痕が不明瞭である。S15 は軽石のやや扁平な亜円礫で、洗濯のような機能を推定した。

5. 木製品 (図 49-W01 ~ W05)

木製品として出土しているものは、09A 区 018SE の中で検出された井戸材で、板材 15 点程と角材 1 点を採集することができた。樹種は 10 点分析し、板材がコウヤマキ 7 点、ヒノキ 2 点、角材 1 点がコウヤマキに樹種同定されている。W01 はコウヤマキ製の桁目の板材で、幅 10.0cm、厚み 4.0cm であった。W02・W04・W05 はコウヤマキ製の板目の板材で、W02・W04・W05 は幅 6.0cm ~ 8.8cm、厚み 1.0cm ~ 1.4cm のものである。M03 はコウヤマキ製の角材で、幅 4.6cm、厚み 4.0cm で、井戸材を支えている支柱であった可能性がある。

鉄製品など (M23 ~ M46)

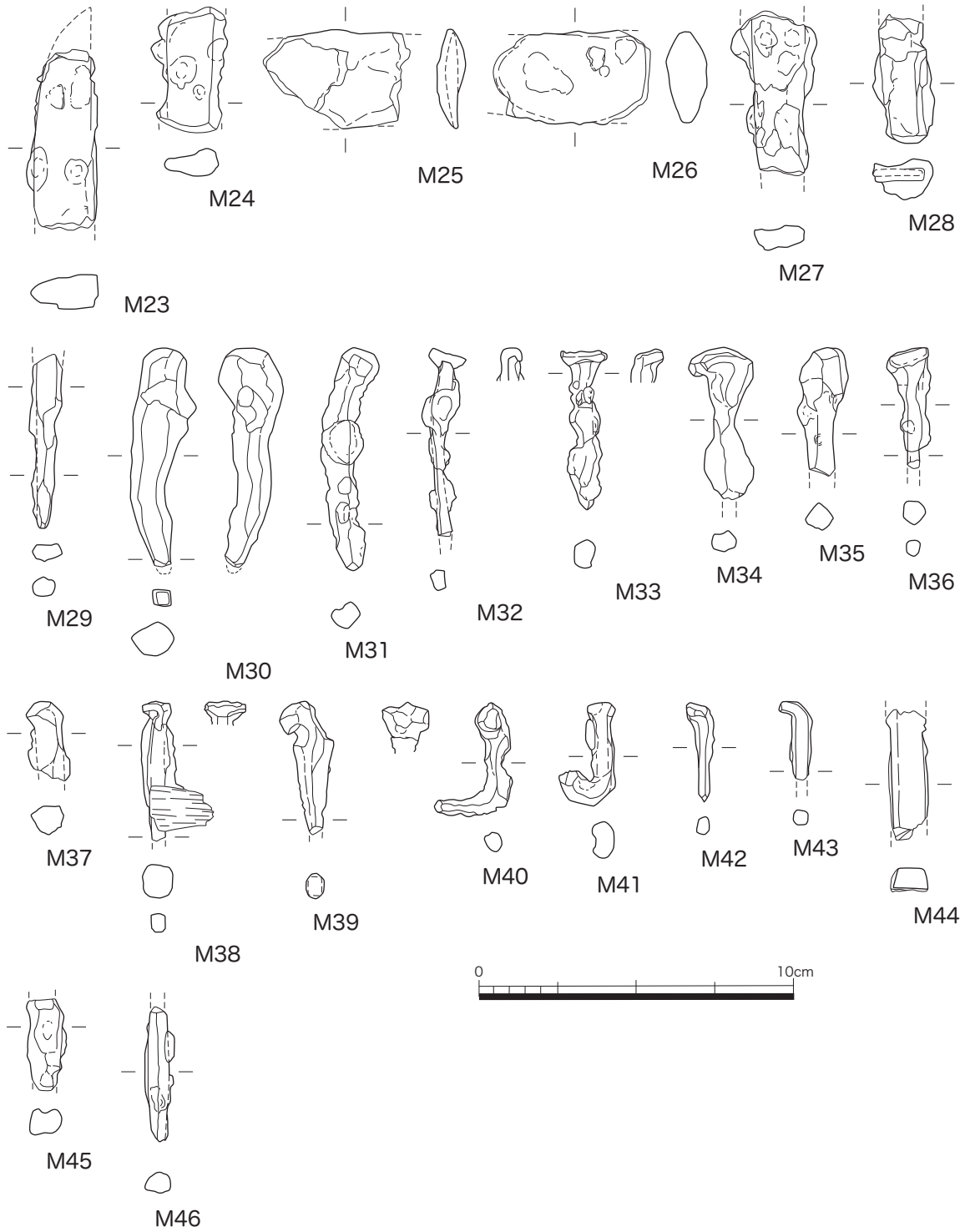


図 46 鉄製品など (1/2)

日置本郷 B 遺跡

鍛冶関連資料・銅滴 (M47 ~ M54)

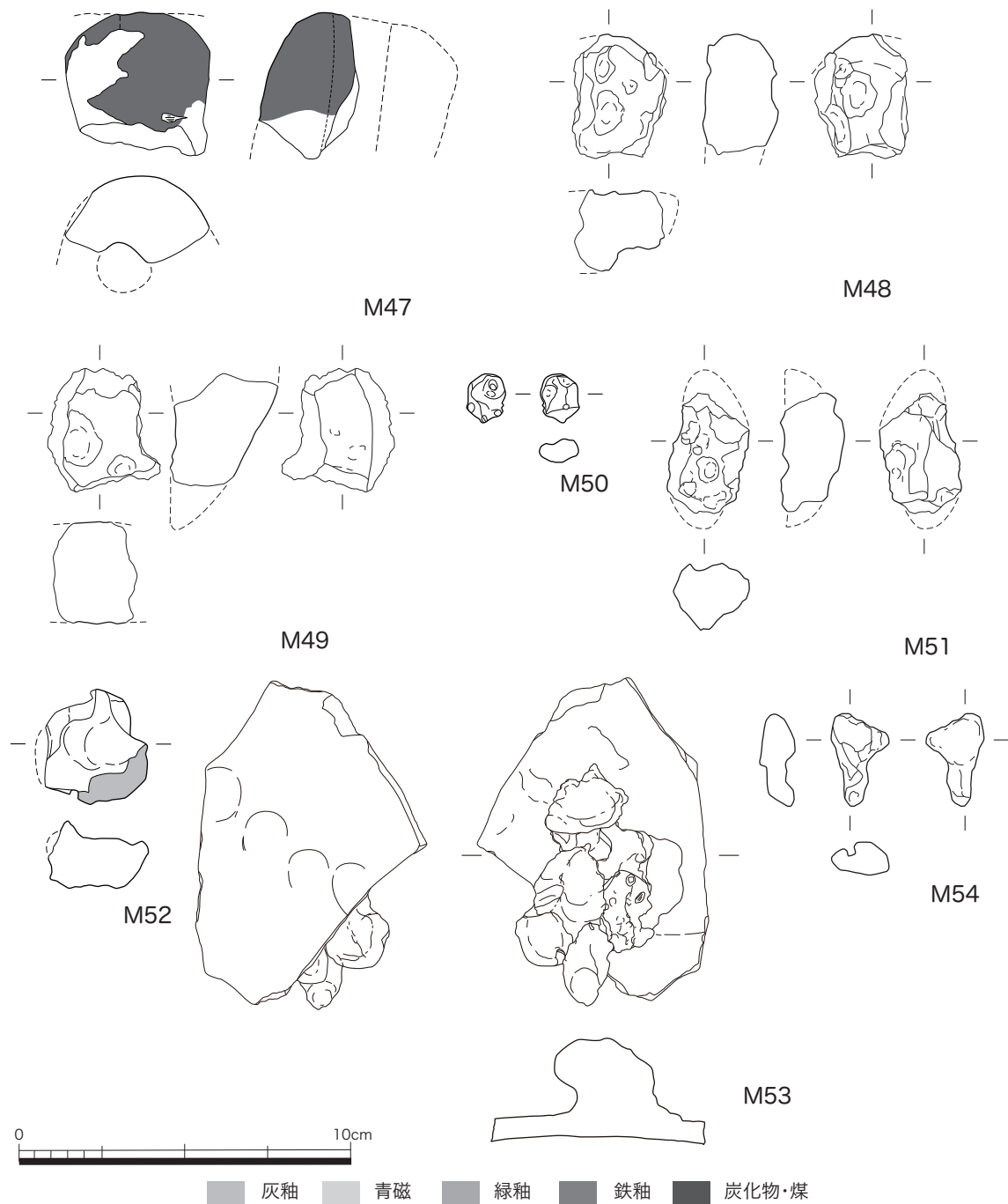


図 47 鍛冶関連資料・銅滴 (1/2)

参考文献

齊藤孝正 1995 『須恵器集成図録』第3巻、東日本編 I、雄山閣
 赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』小学館
 鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

金子健一 1996 「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 東海土器研究会編 2000 『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1回東海土器研究会
 藤澤良祐 2007 「編年表」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

石製品 (S01 ~ S15)



図48 石製品 (S01 ~ S09・S12 ~ S15は1/2、S10・S11は1/4)

日置本郷 B 遺跡

木製品 (W01 ~ W05)

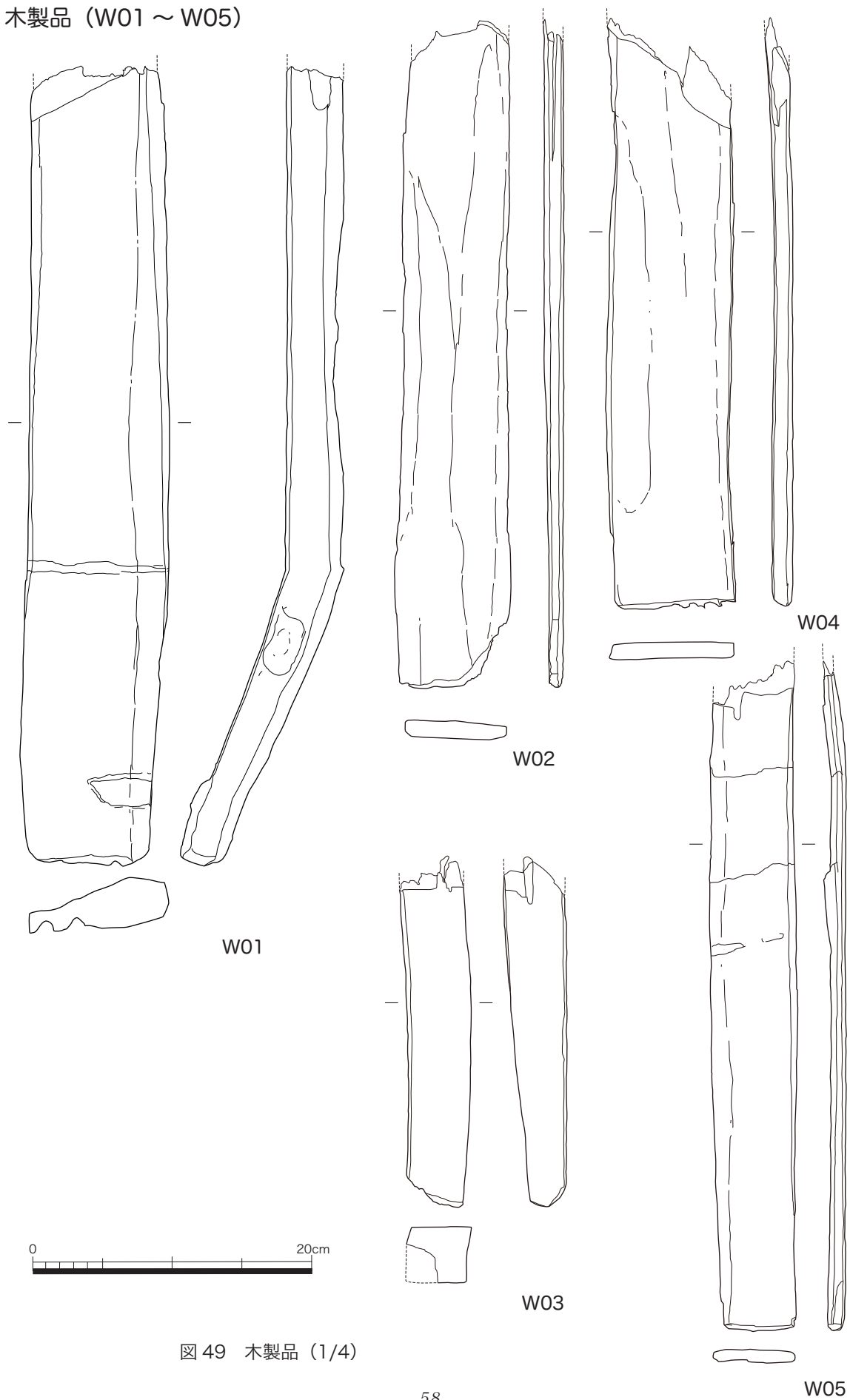


図 49 木製品 (1/4)

第4章 自然科学分析

A. 日置本郷 B 遺跡の動物遺体同定

中村 賢太郎 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曾川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。日置本郷 B 遺跡の発掘調査では奈良、平安、鎌倉、室町時代などの遺構や遺物が検出されている。ここでは、A 区の方形土坑とその周辺から出土した骨片および B 区と C 区の貝層出土の動物遺体について報告する。

小型の脊椎動物の同定にあたっては、早稲田大学の樋泉岳二先生にご教示をいただいた。

2. 試料と方法

A 区の方形土坑 005SK (グリッド 7D7m) と 005SK 周辺 (グリッド 7D6m) から出土した骨片は現場で採取された。試料数は、005SK では Dot.001 ~ 005、007 ~ 010 の 9 点、005SK 周辺では 1 点、計 10 点である。

貝層の試料は Ca 区 1 点、Bc 区 2 点、Bb 区 4 点、計 7 点である。No.1 は Ca 区の貝層④、No.2 は Bc 区の貝層①と 001SK、No.3 は Bc 区の貝層② (002SK)、No.4 は Bb 区の貝層③下位、No.5 は Bb 区の貝層③最下位、No.6 は Bb 区の貝層③上

位、No.7 は Bb 区の貝層③下位から採取された。貝層の試料については、水洗選別を行い、篩により 1mm 以上の動物遺体を回収した。さらに 1mm 以上の動物遺体を篩により 1mm 以上 5mm 未満と 5mm 以上とに分離した。貝類のうち二枚貝は 5mm 以上で殻頂が残るもの、巻貝は 1mm 以上で殻軸が 2 巻以上残るものを同定と計数の対象とした。甲殻類は 5mm 以上、魚類、爬虫類、両生類、哺乳類は 1mm 以上の試料を同定と計数の対象とした。

同定と計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

方形土坑 005SK と 005SK 周辺から出土した骨片は比較的大型の哺乳類と見られる。しかし、いずれも小片であり、部位と種が分かる破片は無かった。色調を見ると黄褐色や白色の破片があった。白色の破片は火を受けている可能性がある。

貝層の動物遺体は貝類が多くを占め、その他に甲殻類、爬虫類、両生類、魚類、哺乳類が少量見られた。貝類では、マガキ、ハマグリ、ヤマトシ

表 2 貝類と甲殻類一覧

No.	地区	層位	試料量(kg)	マガキ		ハマグリ		ヤマトシジミ		オキシジミ		シオフキ		不明二枚貝 左右一括	カワニナ	カワニナ幼貝?	オオタニシ	マイマイ類	微小巻貝	フジツボ類
				左	右	左	右	左	右	左	右									
1	09Ca	貝層④	10.3			51	48	5	4					4					5	
2	09Bc	貝層①と001SK	9.7	+		20	30	18	18		1	1		12			8		30	
3	09Bc	貝層②(002SK)	13.7	172	80	80	69	87	116					2					5	+
4	09Bb	貝層③下位	14.7	210	227	34	21	74	57				2		1			4	26	+
5	09Bb	貝層③最下位	14.7	136	63	25	34	13	13					1		1	1	1	3	+
6	09Bb	貝層③上位	16.6	21	15	42	34	55	63	1				23		1	5		6	
7	09Bb	貝層③下位	18.1	138	156	20	33	100	83					3					13	+

+は破片あり、計数せず

4と7はマガキ稚貝の右殻各1点含む

表 3 爬虫類、両生類、魚類、哺乳類一覧

No.	地区	層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量
3	09Bc	貝層②(002SK)	カエル類	椎骨	—	完存	1
			カエル類?	椎骨	—	ほぼ完存	1
			ニシン科	椎骨	—	ほぼ完存	3
			哺乳類(小型)	指骨	不明	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
4	09Bb	貝層③下位	サバ科?	方骨	右	破片	1
			ネズミ類?	四肢骨	不明	骨幹	1
6	09Bb	貝層③上位	ヘビ類	椎骨	—	ほぼ完存	5
			カエル類	四肢骨	不明	骨幹	1
			ニシン科	椎骨	—	椎体	2
			ウナギ属	椎骨	—	完存	1
			コチ科	椎骨	—	破片	1
7	09Bb	貝層③下位	アジ科	椎骨	—	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
			食肉目	末節骨	不明	破片	1

ジミが多く見られた。他にオキシジミ、シオフキ、カワニナ、オオタニシ、マイマイ類、陸産と思われる微小な巻貝が見られた。Bb 区と Bc 区の貝層 (No.2～7) ではマガキ、ハマグリ、ヤマトシジミが多いが、Ca 区の貝層 (No.1) ではハマグリが多い点で B 区と共通するが、マガキが無く、ヤマトシジミが少ないという点で異なっていた。なお、No.4 と 7 はマガキの稚貝の右殻を各 1 点含んでいた。甲殻類ではフジツボ類の破片が No.3～5、7 で見られた。貝層から出土した爬虫類、両生類、魚類、哺乳類は表 2 に示したとおりである。爬虫類ではヘビ類、両生類ではカエル類、魚類ではニシン科、アジ科、コチ科、サバ科?、ウナギ属、哺乳類ではネズミ類、食肉目が見られた。

4. 考察

Ca 区の貝層 (No.1) では、内湾に生息するハマグリが多く、汽水域に生息するヤマトシジミが見られ、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が行われ食用にされたと考えられる。

Bc 区および Bb 区の貝層 (No.2～7) では内湾に生息するマガキ、ハマグリ、汽水域に生息す

るヤマトシジミが多く、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が盛んに行われ食用にされたと考えられる。また、カワニナやオオタニシが見られることから淡水域での貝類の採取も行われたと考えられる。また、フジツボ類は No.3～5、7 に見られるが、これらの試料ではマガキも多いことから、フジツボ類はマガキに付着して持ち込まれたものである可能性が高い。

魚類では、海域に生息するニシン科、アジ科、コチ科、淡水域に生息するウナギ属が見られたことから、海域や淡水域で魚類が採取され食用にされたと考えられる。

ヘビ類、カエル類、ネズミ類についてはヒトにより利用されたかどうか不明である。食肉目はおそらくはヒトにより利用されたと考えられる。

A. 日置本郷 B 遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曾川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。ここでは、鎌倉～室町時代の井戸材の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、調査区 09A の 018SK 下層から出土した井戸材 10 点である。剃刀を用いて試料の 3 断面 (横断面・接線断面・放射断面) から切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとヒノキの 2 分類群が確認された。木取りは柾目と角材もあるが、板目が最も多い。結果の一覧を表 1 に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図版 1 1a-1c(No.1)、2a-2c(No.3)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は単列で 1～15 細胞高であるが、一般に 5～6 細胞高以下で低い。分野壁孔は窓状である。

コウヤマキは福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。耐朽性・耐湿

性が強く、強靱である。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版 1 3a-3c(No.8)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

4. まとめ

コウヤマキ、ヒノキともに山地に生育する常緑高木である。本遺跡は低地に立地するため、近隣の山地から持ち込まれた材である可能性が高い。また、材質は両者とも耐朽性・耐湿性に優れており、木理直通で割裂性が大きいため、加工も容易である。特にコウヤマキは耐水性に極めて強いいため、長期間水湿にさらされても腐りにくく、棺や柱材など土中での利用や、桶類など水場での利用が多くみられる (伊東・佐野他, 2011)。本遺跡の井戸材への樹種利用傾向も、水場での利用に適した材質を選択利用した結果と思われる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。

表 4 樹種同定結果一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構	樹種	木取り
1	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	柾目
2	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
3	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	角材
4	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
5	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
6	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
7	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
8	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目
9	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
10	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目

日置本郷 B 遺跡

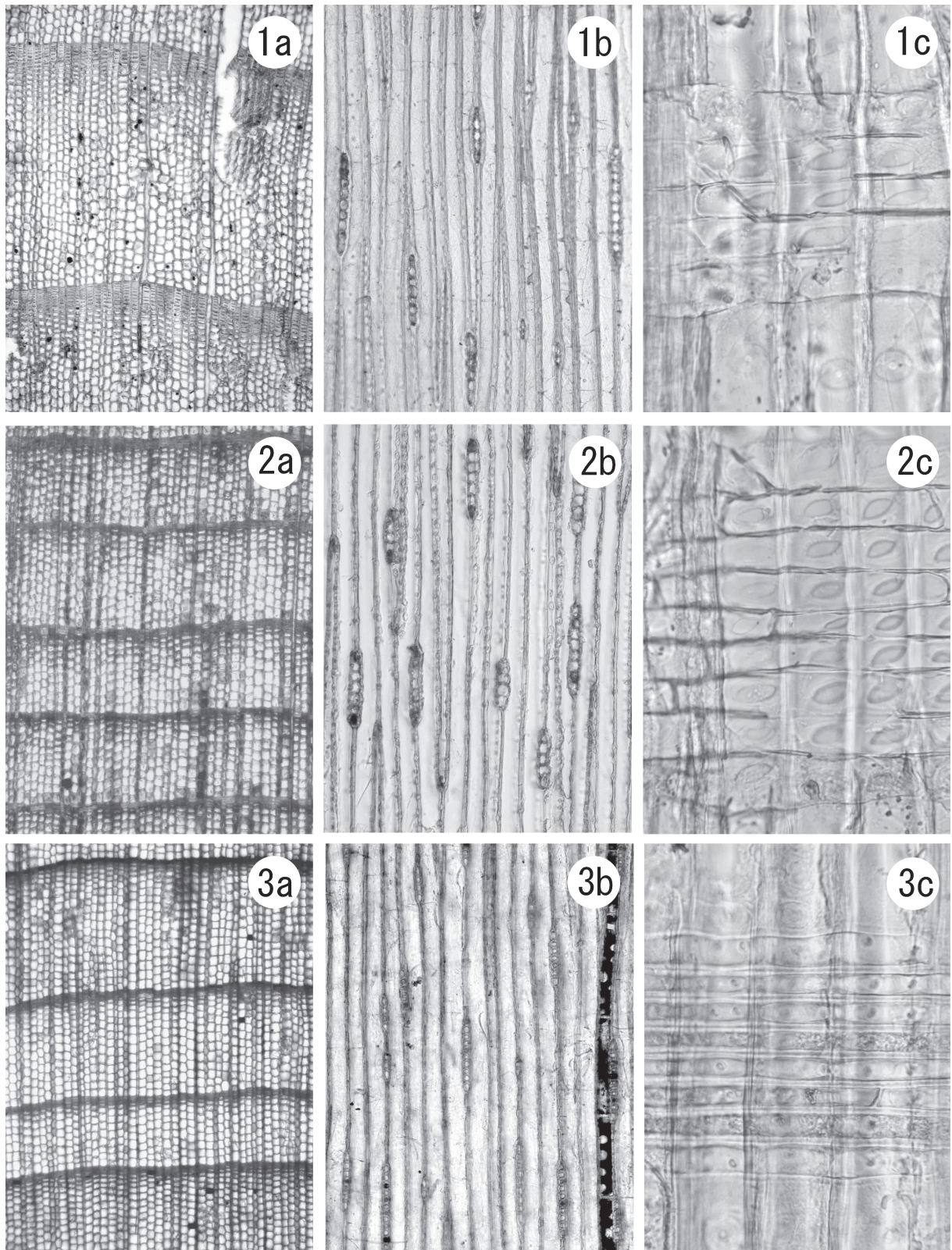


図 50 日置本郷 B 遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真
1a-1c. コウヤマキ (No.1) 、2a-2c. コウヤマキ (No.3) 、3a-3c. ヒノキ (No.8)
a:横断面 (スケール=500 μ m) 、b:接線断面 (スケール=200 μ m) 、c:放射断面 (スケール=50 μ m)

第5章 総括

最後に、遺構と遺物の報告についてまとめたい。

1. 遺構の変遷 (図 51)

今回の調査区の地形は、09Ab 区から 09Ac 区付近と 09Ba 区から 09Bc 区付近に遺跡基盤層の高まりがみられ、古代から中世の遺構群が確認された。09Ab 区から 09Ac 区付近を挟んで、北側の 09Aa 区において、古代からつづき中世後半期に埋没していく自然流路 002NR が北東から南西方向に流れ、南側の 09Ad 区では古代から近世に存在した谷地形の 096NR が東西方向にはしる。この 096NR の南にある 09Ba 区～09Bc 区において古代から中世の遺構が認められる。そして、南にある 09Ca 区から 09Cf 区にかけて北から南に緩やかに低くなる地形が想定され、古代から近世の遺物が出土している。

遺構の変遷については、古代の可能性のある遺構が 09Aa 区の南側から 09Ac 区と 09Bc 区においてある。特に 09Ac 区において柱の沈み込みを防ぐ機能をもつ根石がみられる柱穴 025SK と 049SK がみられ、建物や柵列の跡の可能性があり、今回の調査区における中心的施設と思われる。また 09Ab 区の 059SK、067SK、069SK 付近にも古代の可能性のある遺構が分布する。また 09Bc 区において平安時代前半の時期が推定できる 002SK がみられ、内湾に生息するマガキ・ハマグリと汽水域に生息するヤマトシジミなどの貝類が出土したのは、09A 区のほぼ全域において出土した製塩土器の存在とともに本遺跡の営みの特徴づけるものと思われる。

中世前半期は、遺物は比較的多数出土するが、宋銭が出土した 09Ab 区の 014SK・015SK、073SK、09Ac 区の 043SK があるのみである。09Ab 区 014SK・015SK は墓坑の可能性が高く、銅銭の出土位置からは中世後半期の可能性もある。

中世後半期は多数の遺物が出土しており、多数

の遺構が確認された。特徴的な遺構としては、北側の 09Aa 区の 002NR の南側では、大型ほ乳類の骨が出土した 005SK と同様な形態の 003SK がみつかっており、この部分に中世前半期からつづく墓域が推定できる。次に 09Ab 区では 095SB が確認されており、付近に 056SK、060SK、068SK、074SK、075SD、082SK があり、多数の遺構変遷が想定され、その南側に中世後半期に埋没する 09Ac 区の 018SE、044SK、046SK、047SK がみられる。この遺構群の南側に北北東から南南西にのびる区画溝 041SD と 035SD が二条平行して確認され、溝で区画された西側が遺跡の生活域の中心部分と想定される。そして溝の東側においても 09Ac 区 019SK、020SK、029SK、030SK がみられ、生活域の区画が存在したものと思われる。この中で 16 世紀にかかる大窯期の遺構と考えられるのは 018SE と 074SK である。

続く 16 世紀後半から江戸時代前半の遺構・遺物はほとんどなく、近世の遺構・遺物が確認できるのは 18 世紀後半のものである。北より 09Aa 区 001NR が近世まで流路として残り、その南に 09Ab 区 054SK がみられる。また南側ではほぼ埋まりかけた 096NR の北側肩部で 017SD が、南側縁辺部にて 094SD が掘削されている。

2. 遺物の出土分布傾向 (図 52)

本遺跡の出土遺物を整理するにあたり、各出土地点毎の遺物の器種毎の点数を大まかにカウントし、グリッド単位にその出土傾向を分析したものが図 52 である。出土遺物には古代の須恵器から近世の陶磁器や土師器、近代の陶磁器まであり、出土した遺物の主体を占めるのは、古代から中世後半期にかけての遺物であった。また比較的狭い範囲の調査区であった 09Ba 区～09Bc 区、09Ca 区～09Cf 区においても、出土量の違いはあるものの 09A 区と同様の種類の遺物が出土していることが特徴である。

図52 日置本郷B遺跡の遺物出土分布（その他の「緑」：緑釉陶器、「塩」：製塩土器、「土」：土錘、「青」：青磁、「白」：白磁、「瓦」：中世瓦、「丸」：陶丸）

調査区	グリッド	須恵器	古代土師器	灰土師器	中部土師器	石瀬戸陶器	常滑産陶器	大塚期陶器	近世陶磁器	近世土師器	備考
09Ab区	7D4l,m,n	▲▲	◆◆	◆◆	◆	▲	●●	○1			001NR
	7D5l,m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●				001NR-002NR
	7D6l,m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			002NR
	7D7l,m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●				003SK-005SK
	7D8l,m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
	7D9l,m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
	7D10m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			014SK-015SK
	7D11m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			095SB
09Ac区	7D12m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			074SK
	7D13m,n	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			018SE
	7D14n,m,o	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
	7D15n,o	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			041SD-046SD
09Ad区	7D16n,o	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			025SK-049SK-036SD
	7D17e,p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
	7D18o,p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			097SK
	7D19o,p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
09Ae区	7D20o,p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			096NR
	8D1o,p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			096NR
	8D2p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			094SD
09B区	8D3p	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			003SK
		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			004SD
09Bb区		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			001SK-002SK
09Cc区		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			005SK
09Cd区		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
09Ce区		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			
09Cf区		◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	◆◆	●●	▲			

その中で一定の出土傾向を分析できる09A区をみると、遺構の多数確認されている09Ab区と09Ac区とその周辺である北のグリッド7D6l,m,nから南のグリッド7D19o,pの範囲を中心に多数の遺物が出土しており、古代の須恵器・古代土師器・灰釉陶器・南部系陶器・北部系陶器・古瀬戸陶器・常滑産陶器がほぼ同様な量比の推移で出土する傾向がみられる。これらと異なる傾向を示すのは、大塚期の陶器と近世陶磁器がある。

大塚期の陶器は北のグリッド7D11m,nから南のグリッド7D17o,pの09Ab区と09Ac区のより限られた範囲を中心に出土する傾向が見られ、大塚期まで営まれた可能性のある074SKと018SE付近からの出土である。またこの大塚期の陶器の出土分布傾向に近いものとして中世の瓦の出土分布が類似しており、軒瓦の出土量が平瓦の出土量に近い数出土することから、棟などを瓦で飾る建物の存在もこの時期に推定しておきたい。

近世陶磁器は、大塚期の陶器の分布とは反対に、調査区全範囲から散在的に、比較的均等に出土する傾向がみられる。

この3つの異なる時期の遺物の出土傾向を遺構の変遷とともに考えると、古代から中世後半期にかけては、遺構が多数確認された09Ab区と09Ac区を中心に遺物の出土量を多く、その周辺に出土量が少なくなる傾向から、遺物の使用・廃棄が、遺構の多数存在する地点を中心に営まれた結果を反映するものと考えられる。そして大塚期の陶器はより狭い限られた範囲から出土するのは、大塚期の人々の営みが09Ab区018SEと074SK付近の限られた範囲で営まれたことと、遺構の変遷の中で、古代から続く営みの終末の時期に当たる為、人為的・自然的遺物の散在的移動が起こらなかった可能性がある。

日置本郷 B 遺跡

もう一つの近世陶磁器の出土傾向は、本遺跡における人々の営みが一つや少数の極に集中するのではなく、散在的・均等的に遺物が出土する傾向と同様に、均等化した営みが散在的に行われたことを反映するものと考えられる。

3. 日置本郷 B 遺跡の特徴

最後に、以上の分析をふまえ、本遺跡の調査から考えられる特徴を述べたい。

遺構は古代から中世後半期までと近世後期のものに主に分かれ、古代から中世後半期の遺構は大窯期にかかる 16 世紀前半まで確認できる。古代～中世後半期の中では、中世後半期の遺構が多く、この時期には多くの変遷が推定できる。その遺構分布は中世後半期において 09Ab 区から 09Ac 区を中心に多数存在し、周辺にかけて少なくなる。この傾向は遺構が少ないものの、古代や中世前半の遺構にも窺われ、出土遺物の分布傾向からも同様な結果を得ることができ、中世後半期の遺跡の終末期である大窯期の陶器の分布にはよりこの傾向が強くみられる。そして近世の陶磁器が均等で散在して出土する傾向は、ほぼ 09A 区に散在して分布する近世の遺構とも対応する。

では、このような古代から中世後半期と近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向の違いが起る要因は、何であろうか。まず考えられるのは、古代から中世後半期の遺構・出土遺物の分布傾向が、古代から中世後半期にかけて存在する 09Aa 区 002NR と 09Ad 区 096NR にみられる遺跡の自然地形の起伏から強い影響を受けて起る現象と考えられる点である。反対に近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向は、中世後半まで存在した自然流路が埋没し、溝などの掘削により、人為的開発が進んだ結果、自然地形の起伏からの影響が少なくなった、あるいは自然地形の起伏を利用した土地利用が進んだものと考えられないであろうか。

よって、当遺跡の中心となる古代～中世後半期の人々の営みは、遺跡の調査で見つかった自然流路などに見られる自然地形の起伏に強い影響を受ける営みが推定され、その影響を考える一つとし

て、遺跡から発見された内湾から汽水域に生息する貝殻の存在が指摘できる。つまり本遺跡が貝類利用にみられる汽水域に近くにあり、遺跡の遺構面がマイナス 1.8m 付近であることから（註 1）、比較的地下水位が高いために、自然地形にみられる起伏から強い影響をうける環境におかれていたものと考えておきたい。

（註）

註 1 加藤 秋 1996「第七章 現代」『佐屋町史』佐屋町史編纂委員会によると、現在の日置八幡宮の南側に位置する水準点について、昭和 47 年 11 月の標高は -0.930m となっており、その後平成 5 年 11 月までに同地点の水準点は 0.3926m 地盤沈下が進んで標高 -1.3226m となり、現在の都市計画図上に記載された標高は -1.30m と表示されている。また、『佐屋町史』第七章 現代に示される図 56 地盤高図（昭和 35 年 3 月結果）によると、愛西市日置町の日置八幡宮付近の標高は標高 0m より高く、標高 0.5m よりは低い範囲にあたり、標高 0.2m ～ 0.3m 前後であった可能性が高い。本センターが発掘調査を実施した平成 21 年 12 月の記録では、調査区の地表面上面の標高は -1.0m ～ -1.1m 前後にある。よって、昭和 35 年 3 月時点の標高より -1.3m 前後、地盤沈下している可能性が高く、尾張地域の工場用・建築物用井戸の掘削が盛んとなる大正期より古い時代に比べると、標高が -1.5m 以上は低下しているものと考えられる。

付論 日置の古地理環境

石田泰弘・鬼頭 剛・蔭山誠一

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡のある愛知県愛西市日置町は、近世以前の尾張国の南西縁辺部にあたり、かつては海水域がひろがっていた地域と考えられている。その為、この地域における考古学的資料の蓄積は進んでいなかったが、『佐屋町史』において服部元之氏が地表面の考古遺物の表面採集などによる地道な成果により、人間の営みが古墳時代初頭になって始まることを明らかにされた(註 1)。服部氏は佐屋地域における遺跡分布の時期的変遷を通じて、遺跡の展開を 3 段階に分けて論じており、日置本郷 B 遺跡のある現在の愛西市日置地域を第 1 地域として弥生時代後期にさかのぼって開発された地域であることを指摘した。その後湯浅健二氏・赤塚次郎氏・江崎武氏らによるあま市に所在する蜂須賀遺跡の出土遺物の分析を通じた「海部の古道」の指摘があり(註 2)、赤塚次郎氏・石黒立人氏・宮腰健司氏・城ヶ谷和弘氏・池本正明氏による津島市寺野遺跡などの出土遺物の分析を通じた遺跡の評価と津島地域の考古学的画期を 4 段階に分けて論じられている(註 3)。このような遺跡の時期的消長の存在と遺跡の時期的変遷がみられることは、愛知県の海部津島地域において多様な歴史的展開が存在したことを示唆しており、興味深い研究成果である。本論では、このような遺跡における歴史展開がおこる背景について、明治 17 年作成の地籍図を利用した解析と現在の表層地形に刻まれた起伏の分析、そして考古学的資料による遺跡の分析と当地域に残る文献資料の分析を総合して明らかにしていきたい。

なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴い変更された地名ではなく、西暦 2000 年(平成 12 年)時点の市町村名を使用し、明治 17 年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。

2. 旧日置村周辺の地籍図の解析

(1) 方法

ここでは明治 17 年作成の地籍図について現在の愛西市日置町を中心とする地区で、愛知県公文書館所蔵の向島村、津島村(甲・乙・丙がある)、見越村、根高村、古川村、中地村、柚木村、内佐屋村、佐屋村、須依村、日置村、稲葉村、北一色村、甘村井村、落合村、唐臼村、中一色村、犬井村の地籍図を図化し、解析を行った(図 53)。地籍図の解析方法は、地籍図に残る地目により寺院・神社、宅地、畑地・林・藪、水田、草生などに分類して図化した。そして宅地や寺院や社寺、畑地が相対的に標高の高いところに、水田などが低いところで営まれるという我々の経験的な認識に基づいて、地籍図の地目が神社・寺院および宅地・畑地・林・藪の部分で微高地群とし、水田と草生などの部分を低地部として分け、その特徴と微高地群どうしの前後関係について述べる。

(2) 地籍図に見られる微高地群と低地部の抽出

微高地群について図 53 の北西側から述べていく。

向島村の佐屋川東岸の堤防に伴う佐屋川東堤微高地群、向島村の北部中央から南西にのびる向島西微高地群、向島村東縁部を南北にのびる向島東微高地群、津島村の天王川の東岸の部分で字愛宕の北西端部にいたる藤波微高地群、中地村の西側で天王川から南南東にやや弧状に広がる中地西微高地群、大慶寺池から中地村東側を南東にのびる中地東微高地群、津島村字愛宕を西北西から東南東にのびる愛宕微高地群、新堀川の東岸を根高村から見越村にのびる根高見越微高地群、津島村字高畑と字寺前付近から南に津島村字柳原東部にいたる寺前柳原微高地群、津島村字埋田から南に津島村字愛宕の東部にいたる埋田愛宕微高地群、根高村の南側から津島村字立込の東側を通り津島村

日置本郷 B 遺跡

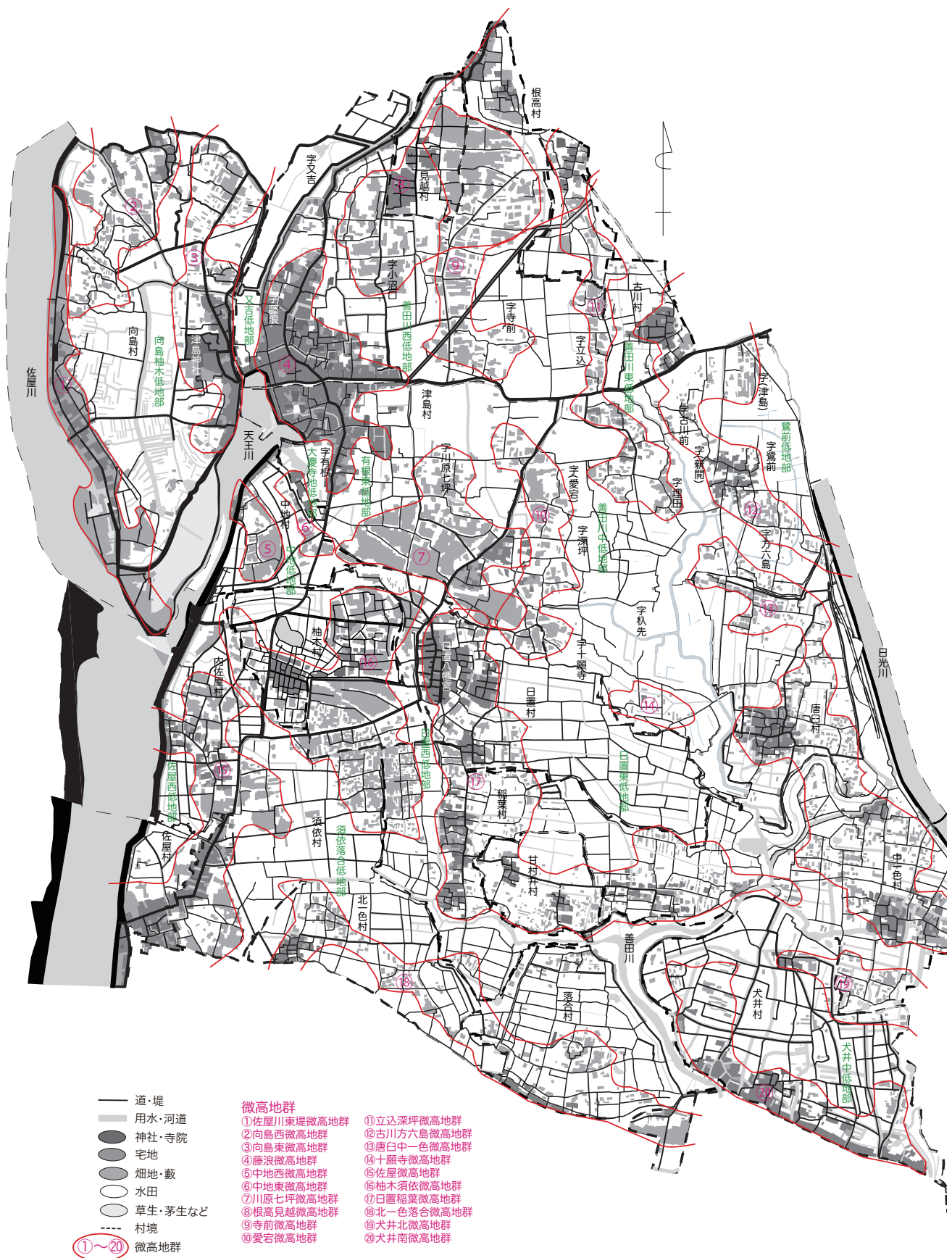


図 53 愛西市日置町周辺の地籍図 (約 1/30,000)

字深坪へ南北にのびる立込深坪微高地群、古川村から南東の津島村字新開にいたる古川新開微高地群、津島村字南新開から南東に広がり唐臼村の中央部を通り南東にある中一色村にのびる唐臼中一色微高地群、津島村字元寺にある西北西から東南東に畑地が散在する元寺微高地群、内佐屋村から須依村の西端部を通り佐屋村に弧状に展開する佐屋微高地群、柚木村南東部から須依村北東部と日置村西部を経て稲葉村北西端部にいたる柚木須依微高地群、日置村中央部から稲葉村中央部と甘村井村を経て稲葉村南東部にいたる日置稲葉微高地群、北一色村西部から落合村南東部にいたる北一色落合微高地群、犬井村北東部から中一色村南端部にひろがる犬井北微高地群、犬井村の南縁部を善田川の北岸に沿ってひろがる犬井南微高地群がある。

同様に低地部を述べていくと、向島西微高地群・佐屋川東堤微高地群と向島東微高地群に挟まれた向島柚木低地部、向島東低地部と根高見越微高地群・藤浪微高地群に挟まれた南側は天王川につながる又吉低地部、中地西微高地群と中地東微高地群に挟まれて南側を柚木須依微高地群まで含む中地低地部、中地東微高地群と藤波微高地群の南端部に挟まれた車河戸大慶寺池低地部、藤波微高地群の南端部と愛宕微高地群に挟まれた愛宕西低地部、北側を藤浪微高地群と根高見越微高地群・寺前柳原微高地群に南側を愛宕微高地群と埋田愛宕微高地群に挟まれた善光寺川西低地部、北側を寺前柳原微高地群・埋田愛宕微高地群と立込深坪微高地群に南側を元寺微高地群・唐臼中一色微高地群に挟まれた善光寺川中低地部、立込深坪微高地群・唐臼中一色微高地群と古川新開微高地群に挟まれた善田川東低地部、古川新開微高地群の東にある新開低地部、佐屋微高地群の西にある佐屋西低地部、北西側を佐屋微高地群と柚木須依微高地群の南側部に南西側を北一色・落合微高地群と日置稲葉微高地群の南側に挟まれて善田川にいたる須依落合低地部、柚木須依微高地群と愛宕微高地群・日置稲葉微高地群の北側に挟まれた日置西低地部、北西側を日置稲葉微高地群と埋田愛宕微高地群に南西側を日置稲葉微高地群・犬井北微高地

群と元寺微高地群・唐臼中一色微高地群の南側に挟まれた日置東低地部、犬井北微高地群と犬井南微高地群に挟まれた犬井中低地部がある。

(2) 微高地群の特徴

これらの微高地群は津島村の北端部から向島村の北端部では北東から南西にのびる傾向がみられるが、全体では北西から南東にむかって帯状にのびる傾向が顕著である。この中で近接・隣接している微高地群においては本来は一つであった可能性があり、例を挙げれば向島東微高地群の北側と向島西微高地群が北東から南西にのびる可能性があることや寺前柳原微高地群と埋田愛宕微高地群、立込深坪微高地群と唐臼中一色微高地群はその位置関係からは南北につながっていたそれぞれ一つの微高地群であった可能性が高い。これらが地籍図において分断されているのは、その後新しい河川が流れたり、用水が掘削されて水田が広がった為に低地部が変わったなどの理由が考えられる。

反対に大きな微高地群を形成しているものは、複数の微高地群が重複して大きな微高地群にみえるものもある。例えば根高見越微高地群は立込深坪微高地群が根高村の南側から、寺前柳原微高地群が津島村字寺前西側付近から分かれて南下する点や、同様に津島村字愛宕の南西部で愛宕微高地群と埋田愛宕微高地群と日置稲葉微高地群が重なっており、本来は別々に形成されたものが一つの微高地群になったと考えられるものもある。

また一定の基準に基づくと別々にみえる微高地群ではあるが、根高見越微高地群と藤浪微高地群、向島東微高地群の南側、愛宕微高地群、柚木須依微高地群、日置稲葉微高地群はより大きな視点をもつと一つの大きな微高地群とも捉えることができる。

(3) 地形の新旧関係

以上の分析から、地形の新旧関係を分析する。明治17年作成の地籍図に描かれている主な河川は西から佐屋川と天王川、善田川があり、地籍図の上流で佐屋川は領内川と、天王川は領内川と日光川、三宅川と善田川は三宅川から分岐する河川であり、地籍図に描かれた佐屋川と天王川は、愛

日置本郷 B 遺跡

知県所蔵の元禄期に描かれたと考えられている『尾張国絵図』にみるように、江戸時代前期にさかのぼる可能性が高く、日光川も後述する図 56 にみるように 18 世紀中頃の掘削である。よって佐屋川に直接関係する佐屋川東堤微高地群と天王川に関係する向島東微高地群と根高見越微高地群・藤浪微高地群に挟まれた又吉低地部、日光川に関連する古川新開微高地群と新開低地部を除くその他の地形は江戸時代前期より古い地形といえる。

次に江戸時代前期に流れていた天王川とその旧河道である又吉低地部に直接つながる低地部は藤浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれに続く愛宕西低地部、藤浪微高地群の南より車河戸大慶寺池低地部、中地低地部、須依落合低地部、中地低地部より続く日置西低地部がある。須依落合低地部は北西側で佐屋微高地群と柚木須依微高地群が接している部分があるので、中地低地部より古い可能性があるが、これらは江戸時代前期以前の天王川の旧河道と関連するもので、中世にさかのぼる可能性がある。同様に佐屋川に直接つながる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部も江戸時代前期以前に佐屋川と関連する旧河道である可能性が高い。また向島柚木低地部は近世以後の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北西側で佐屋川に続いており、南東側で天王川の堤防を挟んで続いている。よって、これらの地形に関連する微高地群に閉ざされているその他の低地部とその低地部を挟む微高地群は、中世以前に形成された地形と考えられ、地籍図の東側では、善田川と関連する流路がこれらの微高地群を切って流れている箇所が多く見られる。(蔭山)

3. 愛西市日置周辺の表層地形解析

(1) 分析方法

愛西市日置地域がどのような場所に立地するか、また、日置周辺の河川の変遷を調べるため、津島市から愛西市にかけて現在の表層地形解析のために等高線図を作成した。等高線図の作成には「愛西市都市計画基本図(1/2,500)」の平成 17 年

(2005 年) 修正版にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した(図 54)。

(2) 表層地形の解析結果

東西 4.3 km、南北 3.9 km の範囲において、等高線間隔 0.2m (一部で 1.0 m) で標高 -2.6 m から標高 6.0 m までの等高線が描ける。解析範囲の現在の状況は西に海部幹線水路が南流し、東には善太川が北から南へ向かいほぼ一直線に流れる。海部幹線水路に並行してその東側に国道 155 線が通っている。図の中央には名古屋鉄道尾西線が通り、北側で尾西線と津島線とに分岐する。

解析範囲全体では北西側において標高 0m 以上で相対的に標高が高く、南東側に向かうにしたがって次第に低くなる。解析範囲は典型的なゼロメートル地帯であるため、標高の低いところでは標高値がマイナスとなることに注意が必要である。標高がもっとも高いのは津島市下新田町で標高 6.0 m を超すところが見られ、本地点も含めて北の津島市河田町から下新田町、大縄町、宮川町まで、現在の津島高等学校の所在する範囲には標高 0～6 m までの延長約 2.8 km におよぶ尾根状に高い部分が認められる。いっぽう、標高のもっとも低いのは愛西市庄屋敷から大正にかけて標高 -2.6 m が認められる。本地点も含めて、北の津島市杵前町から元寺町、愛西市日置町、愛西市金棒町、落合町にかけて標高 -2.0 m よりも低い地域が広がる。

本論ではかつての河川流路跡の解析を目的とするため、主に等高線図にあらわれる谷状の地形に注目する。範囲の西側から順に述べる。海部幹線水路の東側には水路に並行して津島市大縄町から愛西市四会町を通り開田、津島市東野方町、愛西市森川町に至る南北方向の谷地形がみられる。北の津島市河田町から江西町、江東町、老松町を通り宮川町までに標高 -0.8～0 m の東西の最大幅約 0.6 m、南北約 2.4 km の谷状地形がある。この谷地形には天王側公園の丸池を含む津島市宮川町から老松町までの谷地形が南側で合流している。解析範囲北の津島市又吉町から城山町までには標高 -1.0～0 m までの池状の凹地がみられる。解析範囲の東、津島市埋田町から古川町にか

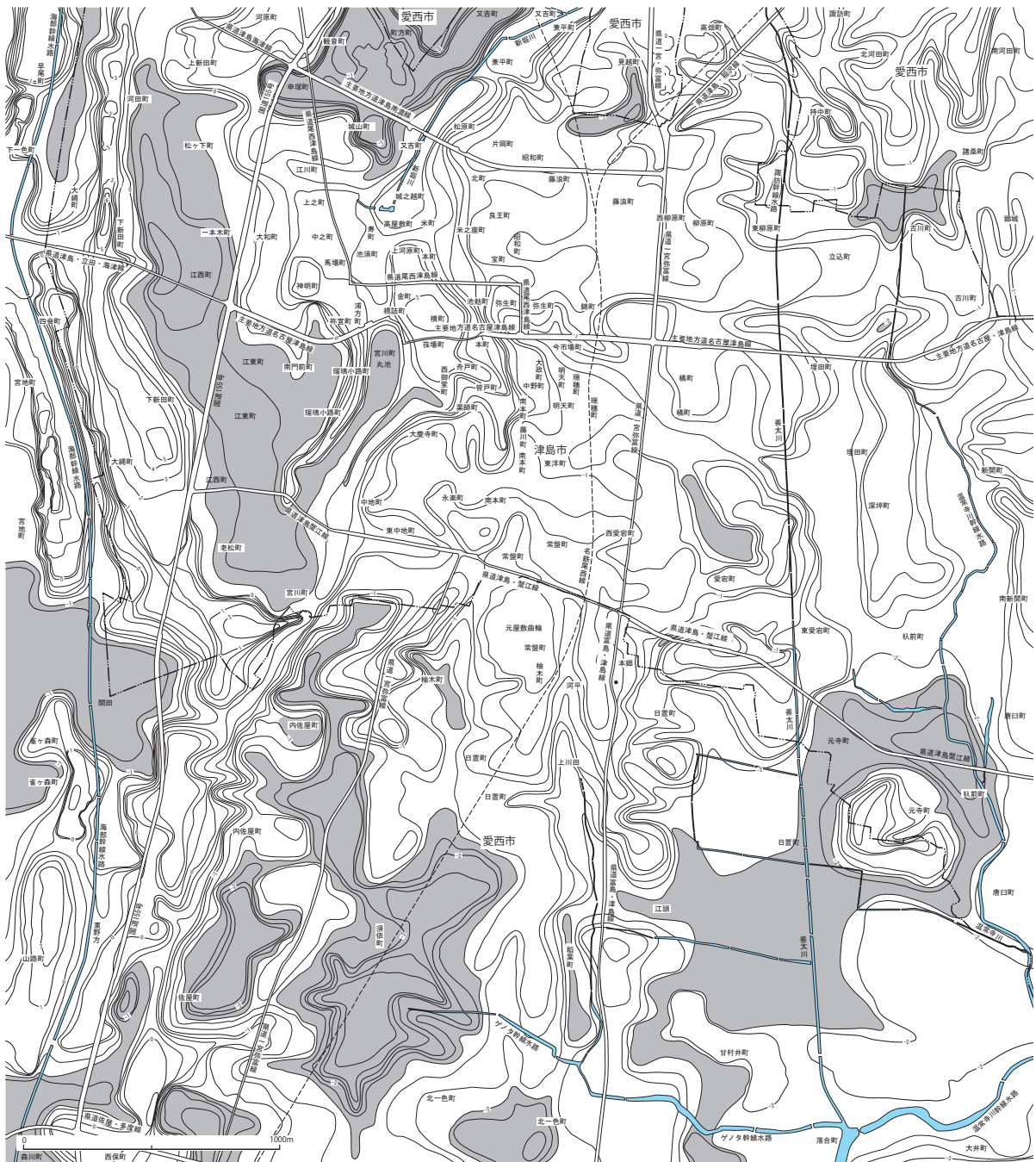


図 54 愛西市日置町周辺の等高線図

けては東西方向に約 8.8 km の距離をもって低地がみられ、そこを谷頭として南方向へ津島市深坪町、杵前町に至る標高 -2.6 ~ -1.2 m で距離約 2.0 km の谷地形が認められる。この谷地形には、津島市弥生町から今市場町、橘町を通り深坪町に至る標高 -1.8 ~ -0.4 m の北西 - 南東方向の谷地形と、東端の津島市郷城から新開町を通り、杵前町に至る標高 -2.4 ~ -1.0 m の南北方向の谷地形

が深坪町・杵前町で合流する。また、それまでの谷地形が南北方向を向いているのに対して、津島市中地町から南本町、愛宕町までの標高 -2.6 ~ -0.8 m で西から東へ開口した谷地形がある。この谷の南には津島市常盤町から愛西市柚木町、須依町に標高 -2.6 ~ -0.8 m の南北方向の谷がみられる。この谷には愛西市内佐屋町から柚木町にかけて標高 -1.4 ~ -1.2 m の西から東へ向けて開

日置本郷 B 遺跡

口している谷地形が須依町で合流する。津島市常盤町から須依町にかけてみられた谷地形の、尾根状地形を挟んでさらに東側には愛西市柚木町元屋敷曲輪を谷頭として、愛西市日置町河平、日置町上川田、稲葉町、北一色町にいたる標高 -2.4 ~ -0.8 m の南北方向にのびる距離約 2.3 km の谷地形が認められる。この谷地形は、津島市常盤町から愛西市日置町本郷、稲葉町江頭まで、南北の距離約 1.3 km で南側で閉じた舌状の尾根地形の西縁を通り、この尾根地形の東端に調査地がある。

(3) 地形解析結果からわかること

表層地形解析の結果から推定できる地形の特徴を挙げる。解析範囲の地形は標高 0m 付近の等高線を境として、それよりも西ないし北西側に認められる地形と、東側でみられる地形とに大きく分けられそうである。西ないし北西側では等高線間隔が非常に密であり、標高の高いところと低いところとの差が大きい。地形にこのように明瞭な差異を生じさせるためには、流路の位置が固定されてあまり移動をせず、もともとの地形を破壊することなく堆積物を上方へ累積させる必要がある。だが、本論の解析範囲は沖積低地の三角州域にあたり、上流から運搬されてきた堆積物を溜める場所にあっている。濃尾平野の三角州域は洪水多発地帯としても知られており、河川流路が長年に渡って自然の状態固定されたままでは難しく、人工的に河川流路を固定された可能性がある。例えば、海部幹線水路に並行して東側に認められる谷地形や、天王川公園の丸池を含む津島市宮川町から老松町までの谷地形などは、流路の両脇を標高値の高い尾根状の地形で挟まれており、人工的に流路を固定されているものと思われる。

いっぽうで、解析範囲の東側では標高 0m よりも低い等高線からなり、等高線間隔は広く、相対的な標高差も小さい。推定される谷地形の方向も南北方向を向くもの、北西 - 南東方向を向くもの、西から東へ開口しているものなど、方向に一定の傾向がみられない。これは、かつて東側を流下していた河川流路が頻りに移動をしたためと考えられ、等高線間隔が広いことや相対的な標高差が西

側に比べて小さいことも、流路が固定されず、上流から運ばれてきた堆積物が周辺に分散された結果であると考えられる。また、西側でみられる谷地形がほぼ南北方向を向き、さらに北側へ連続するようにみられることと比べて、東側でみられる谷地形は谷頭が解析範囲の途中から現われて、それよりも北には連続しないのがみられる。例えば、津島市埋田町から古川町にかけてを谷頭として津島市深坪町や杵前町に至る谷地形がそれにあたる。現在の海部幹線水路や善太川が解析範囲のさらに北から流下してきていることを考慮すると、途中から谷頭がはじまっている谷地形は、現在の河川流路とは異なるかつての流路跡であると考えられる。愛西市日置本郷地域にも津島市元屋敷曲輪を谷頭として愛西市河平、稲葉町、北一色町に至る谷地形が認められることから、途中から谷頭が現われて北側には連続しない特徴をもち、調査地は堆積システムの古い地形の上に立地する。解析範囲の西ないし北西側と東側とで、等高線の特徴から推定される地形的な特徴の差異は、地形を生じさせた堆積システムの新旧の差を現わしているのかも知れない。この推論の証明には堆積層序や堆積年代の確認、地形表層からの考古遺物の採取などが必要であり、今後の課題となる。

以上をまとめると、つぎのことがわかる。

1. 標高 -2.6 ~ 6.0 m までの解析範囲全体では西ないし北西側で地形が高く、南東へ向かい次第に低くなっている。
2. 解析範囲に現われる等高線の特徴や谷地形の方向から、標高 0m を境として西ないし北西側の地形と東側の地形とに大きく 2 分される。
3. 西ないし北西側の地形は、南北方向の谷地形が標高差の大きい尾根状の地形に挟まれており人工的な影響が大きいように思われる。対して東側の谷地形は標高差も小さく方向に傾向がみられないことから、自然の状態がより残っているようである。
4. 上記の地形的な特徴は堆積システムの新旧の差を現わしている可能性があり、調査地点は古い堆積地形の上に立地している。 (鬼頭)

4. 分類・抽出した地形の評価

それでは、地籍図において抽出した地形分類と表層地形の解析から認められた地形はいかなる関係をもつのであろうか。ここでは、その対応関係と抽出された地形と遺跡の位置関係を分析し、その特徴を述べたい。

(1) 微高地群の区分と表層地形との対応関係 (図 55)

地籍図をもとに集落とまわりの畑地、さらにそのまわりに広がる水田の分布パターンをもとに 20 の微高地群と、相対的に低い 14 の低地部が区分された。表層地形解析では西ないし北西側で標高が高く、標高差の大きい尾根状の地形が特徴的であることと、南東側に向かい次第に低くなり、標高差が小さい東側の地形とに 2 分された。ところで、微高地群の設定は地籍図の土地利用の状況をもとに描かれるが、微高地群と低地部とを認識し区分する作業には主観が入る可能性がある。ここでは、設定された微高地群および低地部を表層地形解析の結果と比較して、その妥当性を検討する。なお、微高地群を設定した地籍図範囲と表層地形解析を行なった範囲とは完全には一致しておらず、地籍図の範囲の方が若干広い。

地籍図をもとに微高地群は 20 に区分され、表層地形解析の結果においてもそれぞれの微高地群に対応した、まわりよりも相対的に高いところが見られる。さらに詳しく検討してみると、例えば遺跡の立地する日置稲葉微高地群 (微高地群 17) は北の日置八幡宮から稲葉村を通り、甘村井村までが一連の微高地群と設定されているが、表層地形解析では愛西市江頭において東西方向の谷地形が微高地との間を貫いており、江頭よりも南側の甘村井に続く微高地とはまた別のものと読み取ることができる。だが、おおよその微高地群のパターンは、表層地形解析の相対的に標高の高い地形と対応する。なお、犬井北微高地群 (微高地群 19) は表層地形解析の範囲外にある。

次に地籍図の低地部と現在の谷状地形との対応をみてみる。向島柚木低地部は津島市河田町から

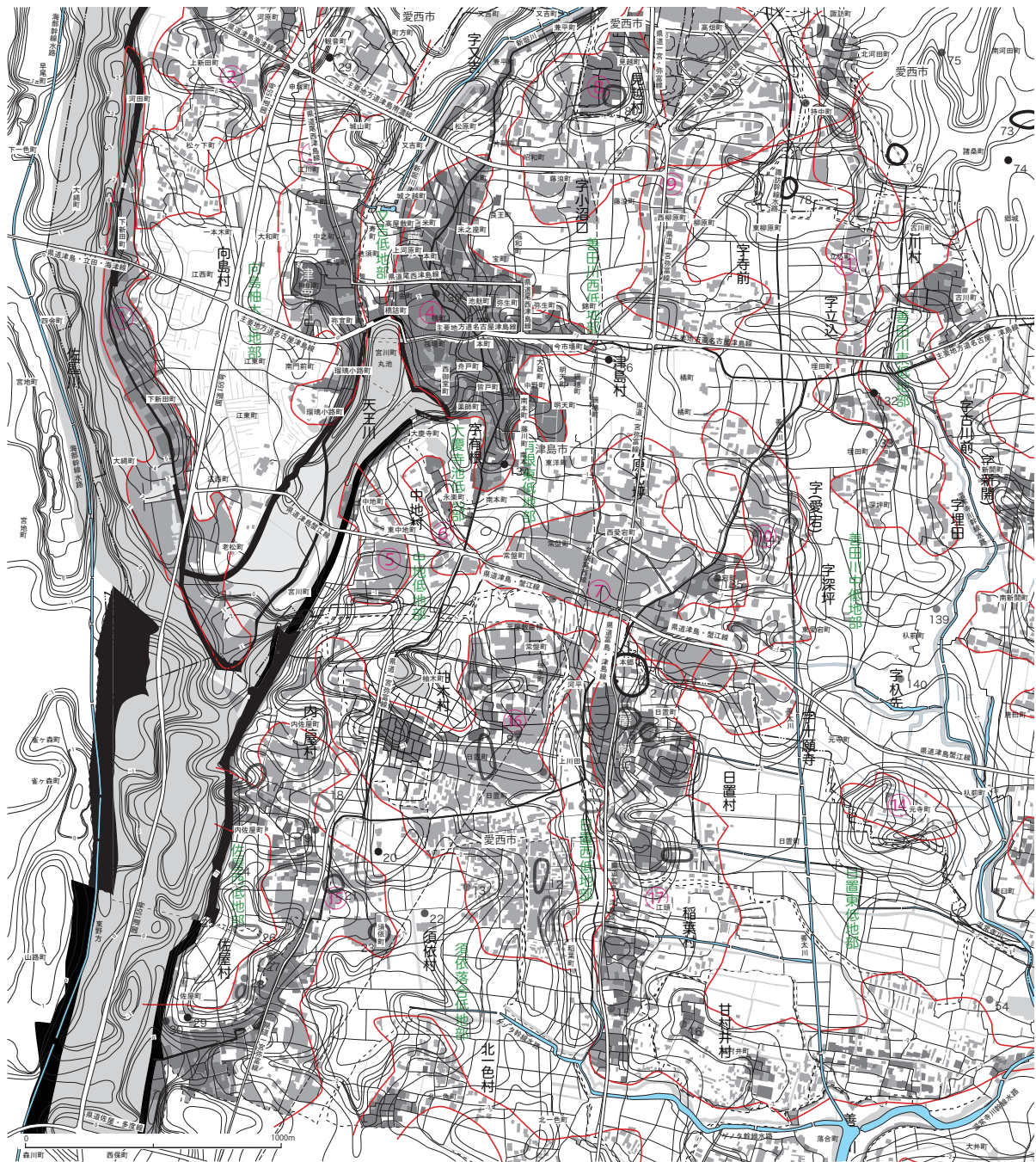
江西町、老松町、宮川町に見られる谷状地形に、又吉低地部は現在の天王川公園の丸池と津島市又吉町から城山町の谷地形に対応をしている。善田川西低地部および善田川中低地部は津島市弥生町から今市場町、深坪町に至る谷地形に対応し、善田川東低地部は津島市郷城から杵前町に至る谷地形に対応をしている。設定された低地部と表層地形解析に現われる谷地形とは、微高地群と同じようにおおよそ対応するようである。このように、地籍図に設定された微高地群と低地部の分布パターンは、表層地形解析から読み取れる現在の地形の起伏と比較的良好に対応しており、地籍図をもとにした微高地群と低地部の区分には妥当性がみられる。

さて、大局的にみれば良い対応関係を見たが、ひとつひとつをさらに詳しく見ると、地籍図の微高地群・低地部パターンには現われない表層地形の起伏が存在することも指摘しておかねばならない。例えば、遺跡の立地する愛西市日置町周辺には日置八幡宮から稲葉村、甘村井村までの日置稲葉微高地群 (微高地群 17) と、その西側には日置西低地部、東には日置東低地部が設定されている。表層地形解析ではこの日置西低地部のさらに西側には、南北方向にのびる尾根地形を挟んで津島市常盤町から愛西市柚木町、愛西市須依町にかけて谷地形が認められ、地籍図では柚木須依微高地群 (微高地群 16) と一括されている範囲内にも微小な谷地形が認められるのである。また、日置稲葉微高地群 (微高地群 17) の東縁境界線には、地籍図には現われないさらに微小な複数の谷地形が東方向に開口して認められ、地形変化には時代の異なる堆積システムが関わっているようである。このような水平距離にして 1km に満たない規模の地形の成り立ちを考えるとときにこそ、考古遺跡の発掘調査で得られた情報が必要になってくるのである。 (鬼頭)

(2) 推定される地形と遺跡との位置関係

それでは、地籍図において認められた微高地群の形成時期はいつ頃であろうか。現在の表層地形にみられる、等高線の特徴や谷地形の方向から、標高 0 m を境として人為的影響の大きいと思わ

日置本郷 B 遺跡



- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ○ ● : 弥生時代・古墳時代から営まれる遺跡 ○ ● : 奈良時代・平安時代から営まれる遺跡 ○ ● : 鎌倉時代・室町時代から営まれる遺跡 | <ul style="list-style-type: none"> — 道・堤 — 用水・河道 ● 神社・寺院 ● 宅地 ● 畑地・藪 ○ 水田 ○ 草生・茅生など - - - 村境 ①~②〇 微高地群 | <p>微高地群</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 佐屋川東堤微高地群 ② 向島西微高地群 ③ 向島東微高地群 ④ 藤浪微高地群 ⑤ 中地西微高地群 ⑥ 中地東微高地群 ⑦ 川原七坪微高地群 ⑧ 根高見越微高地群 ⑨ 寺前微高地群 ⑩ 愛宕微高地群 ⑪ 立込深坪微高地群 ⑫ 古川方六島微高地群 ⑬ 唐臼中一色微高地群 ⑭ 十願寺微高地群 ⑮ 佐屋微高地群 ⑯ 柚木須依微高地群 ⑰ 日置稻葉微高地群 ⑱ 北一色落合微高地群 ⑲ 犬井北微高地群 ⑳ 犬井南微高地群 |
|---|---|--|

図 55 地籍図と等高線図の対応関係（遺跡番号は本書第 1 章表 1 に対応する）

れる西ないし北西側の地形と自然の状態がより残っていると思われる東側の地形とに二分され、その分布範囲は、先に見た地籍図から分析した微高地群と低地部からなる地形の新旧関係と大まかに対応している。

次に表層地形図に遺跡の分布と微高地群の分布を重ねると、古墳時代以前の遺跡は西から③向島東微高地群の上に観音町 A 遺跡（遺跡番号 129、古墳時代）、④藤浪微高地群の上に南本町遺跡（遺跡番号 134、弥生時代～江戸時代）、⑩立込深坪微高地群の上に埋田遺跡（遺跡番号 132、弥生時代～鎌倉時代）、⑮佐屋微高地群の東にある須依落合低地部の中に砂山 A 遺跡（遺跡番号 20、弥生時代～中世）、⑪立込深坪微高地群の南西にある善太川中低地部の中に八町遺跡（遺跡番号 78、古墳～鎌倉時代）、藤浪微高地群の東にある善太川西低地部の中に橘町遺跡（遺跡番号 136、古墳時代中期）、⑰日置稲葉微高地群の上に日置八幡宮遺跡（遺跡番号 2、弥生時代・古代～近世）がみられる。これらをみると、地籍図において検討した地形の新旧関係には関係なく、抽出した微高地群の形成時期は全て弥生時代から古墳時代以前にさかのぼる可能性が高いことが確認できる。したがって先に述べた地形の新旧関係は、新しい時代の瀬替えや築堤などといった人為活動の影響の強さの違いを反映しているようである。この点については、表層地形において指摘した標高 0m を境にみられた地形の差異、例えば標高差の大きい尾根状の地形に挟まれた南北方向の谷地形で人工的な影響が大ききように思われる西ないし北西側の地形に比べて谷地形の標高差が小さく、谷の長軸方向に傾向がみられないことから自然の状態がより残っていそうである東側の地形、という理解にもかなうものと思われる。そして地籍図の低地部にある遺跡は、詳細にみると明治 17 年の土地利用において微高地群には含まれないものの、表層地形の解析においてみられる谷地形の中央に位置するのではなく、微高地の尾根の縁辺と考えられる位置に立地しており、古い時代の遺跡がみられる地点が明治 17 年の地籍図より、地形の起伏に忠実に対応して分布する傾向がみられるよう

である。

（蔭山）

5. 文献資料からみた旧河道と日置

（1）文献からみた古代の海部地域

日置という地域がいつ頃からあったかについては詳らかではない。

海部郡自体が往昔どうであったかも詳らかではない。

ただ、飛鳥京跡苑池遺構から出土した木簡に「戊寅年十二月尾張海評津嶋五十戸 韓人部田根春赤米斗加支各田部金」という文言が確認され、天武天皇 7 年（678）時「海評」すなわち海部郡が存在していたことは明確である。

正倉院文書にも「尾張国海部郡津積郷」、「尾張国海部郡志摩郷」といった記述が確認でき、いくつかの郷が存在していたことがわかる。10 世紀に成立したといわれる「和名抄」によれば、海部郡内に

新屋・中島・津積・志摩・伊福・嶋田・海部・日置・三方・物忌・三宅・八田

12 の郷があったことがわかる。ここに日置郷の名が確認でき、恐らくこの記事が日置の初見であろう。

927 年の「延喜式神名帳」をみると、海部郡内に八社名を確認できる。

漆部神社、諸楸神社、国玉神社、藤嶋神社、宇太志神社、由乃伎神社、伊久波神社、憶感神社

由乃伎神社—諸楸神社—憶感神社—藤嶋神社といったラインは、佐屋路に沿って存在しており、水野時二のいうように、この佐屋路が条里との関わりを有する（註 4）とすればこの神社の分布は興味深い。また諸楸神社の所在する諸桑の満成寺裏から 1838 年いわゆる「諸桑の古船」が出土している。この古船は 20m 余という大きな船で準構造船ともいわれている。満成寺もこの地の白砂青松に魅せられ寺を建立したともいわれている。諸桑の地が古代の海岸線沿いの集落であった可能性が高いのではなかろうか。

「延喜式兵部省」をみると、古代東海道で伊勢の榎撫から馬津、新溝といった駅が存在したこと

日置本郷 B 遺跡

がわかる。馬津駅の比定地は近世以来様々な説があるが、有力とされる説に、現在の愛西市町方町の松川説と津島という説がある。「尾張国郡司百姓等解」に「就中馬津渡、海道第一之難處、官使上下之留連處也」という記事がみえ、さらにその近辺には、「海路」、「白浪忽起、任身於鯨鯢之脣」といった記述も散見しうることから、馬津辺りは海に近い地であったと思われる。

これらのことを考えると、古代の海岸線を比定するについては、(馬津)－柚木－日置－諸桑－神守－秋竹という文献上確認できるラインを視野に入れて検討すべきであろう。

(2) 海東郡・海西郡の郡界と河川の変遷

『佐織町史通史編』によれば、11世紀頃に海部郡が海東・海西郡に分かれたのではないかと推測されている。

1283(弘安6)年に制作された滋賀県松尾寺蔵鱈口に「海西郡三腰」という銘が確認できる。

三腰は当時海西郡であったことがうかがえる。(応永5)年の寶生院所蔵の「病者加持秘事」の奥書には、「尾州海西郡門真庄天王宮」とある。津島も海西郡となる。(応永6)年の寶生院所蔵「寶朱水」の奥書にも「尾州海西郡門真庄三腰極楽寺」という記述が確認され、この時点もなお三腰は海西郡であった。

1403(応永10)年銘のある津島神社鐘には「海西郡津嶋」とあることからこの時期まだ津島は海西郡であった。

1418(応永25)年の「尾張国守護斯波義淳遵行状」をみると、「海西郡内西野高村」とある。同時期に発給された「足利義持書状」をみると「尾張国日置庄内西野高村」とあり、西野高村は日置庄内に位置し、海西郡であったことがわかる。西野高村がどこにあったかは未詳であるが、日置庄内ということで日置近辺とすれば、日置あたりは海西郡であったと想定しうる。

『張州雑志』所収の1324(正中2)年「某下文写」をみると、「海東 一百丁内 衣縫」とあり、百町、犬井が海東郡であったことがわかるし、1447(文安4)年の「万徳寺積論」の奥書を見ると、「海東郡佐折」とあり、佐折も海東郡であったことが

わかる。

『尾張志』所収の1450(宝徳2)年「万徳寺積論」の奥書には、「海東郡富吉庄大野」とあり、大野も海東郡であった。

これらの記述等から、当時の郡界は見越・日置の東側で、大野・大井の西側にあったことが指摘しえよう。旧善太川が、諏訪(現在の愛西市諏訪町)あたりから南下して流れていたといわれており、恐らく旧善太川の河道が郡界であったと考えるのが妥当ではないか。

ただ、1499(明応8)年の熊野那智大社「旦那売券」をみると、「かひたふの郡みこしのこく蔵坊」とあり、見越が海東郡に編入されていることがわかる。

この間に大きな河道の変動がみられたのではなかろうか。1498(明応7)年8月には明応の地震が起こっており大きな被害があったといわれていることからすれば、この地震の影響も想起しえよう。

『海道記』の1223(貞応2)年4月7日条をみると、

市腋を立ちて、津島の渡という所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたはりて、つなぐぬ駒もたちはなれず、菱の浮葉に浪はかれども、難面かはづはさわぐけもなし、とりこすさをの雫袖にかゝりたれば、さしてものを思ふとなしに水馴れ浪に袖は濡しつ渡りはつれば尾張国にうつりぬ、片岡には、朝陽の影うちをさして、焼野の草に雉なきあがり、小篠ヶ原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ、又園中に桑の下宅あり、宅には蓬頭なる女、簀にむかひて蠶養をいとなみ、園には僚倒たる翁、鋤をもちて農業をつとむ(以下略)

とある。市腋から津島の渡を経て尾張国へ入る様子が描かれている。この『海道記』の記述にしたがえば、市腋は伊勢に属し、津島と市腋の間に国境そして大河が存在していたことになる。

この『海道記』の段階においては、津島と思われる地は牧歌的な風景が描かれており、当時はまだ町場化していなかったことがわかる。

図 56 天明五己年天王川御堀割御普請已來之図

日置本郷 B 遺跡

『宗長手記』の1526（大永6）年条をみると、

此所のおのおの堤を家路とす、橋あり三町あまり、熱（勢）田の長橋よりは猶遠かるべし、およひ州俣河落合、近江の海ともいふべし

とあり、堤を中心に、家が立ち並び、町場化していることがうかがえる。大きな橋があり、「およひ」と「州俣」の両河川が津島辺で合流していたという。川名等を精確に把握していたかどうかは詳らかではないが、大河川が津島近辺で合流していたということは当時の地理的景観を考える上で重要であろう。

豊臣秀吉や尾張藩によって、木曾川の流路の変わり、築堤等によって河川の安定化が図られた。

天正の洪水によって木曾川の流路が変わり、その後世に言う尾張側が三尺高いといわれている「御囲堤」が築かれ、尾張藩の治水に有効であったということは、事実であったかどうかは別にして夙に知られている。

しかし、今日でいうところの木曾三川下流域においては、低地ゆえ已然水害を被ることが多く、御手伝普請等による治水工事が実施された。中でも広く知られているのが宝暦期に薩摩藩によって実施された普請工事である。尾張藩においても、天明期に時の藩主宗睦によりいわゆる天明の河川改修が実施された。このとき新川の掘削とともに、日光川が改修され、その時津島川も築留られ、勝幡近辺で日光川・領内川・三宅川が合流する今日のような流路はこの改修によってなされた（図56）。

そして明治に入り、ヨハネス・デ・レーケによる木曾三川改修に伴い、佐屋川廃川等により、今日の河川の様相が安定化した。

(3) 日置

日置の初見は、先述のように「和名抄」掲載の海部郡内の郷名に「日置」の名が確認できることであろう。

「臺記」1150（久安6）年7月8日条に「日置庄」の名がみえる。

『佐屋町史通史』によれば、この庄園の初期の歴史は詳らかではないが、藤原氏の所領となり、

保元の乱によって没収された。その後皇太后宮領となり、1187（文治3）年10月左女牛若宮に寄進された。

恐らく今日でいうところの日置八幡宮は、左女牛若宮の関係で創建されたものと思われる。「尾張志」によれば源頼朝が勧請したと伝える。

当宮には、1252（建長4）年銘をもつ木造獅子頭と1493（明応2）年銘をもつ懸仏が伝来する。

頼朝が勧請したかどうかは別としても、ほぼ同時期に当宮が成立していたものと推測しえるのではなかろうか。

1425（応永32）年の「満濟准后日記」の記述をみると、この年大洪水があつてかなりの水損があつたという。

1318（文保2）年12月23日付「関東御教書案」をみると、日置庄が富吉庄と境争論を行っていることから庄域は詳らかではないが、東は富吉庄と接してしたことがわかる。

戦国期に入り、1533（天文2）年2月14日付の鱸次田地売券に「日置」の名がみえ、この地域に土地を保有していたことが確認できる。同年7月24日には勝幡を訪れ滞在した京の山科言継一行らは、日置八幡を訪れ、鱸右近から湯漬を振舞われ、その後津島天王を見物し、勝幡へ戻っている（「言継卿記」）。

同一人物か同じ一党なのかは不明であるが、鱸氏がこの地においてある程度力を有していたことがわかる。

『尾張徇行記』によれば、堀田相模守家の先祖は日置村出身で日置八幡宮を氏神としたとある。堀田相模守家といえば、幕末に老中正睦を輩出した佐倉堀田氏をさす。

日置八幡宮は日置庄期も六条八幡宮の要職を勤めていることからすれば、日置の地は八幡宮を中心に集落を形成していたと考えられよう。（石田）

6. 日置の古地理環境

(1) 日置本郷 B 遺跡で見つかった自然流路（図51・図55）

地籍図を用いた検討により日置本郷 B 遺跡調

査地点は日置稲葉微高地群（微高地群 17）に分類され、表層地形解析との対応も調和的であった。また表層地形解析より、微高地の東縁には東に開口したさらに微小な谷地形が認められることを指摘した。ここでは、微小な谷地形と遺跡の調査結果との対応関係から、調査地点周辺の古地理環境について述べる。

表層地形解析の結果を基に遺跡の周辺のみ注目すると、遺跡の北側には津島市常盤町から愛西市日置町本郷にかけて北西-南東方向に標高-1.2～-0.6m までの東へ開口した谷地形が認められる。対して遺跡の南には、県道一宮弥富線が日置町において屈曲する地点の東に標高-1.4～-0.8m の谷地形がみられる。

いっぽう、遺跡の調査結果において、調査区の北では中世後半期の考古遺物を含む河道跡（002NR）と近世の河道跡（001NR）が北傾斜の層理面をもって堆積していた。南では暗灰黄色のシルト層からなる河道跡（096NR）を覆って古代～奈良時代の考古遺物を含む地層と、中世後半期のものを含む地層とに標高-2.50m をおおよその境として2分された。このように、表層地形解析の結果から北と南にみられるそれぞれの谷地形に対応するように、発掘調査でも北と南に分かれて河道跡が検出された。地形のもつ特徴と実際の発掘調査結果とはよく対応しており、遺跡でみられた河道跡は谷地形の一部を見ているようである。

ところで、考古遺跡の下位層でみられる地層は全体に堆積構造の見られない塊状で均質な砂質シルト層から構成された。ここで注目されるのはこの砂質シルト層の一部が黒褐色（2.5Y3/2）を呈することである。堆積物が黒みを帯びる原因として、植物や動物などの生物体に由来する遺体や炭化物の濃集が考えられ、色調では同じ黒色や黒褐色に分類される堆積物もそれらの濃集の度合いにより黒みの強さはさまざまに変化する。また、水が絶えず流れるような場所では生物遺体や炭化物は溜まりにくく、流水環境と生物遺体や炭化物の濃集とは負の相関にあると言える。

調査区でみられた黒褐色を呈する砂質シルト層

は記載上では黒褐色（2.5Y3/2）に分けられるものの黒みの度合いは小さく、生物遺体や炭化物の含有量は少ない。黒みの色調の濃淡は堆積期間の休止期を現わしており、休止期間が長ければより黒みはつよく、短いときには淡くなる。調査区でも黒褐色の砂質シルト層が認められることから、碎屑物の供給量が一時的に減少した時期があったと思われる。しかし、その色調が薄いことから、休止期は長くは続かず、休止期の後も現在の地表面（標高約-1.0m）まで層厚およそ1.5mほどのシルト層が上方に累積している事実から考えても、当地の近傍には碎屑物をもたらすだけの河川流路が存在したと考えねばならない。（鬼頭）

（2）日置をとりまく河道

最後に日置本郷B遺跡の周辺に存在した可能性のある旧河川について、明治17年の地籍図にみられた地形と現在の表層地形において対応した部分をもとに検討する。

地籍図の分析から抽出した地形において推定した新旧関係をもとに、中世にさかのぼる可能性のある旧河川は、江戸時代前期以前の天王川の旧河道に関連するもので、又吉低地部に直接つながる低地部であり、藤浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれに続く愛宕西低地部、藤浪微高地群の南より車河戸大慶寺池低地部、中地低地部、須依落合低地部、中地低地部より続く日置西低地部がある。同様に佐屋川に直接つながる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部、近世以後の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北西側で佐屋川から続く向島柚木低地部がある。向島柚木低地部は南東側において、天王川の堤防を挟んで向島村から柚木村へ続いている。

これらの地籍図に見られる低地部と現在の表層地形は先に述べたように概ね対応しているが、近代以後の道路建設や工場建設などにより大規模な地形変化が加わっているため、明治17年の地籍図の土地利用と微妙な差異が見られる。また地籍図や遺跡の調査成果においてもみられたように、中世後半期と江戸時代後期の遺構・出土遺物の分布に大きな変化があることが確認できており、近世以後の様々な土地利用が行われた結果をみてい

日置本郷 B 遺跡

るものである。

日置本郷 B 遺跡の調査地点は⑰日置稲葉微高地群の北端に位置しており、遺跡付近は⑦川原七坪微高地群や⑩愛宕微高地群との接点にある。また3つの微高地群の接点であることから、日置西低地部の北東端部と日置東低地部の北西端部、善田川中低地部の南西端部の接点にもなりうる地点である。発掘調査でみつかった09A区の南と北それぞれの自然流路跡は日置東低地部の北西端部に続くものであり、表層地形にみられる谷地形と対応している。この遺跡で見つかった自然流路跡の流下方向を推定するならば、流路は地籍図に見られる微高地群の接点である部分と対応する現在の表層地形に見られる谷地形が有力な候補となろう。同様な微高地群の接点としては、須依落合低地部の北西端部で⑮佐屋微高地群と⑯柚木須依微高地群が接している部分において、現在の表層地形に見られる津島市常盤町から愛西市柚木町にのびる南北の谷地形がみられ、中地低地部の東側で⑥中地東微高地群と⑦川原七坪微高地群が接している部分においても、愛西市内佐屋村から愛西市北一色村につづく谷地形がみられる。よって、これらの地籍図にみられる低地部と現在の表層地形にみられる谷地形の時期は、文献資料からは江戸時代前期以前にさかのぼる地形と考えられ、さらに発掘調査成果からは古代にさかのぼる可能性があり、中世においても旧河川として存在した可能性が高く、江戸時代前期にかけて埋没したものと推定できる。(蔭山)

(3) 推定される日置の古地理環境

最後に、日置本郷 B 遺跡周辺の古地理環境を考えてみたい。まず、前節までの分析から、古代から中世にかけての日置本郷 B 遺跡の周辺には河川が流れていた可能性が高いことが指摘された。また発掘調査成果から、遺跡の遺構と出土遺物の分布から、古代から中世後半期にかけて存在した自然流路などの地形の起伏に強い影響を受けた営みが想定でき、調査区からはシジミやマガキなどの汽水生の貝類が検出されている事実から、汽水域の近くに存在したことが指摘されている。

遺跡の周辺でも古墳時代前期初頭からの遺跡が

確認されており、古代以後の遺跡は多くみつまっている。このような遺跡の歴史的展開については、『佐屋町史』において服部元之氏が指摘されたものを追認するものである。この服部氏の叙述の中で、日置付近の遺跡の立地を考える上で重要なものとして山茶碗（ほとんどが12世紀後半から13世紀のもの）をともなって出土する貝類が挙げられる。服部氏の確認されたものとして、須依—稲葉遺跡（愛西市須依町～稲葉町）においてハマグリ・アサリ・ヤマトシジミ、元屋敷 A 遺跡（愛西市須依町、遺跡番号 23）においてハマグリ、元屋敷 B 遺跡（愛西市須依町、遺跡番号 23）においてハマグリ・アサリ、米野 A 遺跡（愛西市稲葉町、遺跡番号 11）においてハマグリ・アサリ、大之内遺跡（愛西市西保町、本書図 3 遺跡番号 48）においてマテガイ・ハマグリ・アサリ、城之内遺跡（愛西市西保町、本書図 3 遺跡番号 46）においてハマグリがあり、山茶碗などの考古遺物を伴わないものとして、大正遺跡（愛西市東保町）においてハマグリ・アサリ・アカガイ、梶代遺跡（愛西市東保町）においてハマグリ・カガミガイ・アサリ、二町田遺跡（愛西市西條町）においてマガキ・イタボガキ・ハマグリ・アサリが確認されている（註 5）。以上の遺跡分布から愛西市の日置町から稲葉町や須依町を経て、西條町や東保町、西保町にいたる北東から南西にかけての標高 -1.0m ~ -2.0m の範囲が、中世の汽水域の近くに面する地域と考えられないであろうか。つまり、これらの地域が中世において海岸を臨む陸上河川との境界付近にあったと考えられる。加えて、等高線の間隔の広さは地形の傾斜が緩やかであることを示す。表層地形解析から調査地点の南東に標高 -2.2m ~ -1.4m までの等高線間隔の広い部分が認められ、緩やかな地形が開けた海岸の入り江状を呈する地形を形成していたと推定される。

そして中世において愛西市日置町付近に存在した日置荘では、年貢が絹によって納められていたように、尾張南西部の荘園では絹が盛んに生産されていたことは著名なことである（註 6）。その原風景ともいえる記述が先の述べた『海道記』の中にあり、河川などから上がった陸地では、桑が

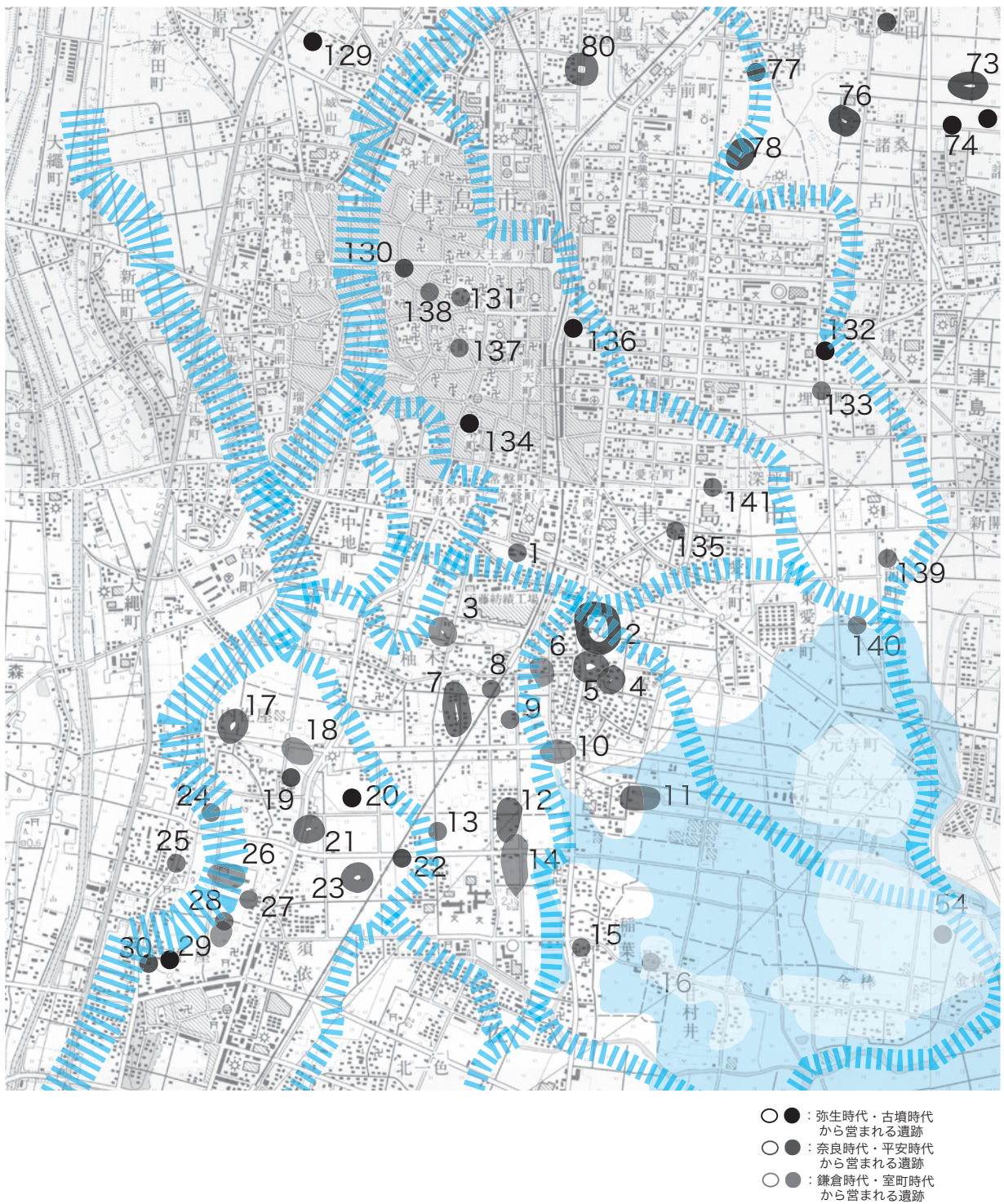


図 57 日置の古地理環境想定図

(青色点線は推定河川、青色編み掛けは推定入り江、遺跡番号は本書第1章表1に対応する)

日置本郷 B 遺跡

生える畑地が存在し、宅などの建物がたち、駒が
放し飼いにされている景観が広がっていたのであ
る。
(鬼頭・蔭山)

[註]

(1) 服部元之 1996 「第二章 考古」『佐屋町史』
通史編、佐屋町史編纂委員会

(2) 湯浅健二・江崎武・赤塚次郎 1990 「蜂須賀
遺跡と「海部の古道」」『考古学フォーラム』1、
愛知考古学談話会

(3) 赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司・城ヶ谷和弘・
池本正明 1990 「寺野遺跡の出土遺物について
海部郡周辺の遺跡を探る」『考古学フォーラム』2、
愛知考古学談話会

(4) 水野時二 1971 『条里制の歴史地理学的研究』
大明堂

(5) 海部・津島地域において、12世紀から13世
紀の山茶碗が出土する遺跡として、愛西市二子町
所在の北柳原遺跡において、山茶碗などとともに
ハマグリ・シジミ・アサリ・アカガイなどが出土し、
津島市宇治町所在旭羊毛構内遺跡（図3遺跡番号
122）において、12世紀後半～13世紀の山茶碗
などの陶器とともにシジミ・ハマグリ・カキなど
が、津島市中一色町所在中一色町遺跡（本書図3
遺跡番号127）において鎌倉時代から室町時代の
土器と陶器に混じってハマグリ・カキなどが出土
している。

服部元之 2000 「第2章考古」『八開村史』通史編、
八開村役場所収の「北柳原遺跡」

伊藤晃雄編 1970 『津島市史』資料編（一）、津
島市教育委員会所収の「宇治町旭羊毛構内遺跡」・
「中一色町遺跡」

(6) 大山喬平 1978 「絹と綿の荘園」『日本中世農
村史の研究』岩波書店

その他の参考・引用文献

佐織町史編さん委員会 1987『佐織町史』資料編二、
佐織町役場

佐織町史編さん委員会 1989『佐織町史』通史編、
佐織町役場



日置本郷B遺跡及び日置八幡宮から南を望む



南から日置本郷B遺跡を望む（中央の大きな屋根が明通寺、その背後が日置八幡宮）

写真図版2 遺構



Aa区全景（北より）



Aa区全景（南より）



003SK 遺物出土状態（西より）



008SK 土層断面（東より）



005SK・006SK 検出状況（南より）



005SK 骨片出土状態（東より）



014SK・015SK（北西より）



015SK 銅銭出土状態（北西より）



Ab区全景（北より）



Ab区全景（南より）



Ab区中央部（北東より）



095SB（南西より）



063SK 土層断面（南より）



066SK 土層断面（東より）



Ac区全景（北より）



Ac区全景（南より）

写真図版4 遺構



035SD・041SD (北東より)



Ac区中央部 (南西より)



025SK 礫出土状態 (西より)



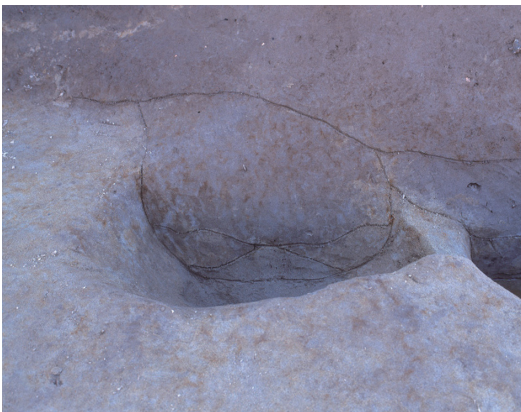
025SK 完掘状況・土層断面 (西より)



044SK 土層断面 (南より)



035SD・049SK 土層断面 (東より)



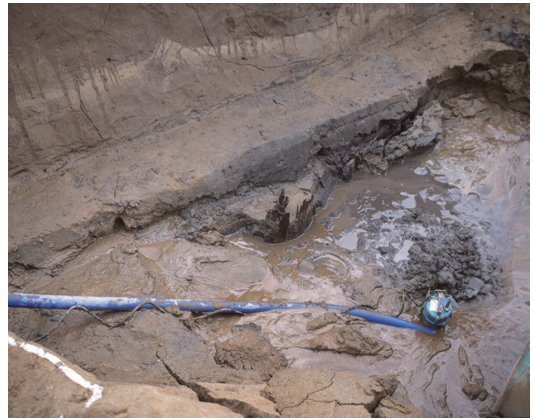
039SK 完掘状況・土層断面 (東より)



040SK 完掘状況・土層断面 (東より)



018SE 土層断面 (南より)



018SE 木組み出土状態 (北西より)



097SX 検出状況 (北西より)



097SX 298・299 出土状態 (北西より)



097SX 周辺東壁土層断面 (北西より)



Ad区全景 (南より)



096NR 東壁土層断面 (北西より)



094SD 周辺東壁土層断面 (西より)



Ba 区全景（北より）



Ba 区西壁土層断面（東より）



Bb 区全景（南より）



Bb 区東壁土層断面（西より）



Bc 区貝層検出状況（北より）



Bc 区東壁土層断面（西より）



Ca 区貝層検出状況（南東より）



Ca 区東壁土層断面（西より）



Cc区全景（北より）



Cc区東壁土層断面（西より）



Cd区全景（南西より）



Cd区東壁土層断面（西より）



Ce区全景（北より）



Ce区東壁土層断面（西より）

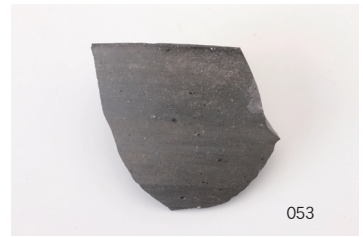


Cf区全景（北より）



Cf区東壁土層断面（西より）

写真図版 8 遺物











466



462



472



479



121



126



149



283



392



282



451



501



502



503



504



143

177

312

緑釉陶器



青磁



白磁



加工円盤



陶丸



S03



S10



S11



土錘



製塩土器

写真図版 14 遺物



鉄製品

抄録

ふりがな	へきほんごうビーいせき
書名	日置本郷B遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第177集
編著者名	石田泰弘・蔭山誠一・鬼頭剛・黒沼保子・中村健太郎・宮腰健司
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567-67-4163
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へきほんごう 日置本郷 ビーいせき B遺跡	あいちけんあいさいし 愛知県愛西市 へきまちほんごう 日置町本郷	232327	37005	35度 9分 50秒	136度 43分 4秒	2010.12 ～ 2011.2	1,100	県道富島津 島線自転車 歩行者道設 置

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日置八幡宮 遺跡	集落跡	奈良時代・ 平安時代 鎌倉時代・ 室町時代 江戸時代	溝1条・土坑10基 掘立柱建物1棟・ 溝4条井戸1基・ 土坑25基 溝3条・土坑1基	須恵器・灰釉陶器・土師器 ・製塩土器 山茶碗・小皿・青磁・白磁・ 土師器・土錘・古瀬戸陶器・瓦・ 砥石・井戸組み板 陶磁器・土師器・砥石	古代から中世にかけ ての集落跡

文書番号	発掘届出(21埋セ第77号、平成21年10月22日付) 通知(21教生第1689号、平成21年11月12日付) 終了届・発見届・保管証(21埋セ第118号、平成22年3月1日付) 監査結果通知(21教生第2719号、平成22年3月29日付)
------	---

要約	奈良時代から平安時代前期にかけての遺構と遺物、平安時代末から室町時代にかけての遺構と遺物、江戸時代後期の遺構と遺物が確認され、奈良時代から平安時代前期には集落跡の居住域が営まれ、平安時代末から室町時代にかけては、集落跡の居住域と墓域が推定された。そして、遺構・出土遺物の分布状況から、奈良時代から室町時代にかけての集落跡が、江戸時代後期の集落跡に比べて、自然地形の起伏による影響をより強く受けて形成されていた状況がみられた。
----	--

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集

日置本郷 B 遺跡

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社